俺の学園生活

ＢＪ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の学園生活

【Ｎコード】
Ｎ４５１２Ｉ

【作者名】
ＢＪ

【あらすじ】
この話は主人公西谷　直哉の毎日の会話を綴ったお話

一日目　入学式（前書き）

初めての投稿です。到らないところが多いと思いますが最後まで見て下さいお願いします。

一日目　入学式

いきなりだけど俺の名前は西谷（にしたに）　直哉（なおや）
桜林学園の高校一年生
勉強や運動は普通より上？かな。わからない
まあ自己紹介はこれくらいで今俺がいるのは桜林（おうりん）学園の自分の教室だ。
「なぁ、直哉ぁ～・・・ヒマだぁ」
「・・・そうですね」
めんどくさいので棒読みで返してやる
「なんか心が篭ってない感じなんだけど」
「篭めてねえからな」
「・・・」
さて、邪魔物が黙ってくれた所でコイツの紹介をしよう
コイツ。さっき話かけてきたやつは天野（あまの）　竜二（りゅうじ）俺の親友だ。身長は高くて運動がかなり出来るがアホだ。他に言うことは金髪だとだけ言っとこう
ついでに今は入学式の時間が来るまでの待ち時間だ
それから5分ほどしてからこのクラスの担任の若い男先生が声を出す
「はい、じゃあ今から体育館に移動しますので廊下に並んで下さい」
クラスの生徒はぞろぞろと廊下に出て行く
俺は目の前で背伸びをしている竜二に話しかけられる
「やっとかぁ～・・ほら直哉行こうぜ」
「わかってる」
俺は竜二にそう言ってから席を立つ
「では、ただいまより入学式を開会・・・校長先生からご挨拶です」
教頭の言葉で校長が壇上に上がる
それと同時に周りがざわつく。それもそのはず校長が若かった。て

いうか若すぎる見た目は俺達と同じ高校生だ。性別は女　髪は茶色で少しパーマがかかっている。
そして校長がしゃべりだす
「皆さん。おはようございます。今は春で桜が目立つ時期になり・・・」
「（内容は一緒なんだ。声も若いな）」
なんて思いつつもう興味が無くなったかのように眠りにつく

眼が覚めた時にはもう後半に差し掛かっていた
「・・・では以上を持ちまして入学式を閉会致します」
皆がぞろぞろと体育館を出て行く俺もそれに続いて竜二と一緒に帰路に着いている
「直哉！俺は早速学園七不思議の一つを見つけたぜ！聞きたいか？」
竜二がハイテンションで話しかけて来るどうせあの校長のことだろうとわかっていたのでここは無視を選択する
「そうか。そんなに知りたいか。仕方ない教えてあげよう。実はあの校長が学園七不思議に入っていると俺は予想している。どうだ気付かなかっただろう。ハッハッハッ」
竜二が高笑いをしているせいで周りから視線が集まる
「（ああ、おまえがここまでアホだとは気付かなかったよ。いろんな意味でな）」
哀れみの視線を竜二に向けていると竜二はキョロキョロと辺りを見回す
「なあ直哉、俺なんか視線を感じるんだけど」
「（うん、それはね君がバカだから皆見てるんだよ）」
俺は竜二を温かく見守っていると竜二が何かがわかったように手を手で（ポン）と叩くと口を開く
「そうか！俺の美貌で皆の目を奪ってしまっているのか！フッ俺は罪作りなやつだな」
「ああ、ホントにな死ねばいいのに」

俺が満面の笑顔を竜二に向けて・・・走る
「あっ、おい直哉なんで走るんだ。ちょっ待て」
竜二が俺の方に手を出して突っ立っているが無視して俺は走り続ける
「ごめん竜二、俺竜二が耐えられない」
俺の眼にはうっすらと涙を浮かべているのはここだけの話。

一日目　入学式（後書き）

やっと初の投稿です
誤字の訂正や感想・評価等をくれると有り難いです。よろしくお願いします

竜二「よっしゃ。初投稿やったぜ。やったなぁ。直哉」
直哉「・・・ぐずっ・・・」
竜二「ど、どうした直哉。なんで泣いてるんだ？」
直哉「・・・・・だからね」
竜二「えっ？何？聞こえない」
直哉「・・・な、泣いてなんか、な、無いんだからね」
竜二「・・・お、おう。そうか」
直哉「・・・・・」
竜二「・・・・で、ではまた次の話しで待ってるぜ」

とまぁこんな風に後書きで雑談とかしたいのでよろしくお願いします。

二日目　朝御飯と岡崎（前書き）

この話も読んで頂けるとうれしいです

二日目　朝御飯と岡崎

「・・・・・」
今日は入学式の翌日。曜日は火曜日だ。時刻は６時
「・・・もう少し寝れるけどどうしよう・・起きよう」
俺はベットから降りて壁に掛けている学園指定の制服に着替えて居間に向かう。居間に向かう途中で居間の方から何か音が聞こえる
「・・・？なんだろう」
居間の扉を開けるとそこには料理をしているちづ姉がいた。ちづ姉の名前は西谷（にしたに）　千鶴（ちづる）俺の実の姉だ。髪の色は茶色でストレートヘアー。俺とは違い今は俺と同じ学園の完璧生徒会長様だ。才色兼備、文武両道等はちづ姉のためにあるようなものだ。俺が扉の前で突っ立っているとちづ姉がこちらに気が付いた。
「あっ直ク～ン・・ヒシッ」
ちづ姉が擬音語を言いながら俺に抱き着いて来た。まあちづ姉に問題があるとすればここだいわゆるブラコンだ。
「ちづ姉離れて下さい」
「やだ、だって昨日の夜から会えなかったんだもん」
ちづ姉はそう言って腰に回してる手に（ギュッ）と力を入れてきた
「当たり前じゃないですか。もう子供じゃないんですから」
「ウーッでも一緒に居たいんだもん・・・直くんは違うの？」
ちづ姉が眼をうるうるさせながら俺を見上げる。こういう時の俺は何も言えないので
「・・ちづ姉何を作ってるんですか？」
「ムッ、何かごまかしてる気がするけど今直くんの弁当を作ってるんだよ」
最初ちづ姉は頬を膨らませて少し怒ったような顔をするがすぐに笑顔になった
「ほらほら直くんすぐに朝御飯作るから椅子に座って待っててね」

「あっちょっとちづ姉そんなに引っ張らなくても」
ちづ姉は俺の腕を引っ張って俺を椅子に座らしてキッチンに向かって朝御飯を作る。ジューという何かを焼いている音がして、ちづ姉が俺の方を見て
「そういえば直くん起きるの早いね」
「んっ？まあ早く起きちゃっただけだけど」
「フ～ンそっかぁ。・・・ハイ朝御飯」
ちづ姉はそう言って俺の目の前にベーコンと目玉焼きというベタな朝御飯を置く。俺はそれを口に運ぶ
「（ウ～ン、ベーリーシャス・・ちょっと変になった気がするけど気にしない）」
「・・・どう？」
ちづ姉が不安そうな顔で味を聞いてくる
「うん。美味しいよ」
「ホントに！？よかったぁ」
ちづ姉は胸を撫で下ろす
「（ちづ姉っていつも心配し過ぎな気がするんだけど、黙っとこ）」
俺は朝御飯を食べ終わるとカバンを持つ
「行って来ます」
「行ってらっしゃい」
とちづ姉に送られながら家を出て学園に向かう

俺は学園の自分の教室に入る。クラスは１－Ｃ。各学年に四組ありＡ～Ｄとある。
「・・あっ、俺以外にもう一人いた」
教室の中に読書をしている女子が一人だけ（ポツンッ）といた。俺は仲良くなっても損は無いからと話しかける
「おはよう。俺はこのクラスの西谷　直哉です。君の名前は？」
初めてなので丁寧に話す。そう聞くと彼女はゆっくりとこちらに顔を上げてゆっくりと口を動かす

「・・堀川、杞沙」
堀川（ほりかわ）　杞沙（きさ）これが彼女の名前らしい。
「そっか、じゃあ堀川さんこれからよろしく」
俺の言葉に彼女は（コクり）と頷いた。俺は席に戻って時間が来るまで待っていると堀川さんがこちらにやってきた。
「どうしたの？堀川さん」
「・・・これ」
堀川さんは俺に本を差し出す
「？これは何？」
「・・・本」
「うん。それは分かるけどこの本がどうしたの？」
「・・・読んで」
「読むの？うん、わかった」
俺は堀川さんから本を受け取ると堀川さんは自分の席に戻って行った。俺が堀川さんから渡された本（ジャンルはファンタジーで勇者がドラゴンを倒しに行くという話だった）を読んでいるといきなり肩を叩かれた
「よっ、直哉何の本読んでんだ？」
竜二だ
「さぁなよくわからない（堀川さんが何でこれを俺に渡したのか）」
「フ～ン、まあいいや。それより直哉何で昨日走って帰っちまったんだよ」
「・・・ウ～ン、忘れた」
本当は覚えてるけど竜二のために黙っておく
「そっかじゃあ思い出したら教えてな」
「ああ、わかった（一生教えないけどな）」
そうこうしているうちにチャイムがなって昨日と同じこのクラスの男担任がやってきた。
「皆さん。おはようございます。今日は自己紹介をしたいと思っていたので自己紹介をしていただきます。ではまず先生から言います

ね。えー、名前は昨日も言いましたが武中（たけなか）　智也（ともや）です。歳は27でこの学園二年目です。それとこの学園の卒業生でもあります。これから一年間君達の担任をします。よろしくお願いします。・・では、次に左から出席番号順に言っていただきます。出席番号、名前、趣味、特技等を言っていただいて最後に一言お願いします。では、出席番号1番の秋葉さんからお願いします」

武中先生の言葉で秋葉さんと呼ばれた人が立つ

「出席番号1番、秋葉（あきは）　奈穂（なほ）趣味は人間弄り、特技は鞭で人を打つことあと人を縄で縛ること、最後の一言は皆私が縛ってあげるからいらっしゃい」

秋葉さんが（ニヤリッ）と嫌な笑みを浮かべる。

・・・・・・・・・・

（この人に逆らってはいけない）

とクラスの皆が悟る。（シ～ン）と静まりかえる中。秋葉さんの次の人が立ち上がる。

「えっとぉ、出席番号2番、上原（うえはら）　昇（のぼる）、趣味は人間観察と人体実験、特技は人間解剖、最後に一言・・皆俺に解剖させてくれ」

上原という人が席に（スッ）と座る

・・・・・・・

（空気悪!?フザケンな!何なんだあの二人は!早く次のやつ来い!!）

さっきの二人とその次の人以外のクラス全員がその次の人を一斉に睨む。するとその次の人の肩が（ビクッ）と跳ね上がる。そしてその次の人がいきよい良く立ち上がる。

「ぼ、僕の、しゅ、出席番号は、3番で、お、岡崎（おかざき）　結城（ゆうき）です、しゅ、趣味はえーと、えーと、えーとえーとえーと・・・えーと・・・フシュゥ」

（バタッ）

岡崎が倒れた。そして武中先生が岡崎に駆け寄る

「岡崎くん大丈夫ですか?岡崎くん、岡崎くん」

武中先生が声をかけているが岡崎は反応しない・・・ただの屍のようだ・・・って違ーう！大丈夫か岡崎、岡崎ぃーーーー！！

岡崎は病院に運ばれて何とか一命を取り留めた。

岡崎が病院に運ばれたのでそこで授業終了皆無事に帰ったとさめでたしめでたし

二日目　朝御飯と岡崎（後書き）

この話を読んで誤字訂正・脱字訂正・感想・評価等をくれるとうれしいです

竜二「あのさぁ。あの岡崎ってやつ、かなりかわいそうじゃなかった？」
秋葉「フフッだったらあなたが代わりにヤラレる？」
竜二「いえっ！遠慮します！」
秋葉「そう。残念ねぇ。フフフッ」
竜二「・・・あ、あとは頼んだぞ。岡崎」
岡崎「えぇっ！？僕！？病み上がりなのに！た、助けて誰かぁ～」
上原「じゃあ。俺が手伝ってあげるよ」
岡崎「余計ダメだよ！しかも手伝うんじゃなくて助けてほしいだよぉ～」
秋葉「大丈夫よ。痛くしないから」
上原「ああ。むしろ気持ち良くなるだろな」
秋葉・上原「フフッフフッフフフフッ」
岡崎「イ、イヤァァァァーーーーーーー」

三日目　銃撃戦

「・・・・します」
「はい。以上で男子２１人女子１９人計４０人皆さんの自己紹介は以上で終わりました」
入学式から二日後水曜日。ついさっき皆の自己紹介が終わった。武中先生が一息入れてから話しだす
「・・・では、まだ時間が余っていますのでそうですねぇ。ウ～ン、はい。では、外に出ましょう」
武中先生の言葉にクラスの一人が代表してしゃべる
「先生、外に出てどうするんですか？」
その言葉に武中先生は笑顔で返す
「もちろん、外で鬼ごっこをします」
〔・・・・・・・じゃあ、皆お疲れ〕
クラス全員が同時にカバンを持ち、同時に同じ言葉を発する。皆はぞろぞろと廊下に出て行く
「ごめんなさい。待って下さい。お願いします」
武中先生が土下座をして謝る
（先生プライドねぇ～）
生徒は皆同じことを思って自分の席に戻る。それを見た武中先生は（ふぅ）と一息ついてから生徒を見回す
「それじゃあ、改めて何をするか考えましょう。皆さんは何がいいですか？」
（・・・・・・・）
クラス全員黙り込む。武中先生はまた笑顔で
「いないようなので、じゃあ鬼ご・・・」
（ビシッ）

クラス全員一斉に手を挙げる
「・・そうですか、残念ですね。じゃあ川嶋　康太君どうぞ」
武中先生に名指しされた生徒川嶋（かわしま）　康太（こうた）が立ち上がる。
「・・・じ、じゃあ殺し合いで」
〔・・・・・はい？〕
皆が声をハモらせて聞き返す。ただ、武中先生と出席番号1番2番の秋葉と上原を除いて
「いいですねぇ。それじゃあ殺し合いにしましょう」
武中先生が承諾するそれに続いて・・・
「いいわねそれ。乗ったわ」
「確かにこれほどいい遊びはねぇな」
秋葉・上原と続く
〔乗らなくていいし！いい遊びでも無いから！！あと先生あなたよく先生になれましたね！〕
三人以外の皆が全力でツッコミを入れる。それでもこの三人は止まらなかった
「では、倉庫に銃がありますので取りに行って来ます」
武中先生が廊下に出る
〔取りに行かなくていいから！それに何で学園に銃があるの！あと先生、俺達皆先生はもっといい人だと思ってました！！訂正します。先生は悪い人です。俺達の中で株大暴落です〕
クラス全員叫びだす。ただし二人を除いて
「フフッ私の中で智也の株が急上昇しているわ」
〔しないで下さい！あと先生を呼び捨て！？〕
秋葉に皆がツッコミを入れる
「さぁて、誰から殺そうかなぁ」
（ビクッ）
上原が口の周りを舐め回すのを見て全員ビビる
（どうしてこうなったんだろう。・・・そもそもこれは川嶋のせいだ！）

「ヒッ・・・み、皆さん一体どうしたのかな？どうして俺を見ているのかな？」
川嶋がビクビクしながら皆に尋ねる。クラスを代表して川嶋の隣の席の男子が尋ねる。
名前は確か平永（ひらなが）　寛司（かんじ）だ
「なぁ、康太。何で数多い中で殺し合いを選択したんだ？」
康太と呼んでいるから平永と川嶋は仲がいいみたいだ。平永の問いに川嶋は答える
「今読んでる本が殺し合いの話しだから、とっさに出ちゃった。テヘッ」
〔テヘッじゃねえよ！！〕
「すいません。すいません。すいません」
クラス全員で叫ぶと川嶋が何度も謝る。

そして、今俺はベタな校舎裏にいる。本当に殺し合い（銃撃戦）が始まってしまったのだ

ルールは簡単です。最後まで生き残った人の勝ちです。この銃で撃たれた人がその時点であなたは負けです。あっもちろん死にはしませんよ。ケチャップ弾です。弾数は三発で、替え弾はありません。他人のやつで撃ってもダメです。撃たれた人が撃った弾は無効となります。先に撃たれたのがどっちとかはこちらが把握しているのでわからない人は先生に連絡して下さい。場所は学園全体です。チャイムがなったら終了です。すぐに教室に戻って来て下さい。では、今から三分後に開始です。では皆さんご無事を祈っています。ではスタート

これが武中先生が話した全貌だ。今は銃撃戦が開始してから5分が経った。後４５分だ
「（・・・たくっ武中先生も最悪だな。たった三日でこんなになる

とは・・先が思いやられるなぁ・・・ハァ・・）」
ため息をついていると目の前に人が来ている。あれは川嶋だ。俺は草影に隠れているからまだ見つかっていない。
「（・・・よしっ先手必勝だ）」
俺はそう呟いて草と草の間から銃を出して川嶋に銃口を向ける
（パンッ）
と銃で撃つと川嶋の服にケチャップ弾が付いた
「（ごめんな。川嶋。後で謝るから帰ってくれ。おまえがいると他の人にばれるからな）」
川嶋は何処から撃たれたのかわからないのでキョロキョロと辺りを見回す
「（・・・早く帰れやぁ！。川嶋。おまえは死んだんだ。大丈夫だ俺がおまえの分も生き延びてやるから）」
だが、俺の思いは届かず川嶋はまだ辺りを見回す
「・・・・・早く帰れやぁ！！」
俺は全力で叫んでしまった
「・・・しまった」
俺は川嶋を一発殴ってから場所を離れた

ただ今の弾数、二発

ＡＫＩＨＡ　ＳＩＤＥ

「さて、何処から攻めようかしら・・ん？」
私は何処から攻めるか悩んでいると私の後ろから人の気配がしたので振り返るとそこには１－Ｃの連中が二人いた。私は微笑を浮かべ彼らに・・突撃する。彼らは一瞬遅れて応戦する。私はそれをしゃがんで避けさらに脚を加速させて彼らの一人の懐に入るとその人を背負い投げで倒しもう一人には足で相手の銃を蹴り飛ばす。私は休

む暇無く彼らの銃（一つは手に持っていて、もう一つは遠くに飛ばした）を取り一息付いた。
「・・・フゥ・・」
「おい、お前反則だぞ」
彼らの一人（蹴りで銃を取った方）が私に言い放つ
「心外ね。私は反則なんてして無いわ」
私がそういうと彼は
「おもいっきりしているだろ」
「何処が？」
私が質問をする
「何処？って、俺達に暴力をしたし、他人の銃を取ったらダメだって言ってたろ」
「暴力はダメだって言われて無いわ。あと銃は取ったらダメなんじゃなくて使うのがダメなだけよ。嘘を言わないでくれる」
私の言葉に彼はたじろぐ。私は踵を返して歩を進める

ＵＥＨＡＲＡ　ＳＩＤＥ

「ハハハハハハハハハハハ・・・」
俺は校舎を笑いながら走り続ける。誰一人俺を撃ってこようとしない・・そう相手にされていないのだ。もうかれこれ広い校舎内を三週は回った。これほど寂しいことはあるか？いや、ない。今にも精神が壊れそうなので止めることも出来ない。
俺、上原昇は今も走り続ける

ＲＹＵＵＺＩ　ＳＩＤＥ

「・・はぁ・・はぁ、はぁ・・はぁ」
俺は今理科室に居る。今理科室に居るのは俺を入れて五人。相手は皆チームを組んでいる。この状況では普通にやっては勝てない。皆

（俺を含め）弾を一発は撃っている。
「（・・さて、この状況でどう切り抜けるか・・扉までは１０メートル、俺と扉までの間には敵は三人か無理があるかもな・・・仕方ないな、ここは運に任せるか）」
俺は息を整えてから・・扉に向かって走る。まず一人目は腕を押さえて人壁にして相手の弾を各一発ずつ防ぎ人壁にしたやつを前に投げる。前にいた敵は俺が投げたやつを避ける為に俺からそいつへと視線を変える。俺はそのスキに前にいた二人を抜け最後の一人は銃で撃つ。そして俺は転がり俺が向かう扉の逆の扉の方にいる二人の弾を避け扉に走って行く。

「はぁ・・はぁ・はぁ・・・はぁ」
俺は全速力で校舎内を出て行って今は校舎裏にいる息を落ち着かせる。スッと俺の前に人が来る。そいつはあの川嶋と話していた平永だった。俺はすぐに平永に銃を向ける。平永は俺の前で手を挙げて
「待て」と制止させる。俺は注意しながら平永に耳を貸す
「なぁ、あんた天野だろ？だったら俺と一対一で勝負しないか？」
「・・・いいぜ」
俺は平永から１メートルの所まで行き後ろを向く
「・・・じゃあ三歩進んだら開始だいいか？」
「・・・ああ」
俺は平永の声で動く
「・・・１・・・２・・・３！！」
俺は平永の合図で横に飛び体を捻って銃を構える。対する平永も俺と同じことをしている。二人は同時に引き金を弾く・・・・・二人の弾はぶつかり合って何も無い所で落ちる。
（・・・・・・）
最初に声を出したのは平永だった
「・・・・俺の負けか。・・撃てよお前の勝ちだ。俺はもう弾は無いからな」

平永が地べたに座り込む
「残念だがそれは出来ない。俺も弾が無いからな」
俺は近くの壁に寄り掛かる

ＨＯＲＩＫＡＷＡ　ＳＩＤＥ

「・・・・動かないで」
「は、はいぃ」
私が岡崎結城の後頭部に銃口を突き付けると岡崎結城が怖がりながら手を挙げて動かない。私はそれを見て・・・
「・・・・・・」
（パンッ）
撃った。
岡崎結城が（パタッ）と倒れる
「・・・・任務、完了」
私は岡崎結城を引きずりながら道を進んで行く

ＮＡＯＹＡ　ＳＩＤＥ

もうあれから３５分経過して後１０分という時だった。放送が聞こえる
「・・聞こえますか？１－Ｃの皆さん。先生の思った通り何人か残りそうなので先生を捕まえた人の勝ちとなります。あと生き残っているクラスの人は五人となります。あっ、言っときますけど先生を撃っても終わりではありません。ただ、１０秒間止まるだけですのでご了承下さい。最初に先生に触れた人の勝ちとします。では、始めます・・」
放送が終わる
「面倒なことになったな」
直哉は嘆息してから歩を進める

「待てぇ。この野郎」
「そんな恐い顔をして追いかけられたら止まりたくても止まれません」
鬼のような顔で武中先生を追いかけるのは上原
「頑張ってるな、そのまま武中先生を追い詰めてくれ」
俺は回り込むように移動する。
その行動が読まれたかのように俺の目の前に秋葉さんがいる。俺に銃を向けている。
「しまっ・・」
（パンッ）
銃声が聞こえ俺の胸にケチャップがつく
「（・・終わったな・・結構楽しめたな・・あっ川嶋の分も生きるって言ってたけどお前の何倍も生きたからもういいよな）」

ＡＫＩＨＡ　ＳＩＤＥ

「（・・・・ふぅ。まず一人死んで私を入れて後四人ね。そのうちの一人はまだ来ていない今いるのは私の後ろの席にいる上原という人とあれは誰かしら？此処まで来れたということはそれなりに力はあるということなんだけど）」
私は上原じゃなくて女（堀川）の方を見ながら考える
「（・・・・まあ、いいわ。先に殺したらいいだけだから）」
私はその女（堀川）に銃を向けて引き金を弾く
（パンッ）
（スイッ）
しかし私が狙った女（堀川）は体を翻してケチャップ弾を避ける
「（・・・フッ・・なるほどね。相手にするだけ無駄って訳ね）」
私は智也（先生）の方に走り始める
「（私の残り弾数はあと一発のみ・・さて何処で使おうかしら）」

ＵＥＨＡＲＡ　ＳＩＤＥ

「待てこらぁ！！あんたのせいで俺省られたんだよぉ！！」
「知りませんよ。先生のせいじゃありません」
「待てこらぁ！！！」
上原はまだ先生を追いかけている。

ＨＯＲＩＫＡＷＡ　ＳＩＤＥ

「・・・・・・・」
私は歩を進めて武中智也に向かう
「・・・・捕まえた」
（ガシッ）
私は武中智也を捕まえた。
「「「えっ！？」」」
私以外の武中智也、上原昇、秋葉奈穂が驚く
「・・・・・これで任務完了」

終わり。

後一人はもちろん竜二ではありません。クラスの一人です。

三日目　銃撃戦（後書き）

また来ましたＢＪです。この話を読んで下さってありがとうございます。
誤字訂正、脱字訂正、感想、評価等をくれるとうれしいです

秋葉「・・・ねぇ、あなた一体何者？最後尋常な動きだったわ。軽く１００メートルはあったのだけど」
堀川「・・・・・・・」
秋葉「・・・そう、だんまりを貫くのね・・・まあいいわ。だいたいの予想はついてるから」
直哉「えっ！？何か予想ついてるの？一体何？」
堀川「・・・・・・　・」
秋葉「そんなに睨まなくてもいいわ。どうせ何も言わないから」
堀川「・・・・・そう」
直哉「えぇっ！？教えてくれないの？」
秋葉「聞かれたら何でも答えなきゃいけないの？」
直哉「いえっそんなことは・・・あっ、そ、そうだ竜二お前は誰にやられたんだ？」
竜二「ああ、俺は残党狩りのやつらにやられた」
直哉「えっ残党狩り？」
竜二「ああ」
直哉「・・・・・・・・」
竜二「・・・・・・・・」
直哉「・・・・そ、それではまた次のお話でお会いしましょう」

四日目　二人

今は木曜日の昼休み。俺は竜二と昼飯を食べていると秋葉さん・上原君という順で話しかけてきた
「私は秋葉奈穂よ。あなたの名前は？」
「ついでに俺は上原昇。よろしく」
二人に合わせて俺・竜二の順で自己紹介をする
「俺は西谷直哉」
「俺は天野竜二」
二人同時に「よろしく」と言う。
「私のことは奈穂でいいわ。それであなたのことは直哉と呼ばせてもらっていいかしら？」
秋葉さんが俺を見て言う
「はい、直哉でいいです。これからよろしく奈穂さん」
「俺はりゅ・・」
「あなたには聞いてないわ」
「なにいいいいいーーーーーーーー！！」
秋葉さ、奈穂さんに竜二が叫ぶ
「な、なぜだ！何故俺を省く」
奈穂さんが竜二に一つため息をついてから
「理由？簡単よ。あなたに興味が無いから」
「そういう問題！？」
「それだけで十分よ」
「いやいや十分じゃねえし・・・ってじゃあ直哉には興味があるってことか？」
「そうね。そういうことになるわ」
「・・・・・・・」
「・・・何かしら？私の顔に何かついてるの？」
「・・・いやぁ何も」

竜二がニヤニヤしながら奈穂さんを見る
「・・・・キモいわね」
「ほっとけ！・・でも、なるほどなぁ・・フッフッフッ」
奈穂さんは竜二に大きなため息をついて呆れながら
「・・・・残念だけどその読みはハズレよ。私が持っている興味はあなたが考えてるようなことじゃ無いわ」
「じゃあ他に何があるって言うんだよ」
「あなたは見た目通りホントに考えが浅いわね。だからあなたに興味が無いのよ」
「うるせぇ！！じゃあ直哉に興味があるのは頭が良いからか？」
「・・・・・・ハッ」
奈穂さんが鼻で笑う
「浅いわね。あなたの知能は小学生ラベルなのね」
「（ラベルじゃなくてレベルだけどね）」
俺は奈穂さんにツッコミを入れる
「なっ、じ、じゃあ他に何があるって言うんだよ？」
「・・・・・あなたの負けね」
奈穂さんはそれだけ言い放って自分の席に戻って行く。対する竜二は（キィー）と頭を掻きむしっている。俺は竜二の肩に手を乗せて口パクで「ドンマイ」と言ってあげる。ついでに俺も奈穂さんが俺にどんな興味があるのかはわからない。そこに上原君が口を開く
「竜二。気にするな。俺は昇で良いからな。よろしくな直哉と竜二。それじゃあ俺戻るな」
昇も席に戻って行った。俺はここに来てやっと竜二に話しかける
「ほら昇も言ってたろ？気にしない方が良いよ」

この言葉が余計竜二を追い詰めていると気付いていたのは奈穂さんだけだった

「・・・・・・予想通り」

四日目　二人（後書き）

また来ましたＢＪです。誤字訂正・脱字訂正・感想・評価等をお待ちしております。

直哉「ところで奈穂さん。結局俺の何に興味があるんですか？」
奈穂「知りたい？教えてあげても良いけど・・・・覚悟はしておいた方がいいわ。どうするの？聞く？」
直哉「いえ！いいです！」
奈穂「フフッよろしい」
昇「直哉。どうして敬礼してるんだ？」
直哉「いえ！何でもありません！」
昇「・・・・・・」
奈穂「気にしたら負けよ」
昇「そ、そうか」
奈穂「直哉。最後は？」
直哉「はい！これを見てくださった方はまた次の話も見て下さるとうれしいです！ではまた次の話で会いましょう！」

五日目　一年生歓迎集会（前書き）

話しが下手くそですみません。コメディーなのに全然面白くありませんね。すみません

五日目　一年生歓迎集会

今日は金曜日。
朝から集会が始まる
「えーと、では、今から一年生歓迎集会を始めたいと思います・・・
では、生徒会長からお話がありますので生徒会長お願いします」
教頭の合図で生徒会長が檀上に上がる。生徒会長西谷千鶴（俺の姉）
が軽く会釈して話しをする
「生徒会長の西谷千鶴です。では、早速ですが一年生歓迎集会を始
めます。まず最初に桜林学園の紹介をさして頂きます。・・・この
桜林学園は四年制で一年生から四年生まであるということです。桜
林学園は行事が多い学校で毎月三個は必ずあります。今月、四月は
入学式を入れて後二つあります。一つは修学旅行。これは皆さんわ
かると思いますが旅行をするのです。各学年で行く所は違って何処
に行くかはまだ秘密です。次に学級祭。これは各クラスで何をする
かを決めることが出来て各クラスで絆を深めようという行事です。
以上で四月の行事紹介を終えます。後の五月からの行事は毎月一人
一人に桜スポの配布しますのでそちらを見て下さい。桜スポとは桜
林スポットを略しています。桜スポは桜林の注目することが書いて
あり行事を紹介するのも桜スポの役目です。以上で学校紹介を終わ
ります。続いて部活紹介に移ります。では、野球部からどうぞ」
ちづ姉と入れ替わるように野球部の部長らしき人がやってきた
「えー、野球部の部長です。野球は・・・・・・」
野球部から始まりいろいろな部活紹介を終えた

一年生歓迎集会が終わり今は昼休み。俺は竜二・奈穂さん・昇と新
たに加わった岡崎を入れて「萌え」について語っている
「だから萌えって言うのはさあ！こう今までとは違うギャップの上

で成り立ってるんだよ！」
竜二に奈穂さんが反論する
「それは、ギャップ萌えと言う萌えの一部であって萌えの全てでは無いわ」
「何ぃ？じゃあ他にどんな萌えがあるって言うんだよ！」
「萌えと言うのは全てであって全てでは無いわ」
「意味が分からん」
「萌えと言うのは言葉では語れ無いのよ。あなたは言葉で語ろうとするからギャップ萌えしか思いつかないのよ。浅はかだわ」
「何ぃ！！」
竜二が奈穂さんに講義している間の俺と昇と岡崎
「あのぅ、その萌えって言うのは一体何なんですか？」
岡崎が遠慮がちに聞いてきたのを昇が俺に尋ねながら答える
「萌えって言うのはその人の一つの魅力だよな？」
「そういう考え方もあるね。俺はその考えでも良いと思うよ？人それぞれの思い方というのが結論ということで」
俺はこの話題に終止符をうつ。
岡崎は納得したように
「へぇそうなんですか。わかりました」
と言いながらまだ講義をしている竜二を見る。対する奈穂さんは弁当をつまんでいた

「・・・・・うざいわ」
「何だとぉ！！」
「（奈穂さん気持ちは分かります）」
俺は竜二を温かく見つめていた。

五日目　一年生歓迎集会（後書き）

また来ましたＢＪです。誤字訂正・脱字訂正・感想・評価等を下さると嬉しいです

直哉「さて、やっと五日目にやって来ました。この俺の学園生活は毎日を綴って行くので次の話しは土曜日となります。次話も見て下さいお願いします。では皆さんさよ・・」
奈穂「待ちなさい。それで今日終わるつもり？」
直哉「えっ？だ、だって話題が無いですから」
奈穂「それでもここはちゃんと話しをしなさい。たとえネタが無くてもね」
直哉「でも、皆さんもしかしたら見て無いかもしれないし。だからここが無くても誰も気付きませんよ？」
奈穂「大丈夫ちゃんと見てるわ。皆私に逢いたがってるのだから」
直哉「・・・・・・・・・」
奈穂「何かしら？何か気にくわないことでもあるのかしら？」
直哉「いえ！何でもありません！」
奈穂「そう？」
直哉「・・・・・・」
奈穂「・・・・・・」
昇「じゃあまたな」

六日目　買い物（前書き）

投稿遅れました。
すいません

六日目　買い物

「ねぇ、直くん。今日予定とかあるかな？」
ちづ姉がおそるおそる尋ねてくる
「まあ別に今日は予定とか無いけど。何処かに出掛けるの？」
俺が聞くとちづ姉は（パアッ）と笑顔になって
「ホント！ならイトー〇ーカ堂に行こう！」
ちづ姉だけがハイテンションにいる中、俺はちづ姉との距離を感じた
「・・・・俺に拒否け・・」
「無いです！」
俺が言い切る前に拒否された。
「（これって結構残酷じゃね？）」
「そんなこと無いです！」
「読心術！？」
俺はビックリする
「（ちづ姉は何と読心術を習得してました。予想外です）」
「そこっ！ソフトバ〇クの名台詞を使わない！」
「これ名台詞なの！？あと俺の心を読まないでくれる！俺のプライバシー保護は？」
「直くんとお姉ちゃんの間にプライバシーは皆無です！」
「皆無なの！？何故？俺とちづ姉の間嫌な間！俺に人権を」
俺は神に求めるよう上を向いて腕を広げる
「あ、それお姉ちゃんもやりたい。お姉ちゃんに愛の手を～」
ちづ姉も俺の真似をする

約一時間後。
俺とちづ姉は神に求めるのを止める。
「「・・・・・・・・」」
二人は力尽きたように机に突っ伏する

最初に口を開いたのはちづ姉
「・・・・やっぱり、神様に求めるんじゃなくて欲しい物は自分の力で手に入れないとダメだと思うの」
ちづ姉が何かを悟ったように言う
「いやいや。良いこと言ってるようだけどちづ姉も神様にかなり求めてたからね！一時間もだよ！？ちづ姉がそんなこと言う資格無いからね！」
「・・・フッ、弟よいつまでも過去を見てたら前に進めないぜ！」
「決めてるつもり！？かなり格好悪いからね！？少なくともこれを見てくれてる読者全員ちづ姉をイタい目で見てるからね！？あとキャラ変わってるから！なんか体育会系になってるから！変えないでくれる！？」
「・・・フゥ、ねぇ直くん？お姉ちゃんなんか肩がこっちゃったみたい揉んでくれる？」
「はい！喜んで！・・・・って違ーーーーーう！ちづ姉なんで服脱いでるの！？目のやり場に困るから！あとキャラ戻ってないよ！？お姉ちゃん系なのにお姉さん系になってるから！」
俺は（ゼェッハァッ）と息が絶え絶えになっている中ちづ姉はバリやったった感を出している
「♪～♪」
見事に鼻歌を歌いながらちづ姉は自室に戻って行く。
対する俺は地面にうなだれている。

「おっ待たせぇ。直くんの大×3好きなお姉ちゃんの到着だよ～」
「別に大×3好きではありません！」
ちづ姉のボケ？にツッコミを入れるとちづ姉が今にも泣き出しそうな程に目を潤ませて
「お姉ちゃんのこと嫌いなの？」
と聞いてきた。
俺は目線を逸らしながら

「べ、別に嫌いじゃないよ」
と答える
ちづ姉は（クスッ）と笑う
「ツンデレだ。ツンデレ久しぶりに見たよ」
「ツンデレじゃねぇよ！」
俺はまずツッコミを入れてから気になったことを聞く
「ちづ姉。さっき久しぶりのツンデレって言ってましたよね？それってちづ姉にですか？」
ちづ姉が（ニヤニヤ）する
「あれぇ？もしかして気になるの？ツンデレじゃないって言ってたのに意外と脈あり？」
「ありませんよ！ただちづ姉を好きになるという物好きな人がいるってことに驚いただけです！」
「ムッ、さすがにそれは酷いです。自慢じゃないですけどこれでも意外とモテるんですよ」
ちづ姉が大きいか小さいか微妙な胸を張る。
「（そういえば、ちづ姉っていつも一緒にいるから気付かないけどかなりモテるんだよな・・・あれ？でも彼氏がいたなんて聞いたことが無いな）」
「それはお姉ちゃんが彼氏を作っちゃうと直くんが一人になっちゃうじゃん！ね？直くん思いの良いお姉ちゃんでしょ？」
「それはただ単にちづ姉が弟離れ出来てないだけでしょう！ってまた人の心を読まないで下さい！だいたいちづ姉は・・・」
「はぁい。じゃあ早くイトーヨー〇堂に行きましょう」
「あっちづ姉待って。まだ話しは終わってな・・・」

「ねぇ直くん。直くんはどっちが良い？」
ちづ姉が右に青を基調とした服と左にピンクを基調とした服を持って俺に尋ねる
「知りません。別にどっちでも良いと思いますよ？」

「ウ～ン。直くんには微妙な線なんだ・・・じゃあいいや。次、行こ。」
ちづ姉が俺を手招きする。
俺は次の店に入る前に立ち止まる
「こ、これはなんてベタな」
「どうしたの？早く来なよ」
これを見ている皆さんは俺の見ている光景を予測出来ますか？
正解は下着売り場です。
当たった人おめでとうございます。何か景品をあげたいですが何も無いんです。
ごめんなさい
俺が困惑してるとちづ姉が俺を引っ張って中に入っていた。
「・・・・なにぃぃぃぃぃーーーーーー！！」
俺が叫ぶ
「（しまった。つい竜二みたいな反応をしてしまった。反省）」
俺が反省しているとちづ姉が突然尋ねてきた
「直くんはこの水玉と黒。どっちが良い」
「すいません。ちづ姉今それどころじゃって何しとんじゃあ！！」
「えっ？何してるって直くんにどっちが良いか尋ねているだけだよ？それで直くんはどっちが好き？」
とちづ姉が右に水玉、左に黒の下着を持って聞く
「ウ～ン。やっぱり俺的にはこっちの方が・・・」
俺はちづ姉が持っている左、黒を指差す
「そうなんだ。黒を選ぶとは直くんエッチだね。よくあるベットの下にエロ本とか有りそうだから今度調べてみるね？」
「そうですか。それは・・・・・駄目ですよ！！何を言っているんですか！？ベットの下にエロ本とか有りませんから勝手に人の部屋あさらないで下さい！あと俺に下着でどっちが好き？とか聞かないで下さい！流れで答えちゃいましたけど」
「・・・怪しい・・・今度直くんがいない日に探ろう」

ちづ姉が（ボソッ）と呟くのを俺は見逃さなかった。
「聞こえてますから！駄目ですよ！探さないで下さい！」
「やだ」
「やだじゃないですって！マジ駄目ですから！」
「・・・・ねぇ直くん。それエロ本が有るって肯定しているようなもんだからね？」
「・・・・・・あっ」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・つ、次行ってみよう」
俺は半ば無理矢理動こうとすると
「ふ～ん。直哉のベットの下にはエロ本が有る訳ね？今度探してみよう」
奈穂さんがいました。一番知られたくなかった人物だ。何故か、それは学園でネタにされるからだ。たった二日程しか話してないのにここまでわかってしまう程この人はやばかった。
「・・・なんで、奈穂さんが此処に居るんですか？」
俺は自分でもビックリするぐらい冷静に尋ねる
「なんで此処に居るのかって？それは決まってるでしょ？下着買う為よ・・・そうね直哉が好きな黒にでもしましょうかしら？」
「なっ！？何時から居たんだ！」
さすがにこれは冷静では居られなかった
「直哉がこの店に入って来てからよ」
「最悪だ」
俺がうなだれているとちづ姉が声をかけてきた
「直くんこの人は？・・・まさか直くんの・・」
「違いますよ！ただの友達です！」
「・・・さすがにそこまで拒否されると傷付くわ。・・大丈夫ですよ生徒会長。直哉と私の関係は恋人未満ですから。でも直哉の隅々まで知ってる友達以上ですけどね」
奈穂さんが自己紹介の日以来の嫌な笑みを見せる

「いやいや違いますから！俺らそんな関係じゃないから」
「じゃああの夜のことはなかったことにするの？酷い！私の身体を傷付けたくせに。酷いわ。私の気持ちを弄ぶなんて」
奈穂さんが（シクシク）と泣き崩れる
「いやいや。そんな体験無いから！嘘はつかないで下さい！」
「直くん酷いです！私とこの人の気持ちを弄ぶなんて、お姉ちゃんは直くんをそんな酷い人に育てた覚えはありません！」
「いやだからこれは奈穂さんが勝手に作った嘘であって、ってなんでちづ姉も俺が弄んだ中に入ってるの！？おかしいよね！？逆に俺が二人に弄ばれてるんだけど！？」
「そんなことどうでもいいわ」
「どうでもいいです」
奈穂さん・ちづ姉と答える
「ちょっと待てぇぇぇぇーーー！！」

今俺はイ〇ーヨーカ堂の近くに有るレストランに来ていた。
「それでね。直くんったら可愛くって・・・」
「ふ～ん。そうなの」
何故かは分からんがちづ姉と奈穂さんが話している。話題は全て俺関係でちづ姉が話している。奈穂さんはただ相槌を打つだけだ。
「あっ、ちょっと私お手洗い行って来ますね」
ちづ姉はそう言って席を立つ。
今俺と奈穂さんの二人だけとなった。
「（なんか奈穂さんと二人だけだと恐い）」
俺がそんなことを思っていると奈穂さんが口を開く
「・・・明日、1時にイトーヨーカ〇に来てくれる？」
「えっ！？あっはい分かりました」
俺は勢いで承諾してしまった
「そう。残念だわ。嫌だって言ったら今日のことネタにするつもりだったのだけど」

「（よかったぁ。今日のことをネタにされたら俺もう学園に行けなかっただろうな）」
俺が安堵していると奈穂さんが立ち上がる
「じゃあ、今日はもう帰るわ。また明日1時ね」
「うん。わかった。じゃあまた明日」
奈穂さんは自分の分の金を置いて店を出た所でちづ姉が帰ってきた
「あれ？秋葉さんは？」
「帰りました」
「そっか。残念だな・・・じゃあ私達も帰りましょう？」
「そうですね。帰りますか」
俺とちづ姉は帰宅することにした

六日目　買い物（後書き）

また来ましたＢＪです。誤字訂正・脱字訂正・感想・評価等をくれると嬉しいです。

竜二「あれ？俺の出番は？」
昇「無いに決まってるだろ。俺だって無いからな」
奈穂「あなた達はサブだから必要無いのよ」
竜二・昇「なにいいいいいーーーーー！？」
奈穂「五月蝿いわ。死ねばいいのに。だいたいなんでそんなに叫ぶのが好きなのかしら？」
竜二・昇「そんなの決まっているだろう？語数を取らないと出ている感じがしないからだ！」
直哉・奈穂「・・・・・・・・」
竜二・昇「い、痛い！なんか視線がかなり痛い！哀れみの視線が痛い！助けてお母さーーーーーーん」
直哉「本当に叫ぶの好きだね」
岡崎「僕このコーナーでもギリギリの立ち位置です！」
堀川「・・・・・私も」
武中「ハハハッ先生もです」
全員「あなたはサブキャラですら無いですから」
武中「なにいいいいいーーーー！？」
全員「・・・・ここにも一人いましたね」

七日目　デート？（前書き）

前の後書きには川嶋と平永が出ていませんでした。すみません

七日目　デート？

今日は日曜日。
奈穂さんとイ○ーヨーカ堂で待ち合わせをしてしまった。
「べ、別に嫌って訳じゃないんだけどね」
「わあ、直くんがツンデレになってる」
ちづ姉が何かをぼやいている
「ちづ姉いきなり出て来ないで下さい！読者が困るから！あとツンデレじゃないですから！」
俺のツッコミを無視するちづ姉
「直くんもしかして・・・デートに行っちゃうの？」
「無視しないで下さい！デートじゃありませんから！っていうか恐いです！ちづ姉かなり恐いですから！」
ちづ姉が俺を凄い睨む・・・とすぐに落ち込んだ
「・・・そうだよね。お姉ちゃんだもんね所詮お姉ちゃんだもんね。直くんを見送らないといけない立ち位置だもんね・・・ぐずっ」
ちづ姉が目を潤ませて今にも泣き崩れそうな勢いだ
「（ヤバい。この状況は前にもあったぞ。この後俺が椅子に一週間縛られた記憶があるぞ。でも前にもあったという事はその対策も作れるという事。この状況の対策は・・・）」
俺はちづ姉の肩を掴む
「・・・ちづ姉・・俺にはちづ姉しか見えてないぜ」
「・・・直くん・・」
「（よし。ここで（キランッ）と歯を輝かせる。ちょっといや大分イタいけど。ちづ姉の為だ。気にしない）」
「・・・直くん！・・・ヒシッ」
ちづ姉が俺に抱き着く
「（久々に見たな。確か入学式の翌日だった気がする）」
俺はその事を（ウンウン）と噛み締めて。

俺はちづ姉を離す
「ちづ姉じゃあ行って来ます」
俺にちづ姉が頷く
「うん！早く帰って来てね！」
俺は軽く頷いて家を跡にする

待ち合わせのイトーヨ〇カ堂に着く。
時刻は１２時４０分。
待ち合わせの時間まで後２０分。奈穂さんはまだ来ていないようだ。
「（それはそうだよね。早く来そうな人じゃないし）」

奈穂さんが来た。
「待たしたわね」
「・・・待たしたわね。じゃないよ！いつまで待たせるつもり！？」
「そこは・いや。俺も今来た所・って言う所でしょ？」
「遅刻して言う台詞じゃないよね！？今３時だよ！俺が今来た所って言ったら俺も遅刻してる事になるからね！？俺帰ってたらどうするつもり！？」
「それはないわ」
奈穂さんがあっさりと返す
「なんでだよ？」
俺が聞き返す・・・と何て言ったと思う！？
「直哉は私に逆らえないからよ」
って言ったんだよ？
本当にそうなんだけどね！
「じゃあ行くわよ」
奈穂さんが歩き出す。俺はそれを追いかけた

「ウ～ン。これはデジャヴュと言うやつか」
右に青を基調とした服。左にピンクを基調とした服を持っている奈

穂さん。昨日のちづ姉と一緒だった
「奈穂さんってこういう服着るんですね」
「可笑しいかしら？」
「まあ変って言ったら変ですね」
「じゃあ私にどんなのを着させるの？」
「ウ～ン・・・黒？」
「それはエロい方の意味？」
「違いますよ！」
「わかってるわ。冗談よ」
奈穂さんが持っていた服を戻した
「まあこれはさすがに趣味じゃないから私から却下よ」
「じゃあどうして選んだんですか？」
「遊んだだけよ。本気にしなくていいわ」
「そうですか」
「じゃあ直哉の好きな黒の下着でも買おうかしら？」
「買わなくていいから！っていうか昨日の引っ張らないでくれる！？」
「嫌よ。私は一生引っ張るわ」
「マジか！？」
「マジよ」
「・・・・・」
「・・・じゃあ次、行きましょ」
奈穂さんが歩き始める中。俺は（トボトボ）とついて行く

「奈穂さん。今日どうしたんですか？」
俺と奈穂さんは近くの喫茶店に入っていた
「言ってる意味が分からないわ」
「どうして今日俺を誘ったの？」
「・・・特に理由は無いわ。それとも何か理由が無いとデートをしてはいけないの？」

「いえっ別にいけないって訳じゃ・・デートじゃありませんよ！ちづ姉と同じ事言わないで下さい！」
「・・・もっと相手の事も考慮して欲しいわね。そんなに全力で否定されるとさすがに来るわ」
「そうですね。すみません」
俺は頭下げて本気で謝る
「じゃあここの料金直哉持ちね」
「はい。分かりました」
「そこまで思い込む必要無いわ。元は私なんだもの」
「ですが、俺はそれ以上に悪い事をしました」
「・・・・・・そうね」
「・・・・・・・」
俺から罪悪感で一杯のオーラが滲み出る
「・・・帰るわ」
奈穂さんが立ち上がる
「・・・すみません」
「・・・そこまで引っ張るとさすがにイラッってするわ」
「すみ・・・」
「じゃあまた明日。今日は楽しかったわ。直哉」
奈穂さんが俺の言葉を遮る

奈穂さんが店を出て行く

「・・・ありがとう。奈穂さん」
俺も店を出た

「直哉。今日は直哉の言う通り特別な日だわ・・・・・彼、直哉の命日」

「ただいま～」
俺は家に着いた
「お帰りぃ」
ちづ姉が（パタパタ）とスリッパの音を鳴らして玄関に迎えに来た。
「ちゃんとすぐに帰って来たね？」
「まあすぐ別れたしね」
今は五時半。
奈穂さんとは二時間ほどしかいなかった
「そうなんだ。まだ夕食出来て無いから部屋で待っててね」
「わかった」
そういえば言っとくけど。
俺とちづ姉の両親は死んでいない。
じゃあ何処に居るのか？と言われたら知らん。
両親は今旅行に行っている。
何時帰って来るのかも分からない。
まあ家事全般は両親がいた頃からちづ姉がやってたから生活に問題は無いけどな。
俺は自室に入って学園指定のカバンを漁る・と本を見つけた。堀川さんに渡された本だ。明日には返せるように今日中に読み終える。
本はファンタジーで勇者がドラゴンを倒すという話だ

七日目　デート？（後書き）

また来ましたＢＪです。
誤字訂正・脱字訂正・感想・評価等を下さい。

千鶴・奈穂「・・・・・・ガサ・ゴソ」
直哉「・・・何をして居るんですか？」
千鶴・奈穂「・・・・見つけた！」
直哉「えっ？見つけたって何・・を」
千鶴「直くんのベットの下に置いてあった」
奈穂「チャラチャラ・チャラ～。エ・ロ・本～」
直哉「ドラ○もん！？じゃなくてなんで俺の部屋を漁ってるんですか！？それも返して！」
千鶴「やだ」
奈穂「エーと何々、私の秘密を教えてあ・げ・る☆」
千鶴「ふ～ん。直くんは一体どんな秘密を知りたいのかな？かな？」
直哉「違いますよ。あとその雛○沢の住民みたいなのはやめて下さい！」
千鶴「何が違うの？」
直哉「えっ？そ、それはですね・・・」

（ダッ）

奈穂「あっ逃げた」
千鶴「直くん・・足の速さでお姉ちゃんに勝てると思っているのかな？かな？」

俺はすぐに捕まえられましたとさ

一週間俺は椅子に縛られそうになるも

直哉「ちづ姉・・・好きだ！」
千鶴「えっ？」
直哉「だから・・この縄を外して下さい」
千鶴「うん！わかった！」

ちづ姉が縄を外してくれたとさ

奈穂「ただのアホね。単純過ぎるわ・・・でもこの本は面白そうだから貰っていくわ」

直哉「ああ持って行かないで～」
千鶴「・・・直くん？」
直哉「いえっ！持って行って下さい！俺には必要ありませんから！」

俺の唯一のエロ本が無くなりました。

八日目　本・陰と陽

入学式から一週間が経った。
今日は月曜日。
「堀川さんこれ」
俺は学園にいて、同じクラスの堀川さんに前の火曜日に本を貸して貰ったので返している所だ。
「・・・・そう」
堀川さんが本を受け取って俺を見ている。
「ん？・・あっ、本ありがとう。よかったよ」
「・・・・そう」
堀川さんは目線を俺から自分の机に変える。
「・・・・これ」
堀川さんがまた俺に本を渡す。
「えっ？また？」
「・・・・嫌？」
「嫌じゃないです！ものスッゴく嬉しいです！・・・・でも、どうして俺に本を貸してくれるんですか？」
俺が尋ねると堀川さんはさっきから変えない真っ直ぐな目で俺を見据える。
と、堀川さんがゆっくりと口を動かす。「・・・・私が書いた」
「（ワタシガカイタ？）」
俺は意味が分からずに頭の中で何度も繰り返す。
「・・ぇぇっ！？これ堀川さんが書いたの！？」
俺の言葉に堀川さんが（コクり）と頷く。
「そうなん、だ」
俺は呆気に囚われていると堀川さんが口を開く
「・・・・本当は？」
「本当？」

「・・・・本を読んだ感想」
「・・本当だよ。本当によかったよ」
「本当のことを言ってあげた方が良いわ」
「えっ？」
「・・・・・・・」
突然話しかけてきたのは奈穂さんだ。
「奈穂さん。何を言っているんですか？本当のことって・・」
「本当によかったの？何か思うことはなかったの？直哉。あなたは何か嘘をついてないかしら？」
「・・・・」
奈穂さんの言葉に俺は黙り込んでしまう。
何故か？それは的を獲ているから。
俺はこの本を見て堀川さんが書いたと聞いて一つの疑問が浮かんだ。
（これ本当に堀川さんが書いたのかと言う疑問。でも、堀川さんは嘘をつかない人だから。堀川さんとはあまり話したことは無いけど何故か堀川さんは嘘をつかないとハッキリ言える。そして俺が思った疑問は）」
俺は堀川さんに向き直る。
「堀川さんの心が見えない。・・・というのが俺の感想です。文句言っている様に聞こえるかもしれませんが違います。俺は堀川さんの心が知りたいです」
「・・・・・・・」
堀川さんは黙りながらもいつもと変わらない真っ直ぐな目で俺を見ている。
俺は目をつむる。叩かれても仕方ないからだ。
でも、俺に何かが当たる感覚はしなかった。
そっと目を開けると堀川さんは相変わらず俺を見つめる。
「・・・・そう」
目の錯覚だろうか？
堀川さんが少し笑った気がした。

でも、すぐにいつもの無表情な堀川さんに戻っていた。

「（今思ったら俺酷くない？人の作品を馬鹿にしているし、あれは奈穂さんが言ったから置いといて。堀川さんが笑ったのを目の錯覚だって思ってしまった。嗚呼！！どうしよう！俺は一体どう謝ったらいいんだぁー！！！）」

「ど、どうした直哉。いきなり頭を抑えて、頭痛いのか？」

竜二が俺を心配しているのは分かっているが

「うるせぇー！頭痛いのはお前だ！」

「いや。そういう意味じゃなくて、ってそれ酷くね！？」

「酷くないわ。それが現実よ」

竜二に奈穂さんが言う。

「なんだとぉ～」

「聞こえなかったの？なら頭痛いあなたにもう一度言ってあげる。酷くないわ。それが現実よ。と言ったの」

「聞こえとるわぁ！」

竜二が叫んでいるのを無視して弁当をつまむ奈穂さん。

俺がそのコントを見ていると俺の誰もいなかった隣に誰かが来た。

堀川さんだ。

俺は堀川さんで朝のことを思い出して俯く。

堀川さんは俺の隣に椅子を持って来て座ると俺に開けてあるパンを差し出した。

「・・・あの、堀川さん？これは何ですか？」

「・・・・パン」

「いや、そうじゃなくて、これがパンなのは知っていますから。俺が聞きたいのは何をしているのかってこと」

「・・・・食べて」

「えっ食べるの？」

堀川さんは（コクり）と頷く。

「じ、じゃあ頂きます」
俺が堀川さんからパンを取ろうとする。と堀川さんが首をゆっくりと横に振る。
「・・・・かぶりつく」
「かぶりつくの！？なんでですか？」
「・・・・そうしないと駄目だって言われたから」
「言われたって誰に？」
堀川さんは口を動かさずに目線を奈穂さんに向けた。
「奈穂さん。あなた一体何を言ったんですか？」
俺の言葉に奈穂さんは
「私じゃないわ。私は質問に答えただけよ」
「じゃあ何て質問されたんですか？」
「西谷直哉を喜ばすにはどうしたら良いのか？と質問されたわ」
「じゃあ次に何て答えたんですか？」
「男の夢の可愛い女の子からの『あ～ん』よ」
「何教えているんですか！！本当に堀川さん信じているじゃないですか！！それに男の夢なんですか『あ～ん』て」
「知らないわ」
「知らないのになんで言ったんですか！」
「その方が面白いからよ。本当はキスにしようかと思ったのだけどやめたわ。感謝しなさい」
「あっ、はい。ありがとうございます。って違いますよ！なんですか面白いって！」
「面白い『（形）何かに心が惹かれ、続けて（進んで）してみたり　見たり聞いたり　したい様子だ。学校が面白い（＝学校へ行くのが楽しい）／おもしろくて　たまらない／おもしろくも　おかしくもない（＝特別の主張が有るわけでもなく、それ自体としてはどうということも無い）
普通とは・・・」
「誰が面白いの意味を聞きました！？あと何処から国語辞典持って

きたんですか！？もしかして用意してたんですか？」
俺は半ば諦めながら聞く
「・・・・・・ハッ」
「笑われた！」
鼻で笑われてしまった・・・かなり凹む。
俺が凹んでいると横にいる堀川さんが
「・・・・あ～ん」
としてきた。
「（堀川さん。今、俺そんな気分じゃないですから）」
俺の願いは届かずに堀川さんは俺にパンを近付ける。
俺は勢いでパンにかぶりつく。
「美味しいです」
パンで『あ～ん』される新鮮さで俺は少し泣きました。
俺が泣いていると竜二・昇・何時からいたのか川嶋・平永と言葉を続ける
「直哉おまえ・・」
「直哉。貴様いつの間に堀川を堀川を」
「杞沙さんにどんな手を使いやがったぁ！」
「君は今この学園の半分以上の男を敵にまわしたね」
「いや何の話！？しかも半分以上の男を敵にまわしたってなんで？」
俺の質問に答えたのは竜二だった。
「それはおまえこんな性格だが容姿はトップクラスの秋葉奈穂に隠れファンが多い堀川杞沙も手玉に取ったら半分以上は敵になるわな」
竜二が（ウンウン）と首を縦に振っている。
そんな男共を無視して堀川さんが俺に話し掛ける。
「・・・・杞沙って呼んで・・・・直哉」
俺は奈穂さんに目をやる。
「私じゃないわ。これは私も予想外よ」
男共がぎゃあぎゃあ叫んでいるが無視。
俺は堀川さんに目線を変えて

「・・・・杞沙さん」
俺は少し照れながらも下の名前で呼んで
「杞沙さん。それは一体誰に教わったんですか？」
と尋ねる。
「（杞沙さんがそんな事を言うとは思わない）」
「・・・・志賀夏希」
志賀（しが）　夏希（なつき）？このクラスの人じゃないね。
だったら他の・・・
「志賀夏希ってあの志賀夏希か！？」
川嶋が妙にハイテンションで話す。
川嶋に続いて竜二・昇・平永と続く。
「あぁぁー！あの志賀夏希か！あの人と堀川が知り合いだったなんて」
「ホントにな。まさしくこれは・・・」
「陰と陽だ」
その四人についていけない俺と岡崎
「有名人？」
「あ、あのぅ、その志賀さんって人一体誰なんですか？」
全く聞く耳を持っていない四人は「ウオーッ」と叫んでいる中奈穂さんが説明してくれた。意外（失礼）
「私と杞沙と一緒で美少女トップ１０に入っている一人よ。陰と陽というのは陰が杞沙で暗い子でその志賀って人は陽明るいというよりも熱いわ。つまり熱血系よ」
その志賀さんって言う人も一年生だったらたった一週間で三人も一年生が美少女トップ１０に入っている。早過ぎでしょと普通思うでしょうが俺はコイツらならそれが当たり前に感じてしまう。
「へえーそうなんですかぁ～いやぁご苦労様ですね」
俺は入学式からたった一週間で壊れそうです。
何故か？それは俺がこんな人達と一緒に毎日を過ごしているから

「（皆さん。俺はこれから現実逃避しますのでまた明日お会いしましょう）」

八日目　本・陰と陽（後書き）

ＢＪです。
この小説を読んで頂きありがとうございます。
感想・評価等をお待ちしております。

竜二「なあ直哉一緒に志賀夏希を見に行かね？」
直哉「・・・・・・」
竜二「直哉？」
直哉「・・・・・・」
奈穂「無駄よ」
竜二「どうしてだ？」
奈穂「今私が直哉を洗脳しているから直哉は今ただの人形よ」
竜二「そんな事をしたのか！っていうか洗脳って出来るんか？」
奈穂「出来るわ。まあ少しパァになるけどね」
竜二「パァになったら駄目だろ！？」
奈穂「冗談よ」
竜二「だよな。少し焦った。じゃあなんで直哉は動かないんだ？」
奈穂「現実逃避よ」
竜二「・・・なんで？」
奈穂「知らないわ」
竜二「知らないのかよ！」

九日目　死亡者（前書き）

この話には志賀夏希は出て来ません。

九日目　死亡者

「昨日はすみませんでした。昨日現実逃避した西谷直哉です。今日は俺頑張りますのでどうか見捨てないで下さい」
俺は頭を深々と下げる。
「わあ、直くんの頭が壊れてる」
「・・・・・・・」
ちづ姉がなんか言っているがここは無視を選択する。
「・・・・しくしく・・・直くんがお姉ちゃんを無視したぁ」
「・・・・・・・」
ちづ姉が泣いているが無視。
ついでに言っとくがここは家ではない。
学園の自分のクラスだ。
なんでここにちづ姉が居るのか？それは俺が弁当を忘れてちづ姉がわざわざ届けてくれたのだ。
「おい直哉。千鶴姉さんが泣いているぞ。直哉が弁当を忘れているのをわざわざ届けにくれたのにその対処はどうかと思うぞ」
「・・・・・・・」
竜二が何か言っているが無視。
「「・・・・しくしく・・・」」
竜二とちづ姉が泣いている・・・が無視・・は出来なかった。
「・・・・分かりましたよ。すみません」
俺は折れて謝る。
するとちづ姉と竜二が（パアッ）と明るくなった。
「直くん！お姉ちゃんは直くんを信じてたよ！」
「何を！？俺何か信じるとかに関係ある事言ったかな！？」
「直哉！俺は、俺は。直哉をし・・・」
「あっ、竜二には言ってないから」
「なにいいいいーーーーーー！！」

竜二が机に突っ伏して（しくしく）泣いている。
対するちづ姉は嬉し涙を流している。
「（今日はよく泣く日だな）」
俺がそんな事を思っていると奈穂さんが
「そうね」
と言ってきた。
俺は何度も頷いて・・・
「・・・読心術！？」
俺は驚いた。
「（読心術。奈穂さんＶｅｒｓｉｏｎだ）」
「違うわ。直哉は声には出していないけど口を動かしているからよ」
「むしろ読唇術！？」
奈穂さんが読唇術を取得していた。
「（じゃあ奈穂さんが読唇術でちづ姉が・・・あれ？）」
俺は疑問に思った事をちづ姉に聞く。
「ちづ姉も読唇術を取得していたんですか？」
さっきまで嬉し涙を流していたちづ姉が首を横に振る。
「ううん。お姉ちゃんは読唇術じゃなくて読心術だよ」
「（同じ読み方なのによく通じるな）」
「ついでに直くん専用だよ」
「何その嫌な専用！？」
「他には人の記憶を見る事も出来るよ」
「それ駄目でしょう！！」
「ついでにこれも直くん専用だよ」
「また俺専用！？あとちづ姉一体何者！？」
「ムムムッ・・・見えた！」
「人の過去を見ないで下さい！！」
「俺も見えるぜ」
俺とちづ姉に川嶋が割ってきた。
「川嶋。おまえも見えるのか？」

「ああ、直哉の過去を見てやろう」
「見なくていいから！」
「ハァァァァァ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・見えた！」
「長っ！！ちづ姉と比べて長っ！！なんでそんなに違いが出るんだ
！ってその前に人の過去を見ないでくれる！？」
「じゃあ言うぞ？」
「聞けよ！！」
「直哉は・・・子供の頃親に抱かれていた！」
「・・・・・うん。まあー何かが無い限り普通皆あるよね？・・・
・つまり」
〈普通〉
川嶋以外の皆が綺麗にハモる。
川嶋に奈穂さんがトドメを刺す
「・・・・・微妙ね」
「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
（バタッ）
川嶋が倒れる。
「（前にもこんな事があったな。確か入学式の翌日）」
皆岡崎を見る

「えっ？なんです？」
岡崎
「あの時はいろいろあったよなぁ」
竜二
「あの皆さーん」
川嶋
「そうね。少し楽しめたわ」
奈穂さん

「少しだけなんだ」
平永
「誰か俺に構って」
川嶋
「何があったんですか？」
ちづ姉
「実は・・・・・」
竜二
「へえーそんな事があったんですか～」
ちづ姉
「俺ホントに精神がヤバいですよ～。このままだったら俺は」
川嶋
「うぅ皆さん酷いですよ」
岡崎
「ワリぃな、岡崎」
昇
「・・・・・」
川嶋

「なんか止んだね」
俺が川嶋を見ると川嶋はまだ地面にへばり付いている。
「川嶋君大丈夫ですか？」
岡崎が声を掛けるも川嶋は反応しない。

「まさかあの川嶋が死ぬなんて・・」
奈穂さんが顔を手で覆い隠す。

「死んでねぇよ！」

川嶋が起き上がってきた。
〔・・・・・チッ〕
「全員舌打ち！？」

九日目　死亡者（後書き）

川嶋「何！？このサブタイトル！！死亡者って俺死なねぇよ！」
奈穂「チッ」
川嶋「また舌打ち！？」
奈穂「なんであなた生きてるの？」
川嶋「・・・なんか死んでほしい様に聞こえるんだけど？」
奈穂「そう言ったつもりなんだけど。そう聞こえなかったのかしら？・・・私もまだまだね」
川嶋「おい。秋葉。お前表に出ろ。その喧嘩買ったぞ」
奈穂「仕方ないわね。直哉審査員しなさい」
直哉「俺を巻き込まないで下さいよ」

（スバンッ）

直哉「一本！一本背負い。勝者秋葉奈穂さん」
奈穂「これで私の勝ちね」
川嶋「クッ、まだだ！まだ勝負は終わっていない！」

奈穂さん
百戦中百勝ち零負け

十日目　何故！？（前書き）

今回も志賀夏希は出ません。すいません

十日目　何故！？

「バカヤロー」
（バコッ）
「痛ぇ！・・・なんで殴んだよ！」
「・・・・・・・」
「無視か！」
「・・・うるさいから少し黙ってくれないかしら」
「おまえのせいだろが！」
「・・・・チッ、ばれたか」
「当たり前だろが！それでばれないと思ったおまえが怖いわ！」
「・・・・・・・」
「無視か！」
「竜二諦めた方が良いよ」
俺は奈穂さんに殴られた竜二を宥める。
「だって直哉っ！・・・・チッ、分かったよ」
竜二は俺の意味を理解して引き下った。
何故竜二が引き下がったのか？それは奈穂さんが『来るなら来なさいよ』オーラを出していた。
「あら？来ないの？残念」
奈穂さんが挑発的に言う。
「奈穂さんも挑発しないで下さい」
「てめぇ！秋葉様に何口答えしてんだ！」
川嶋が俺を怒っている。
・・・・・・・・・
〔・・・はぁ！？〕
皆の声がハモる。
秋葉様？川嶋一体君に何があったんだ・・・ハッ！もしかしてあれか！？昨日の後書きでか！？後書きが本文に響くなんて・・・予想

外です。
「そこっ！ソ〇トバンクの名台詞を使わない！」
「これ名台詞なの！？あれ？前にも同じ事があった様な・・・ってちづ姉！？こんな所で何してるんですか？」
まさかのちづ姉登場。ってまた俺の心読まれた！？
「そんなの決まってるよ！直くんに会いに来た以外に無いよ！」
「それ以外で来て下さい！あと威張らないで下さい！」
ちづ姉が胸を張っている。
「それより何があったんですか？」
昇がちづ姉に説明する。
「実はかくかくしかじかで」
「分からないよね！なんですかかくかくしかじかって！」
俺がツッコミを入れているとちづ姉が
「・・・わかりませんね」
「でしょ！確かにこれ小説ですけど！そんなに簡単な説明は無いよね！」
「・・・なんで秋葉さんが天野くんを殴ったのか」
「そこ！？ちづ姉が分からない所そこ！？かくかくしかじか通じてた！！」
恐ろしやかくかくしかじかおぬしやりよるのう。
「直くん。なんか古さを感じたよ？」
「・・・ほっといていいです」
べ、別にかくかくしかじかに負けてなんかないんだからね！負けてなんかないんだからね。
（ダッ）
「あ、直くんが走った」
「逃げたわね」
「何からですか？」
「小説という恐ろしさからだよ」
「だろうな」

「ですよね！秋葉様」
「なんか康太が言った様な感じにしてない？」
上からちづ姉・奈穂さん・岡崎・竜二・昇・川嶋・平永が言う。

ＴＩＺＵＲＵＳＩＤＥ

直くん・・何で逃げたのかな？
私知らない間に直くんを傷つけてたのかな？
天野くんは小説に負けたって言っていたけど、意味が分からないし・・・
直くんが走る前に読心術を使っていないかったから。
直くんの気持ちが分からないよ。
直くんの気持ちが知りたくて読心術を習ったのに・・・さすがに人の過去を見る事は出来ないけど・・・過去も見る事が出来たらあの時の直くんの気持ちが分かるかな？

直くんあの時はごめんね

私は何度謝っても許されない事をしたよね。
直くんは知らなかった様だけど
私は一度だけ直くんを・・・・

秋葉さんが私を見ている。
「なんでしょうか？」
私は笑顔で尋ねる。
「どうかしたの？」
秋葉さんが私に尋ねる。
「ほぇ？」
私は質問に質問で返されて変な言葉が出てしまったが

「・・何がでしょうか？」
また笑顔で尋ねる。
今気付いたけど秋葉さんだけじゃなくて直くんに集まっていた人達が皆私を見ている。
秋葉さんが私から視線を外して言う
「・・・ただ、ボーとしてたから気になっただけよ」
「そっかごめんね。何も無いよ・・ただ、天野くんなんで殴られたのかな？って思っただけなの」
私の質問に答えてくれたのは誰か知らない人だった。
「その事に理由なんてありません。いきなり殴ったんです」
「そうなんですか。ありがとうございます。・・・あの、すいません。お名前を教えて貰っていいですか？」
「はい。初めまして上原昇です」
「初めまして、上原くん。私は西谷千鶴と言います」
私は頭を少し下げた
「・・・さすがと言うかなんと言うか生徒会長なのに上からじゃないですね。あ、俺は平永寛治です」
「平永くんですね。西谷千鶴です」
私が頭を下げると平永くんも頭を下げる。
「あ、俺は川嶋康太っす。よろしく。秋葉様の奴隷っす！」
「奴隷です、か？」
なんで嬉しそうなんだろう。
「僕はその・・・お、岡崎結城・・です。あのっよ、よろしくお願いします」
「はい。岡崎くんよろしくお願いします」
私が微笑むと岡崎くんの顔が赤くなっていく
「恋する乙女か！」
（バシッ）
天野くんが岡崎くんの後頭部を叩いた。
「痛いですよ～」

岡崎くんが涙目で後頭部をさする。
私は少しクスッと笑ってしまった。
あの時の事をさっき謝ったばかりなのに・・・私はなんて不謹慎なのだろう。
自分に腹が立つ

ＲＹＵＵＺＩ　ＳＩＤＥ

（今・・・泣いて）

十日目　何故！？（後書き）

竜二「・・・あの千鶴姉さん」
千鶴「ん？何かな天野くん」
竜二「・・・・いえっなんでもないです」
千鶴「どうしました？どうして敬語なんですか？」
竜二「いやっなんでない」
千鶴「そうですか？なら良いですけど」

奈穂「意気地無しね」
竜二「だったらおまえが聞けよ」
奈穂「聞けると思ってるの？話した事があるのはたった二日だけの私に」
竜二「それは無理・・だ」
奈穂「あなた直哉と昔からの知り合いだったら分からないの」
竜二「昔はあまり千鶴姉さんとは話した事は無いんだよ」
奈穂「そんなの関係無いわ。あの生徒会長は直哉の事以外で悩まない事ぐらいたった二日で分かるわ。私が言ってるのは・・・やっぱりいいわ」
竜二「なんだよ。言えよ」
奈穂「憶測で語る事じゃないわ。もうこの話は終わり」
竜二「・・・・・・」

奈穂「直哉あの後何処に行ってたの？」
直哉「えっ！？・・・別に何処にも行ってませんよ」
奈穂「気にしなくても皆知ってるわ。直哉が逃げ出した理由」
直哉「えっ？嘘！」
奈穂「本当よ」
直哉「・・・・・ちょっと校舎裏に行っていました」

奈穂「そう」
直哉「あれ？竜二何そんな所で突っ立っているんだ？」
竜二「・・・・・・」
直哉「おい！りゅ・・」
奈穂「ほっといた方が良いわ」
直哉「そう？わかった」

十一日目　班決め（前書き）

志賀夏希は修学旅行まで出ません。すいません

十一日目　班決め

「では、今から修学旅行の班を決めましょう。五、六人の班を作って下さい」
武中先生がそう言うと皆がわらわらと動き出す。
「直哉。組もうぜ」
竜二が誘ってきた。
別に断る理由は無いので、
「いいよ」
「じゃあ私も入れて貰おうかしら？」
奈穂さんもやって来た。
「俺も頼むな」
昇だ
「いいよ。なあ竜二」
俺は一応竜二に許可を貰う
「いいぜ。ちょっとコイツが気になるけど」
竜二が奈穂さんを見ながら言う。
「ごめんなさい。私あなたを好きにはなれないわ」
「そういう意味じゃねえよ！だいたいおまえを好きになる奴なんている訳ねえだろ！」
「竜二。それは言い過ぎだと思うよ」
「そうよ。ガラス並に繊細な心の持ち主なのよ」
「ガラスはガラスでも防弾ガラスだろ！」
「それよりもう一人か二人どうするの？」
「無視か！！」
「う～ん、どうしようか？」
「直哉まで！？」
「うるさいわね」
「おまえのせいだろ！ジャンケンで勝負だ！俺が勝ったらおまえは

班からどいて貰うからジャンケンしろ！」
「仕方ないわね」
「よ～し。最初はグー。ジャンケン」
「チョキ」
（グサッ）
「ぐあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
竜二が地面を転がり回っている。
奈穂さんの目潰しジャンケン恐ろしや。
「目が、目があぁぁぁぁぁぁ！」
「私の勝ちね」
「・・・奈穂さんあれは痛過ぎだと思うんですが・・・」
「なら直哉が代わりになる？」
奈穂さんが嫌な笑みを見せる。
「いえっ！なんでもありません！」
俺は奈穂さんに敬礼する。
「フフフッ残念だわ」
「奈穂あんまり虐めるなよ」
昇が奈穂さんに注意する。
「・・・・仕方ないわね。これで勘弁してあげるわ」
「てめぇ！謝れ！」
「嫌よ」
「なにぃ！」
竜二が騒ぐも奈穂さんは相手にしていない。
「あ、あの僕を班に入れて下さい」
岡崎が頭を下げながら言った。
「いいわよ」
奈穂さんが岡崎を班に入れた。
「本当ですか！ありがとうございます！」
岡崎がまた頭を下げる。
「私は遊ぶ玩具が増えていいわ」

「えっ？」
奈穂さんの言葉に岡崎が驚く。
まあ俺は多少なりともわかってたけどね。
「フフフッいっぱい遊ぼうね？」
「イ、イヤァァァァァァァァァ」
「さっき俺が注意したばっかりだろ」
（ハァ）
昇は一つ溜め息をついた。

「では、皆さん決まりましたか？・・・堀川さんはまだの様ですね。
堀川さんも席に座ってないで誰かの所に行かなくてはいけませんよ？あの何処かに堀川さんを入れてあげて下さい」
武中先生がそう言って皆に言うとほとんどの班が『こっちに来なよ』と杞沙さんを誘う。
「多いですね。堀川さんが入りたい班はありますか？そこに入れて貰いましょう。」
武中先生の言葉で杞沙さんは立ち上げり・・・・俺の目の前で止まった。
「はい。では、西谷君の班に入れて貰いましょう。良いですか？」
武中先生が俺に聞いてきたので
「はい」
と答えた。
俺は杞沙さんに視線を動かして言う
「よろしくね。杞沙さん」
杞沙さんは声を出さずにコクりと頷いた。
何か近くで『なんでだぁ！』と叫ぶ人がいるが無視。
「では、班長を決めて下さい。次に一日目は班で決められた場所を回るので各班でどういう順番で行くのか決めて下さい」
武中先生の言葉でまたざわつく。

「じゃあ俺達もどういう道順で行くか決めましょう」
何故か俺以外全員（杞沙さんと奈穂さんは誰でも良いらしい）一致で俺に決まって俺が仕切る事になった。
（ハァ）
俺はつい溜め息が出てしまった。
「直哉もう諦めて仕切れ」
竜二が俺の肩に手を乗せる。
「・・じゃあさっき言った通りどういう道順で行きましょうか？」
「別にどんなのでも良いぜ」
竜二が言う。
「竜二考える気ある？」
「全然。ある訳無いじゃん」
「直哉が勝手にやって良いよ、な？」
昇が皆に同意を求める。
「はい、良いと思います。西谷くんの好きにして」
「ああ、良いに決まってるじゃねえか」
「私は別に構わないわ」
「・・・・良い」
上から岡崎・竜二・奈穂さん・杞沙さんと承諾していく。
「皆・・・」
俺は感動のあまり涙が・・・
「出ませんよ！皆俺に面倒だから押し付けてるだけでしょう！」
〔チッばれたか〕
「当たり前じゃないですか！」
全員（杞沙さん以外）がハモっているのを俺が叫ぶ。
まあ結局俺が全部決めたんだけどね。
チャイムが鳴り武中先生が声を出す
「それでは、来週には修学旅行に行きますのでそれまでには決めて

いて下さい」

十一日目　班決め（後書き）

直哉「ねえ皆この後書き必要かな？」
全員「さあ？」
直哉「元々この後書きって雑談する為に作ったんだよね？」
昇「俺達が、だけどな」
直哉「でも、最近雑談じゃなくて後書きだけにその後の事を書いてあるよね？」
竜二「そうだよな」
直哉「その後書きだって本文に書いたら良いしね。それに雑談だったら本文でするよね？」
奈穂「一回ぐらいしかしてないけどね」
直哉「だったら必要無くないかな？」
全員「・・無いな」
岡崎「で、でもこの後書きで書いた方が良いと思ってくれる人もいるかもしれないですよ？」
全員「だったら聞こう」

直哉「という事でこの後書きはいらないのかいるのか読者様に尋ねたいと思っていますので感想に書いて頂けると嬉しいです。あとこの小説は一日一日を書いていますので議題が欲しいです。感想の方にどしどし入れて下さい。
待ってま～す」

十二日目　杞沙（前書き）

修学旅行に初出のつもりだった志賀夏希が出てしまいました。すいません

あと更新遅れてすいません。

十二日目　杞沙

「ねえ、杞沙さんは本を書くの好きなの？」
俺の言葉に杞沙さんは首を横に振る。
「じゃあどうして本を書いてるの？」
「・・・書きたいから」
「好きなの？」
杞沙さんは首を横に振る。
「じゃあどうして？」
「・・・・・・・」
「あっごめん。聞いちゃいけないよね」
「・・・・・昔」
「えっ！？話してくれるの？」
「・・・・昔、友達と言える人がいた」
「・・・・・・・」
「・・・・・私はその人が好きだった。」
「・・・そうだったんだ」
杞沙さんがコクりと頷く
「・・・・・冬の日」

ここから杞沙の冬の話。

「杞沙さん。今度海に行きますです」
私は雪の様に綺麗な白い髪をストレートで腰の高さまで伸ばしている。彼女、志賀　冬香（ふゆか）に手を引っ張られる。
「・・・・冬なのに？」
「私はお姉ちゃんに習ったのです！遊びに季節など関係ないのです」
冬香は胸に手を置いて呟く。

「だから、行くのです。魂の歌を聞きに」
冬香は天を見つめる。
「・・・・そう」
「今、変って思いながら言いましたね？」
私は首を縦に動かす。
「・・否定して下さい。・・・まあ良いです。それでは海に行きますか？」
私は首を縦に振って承諾する。
「では、今行かん～聖地へ～」
「・・・・聖地？」
「細かい事は気にしないのです」

「ウ～・・フー・・杞沙さん。話しがあるのですが」
志賀冬香は背伸びをして一息ついてから私に真剣な表情で向き直る。
「・・・・・実はですね・・冬香は・・引越しをしますのです」
「・・・・そう」
私はそれしか言えなかった。
いつもの返事。
別にどうでもよかった訳ではない。
ただ状況が掴めなかっただけ。
私はあの時なんて声をかけたら彼女を繋ぎ止める事が出来たのだろう。
今でもその答えは見つからない。
もしかしたら答えなんて無いのかもしれない。
でも私はその答えを見つけたい。
見つけた所で過去に戻れるわけではないので過去は変わらない。
でも、私が一歩を進む為にはこの答えを捜さなくてはならない。
確証なんて無い。
ただそんな気がするだけ。

志賀冬香は翌日にはもういないらしい。
何処に行ったのかさえ分からない。
あの後から私も志賀冬香も一言しか話さなかった。

「明日にはもう居ないですから」
「・・・・そう」
また同じ返事しか出来なかった。

私は志賀冬香の昨日まで居た家の前。
私はインターホンの前に手を持っていくもすぐに手を下げる。
押す事が出来なかった。
もし押して誰も出て来なかったら私はあの時の事を信じるしかないから
でも誰かが出て来たらあの時の事は夢だと笑って志賀冬香と話せる。
私は胸を手で握り締める。
・・・・・・・・・・
私はインターホンを鳴らす。
（ピンポーン）
・・・・・・・・・・
（ガチャ）
扉が開いた。
私は居ないかもしれないと思っていたのに扉が開いて内心ドキッとして顔が緩む。
「・・・・冬」
「誰？」
出て来たのは知らない人。
髪は金色でツインテールをしている女の人。
見た目は私達と変わらないぐらいの若さ。
私は多少戸惑いながら尋ねる。
「・・・・冬香」

「冬香？・・・・・」
彼女の口から聞きたくない言葉が私の脳に届く。
「・・・冬香は引っ越したよ」
「っ！」
私は咄嗟に耳を塞ぐ。
でも彼女の言葉は私の頭の中で何度も繰り返す。
私は最後の希望に賭けて志賀冬香に聞けなかった事を尋ねる。
「・・・・何処？」
でも彼女は答える事が出来なかった。
「・・・分からない」
「・・・・何故？」
「実は両親が離婚してさ私達は父親が冬香。母親が私で離れ離れになって父親は何にも言わないんだ。多分国は出るぜ」
「・・・・・・・」
私はまた何も言えなかった。

「・・・そうだったんだ」
俺に杞沙さんが頷く。
「・・・あれ？でもどうして本を書いているのか答えてないよね？」
「・・・・志賀冬香が本を書くのが好きだったから」
「そうなんだ。あの思ったんですけど志賀って名前・・」
杞沙さんが頷く。
「・・・・志賀夏希と姉妹」
「そっか。あれ？でもその志賀夏希さんと同い年って事は志賀冬香さんは年下？」
杞沙さんは首を横に振る。
「・・・・双子」
「なるほどね。それを機会に志賀夏希さんとは仲良くなったんだ」
杞沙さんは頷く。

「でもさあー、なんで両親の離婚で姉妹を引き離すんだ？」
竜二が疑問を口にする。
「・・・・志賀冬香は父親に世話になっていたから断れない」
「姉は母親に世話になってたのか？」
今度は昇が尋ねると杞沙さんは首を縦に振る。
「・・ごめん。杞沙さん軽い気持ちで聞いて」
「・・・・別に良い。いつか会えるかもしれない。死んだ訳ではないと思うから」
「杞沙はその人を好きだったのでしょ？」
奈穂さんに杞沙さんが頷く。
「それって・・レズって事？」
〔・・・・・・・・〕
皆黙り込んで杞沙さんを見る。
「・・・・分からない」
〔・・・・・・・・〕

十二日目　杞沙（後書き）

感想・評価等をお待ちしております。

後書きの件と議題の件もお待ちしております。

杞沙のキャラが変わってたらすいません

十三日目　電話

今日は土曜日。
何か予定が有る訳ではないのでベットに横になっている。
不意に携帯が鳴り響く。
「・・もしもし」
『あ、直哉今日遊ば・・』
（ピッ）
（・・プーップーップーッ）
「あれ？今誰かから電話がきてたような・・ま、いっか」
俺が居間に向かおうとベットから起き上がると携帯が鳴った。
「・・・もしもし」
『直哉！何で切るんだ！』
あっ、そっかぁ。さっき竜二から電話がきてたんでした。
じゃあもう一回切っても・・・
『言っとくけどまた切ったら呪うからな！』
「・・チッ」
『舌打ちすんな！』
「チッ」
『またか！！』
「竜二・・ウザい」
『いきなりか！あと何が！？』
「生きてる事が」
『俺の存在自体害！？』
「当たり前じゃん」
『なにいいいいいいいいいい！！！』
「うるさい。電話で叫ぶなよ」
『あ、わりぃ・・っておまえのせいだろ！』
「それで何？」

『ああ、今から遊ばね？』
「遊ばね」
『なんで？』
「・・・・・・・・」
『直哉？』
「なんで理由を聞くんだよ。別に良いじゃん。遊ばないのは遊ばないんだから」
『でもおまえ今暇だろ？』
「・・・・否定したい」
『つまり暇だって事だ』
「暇じゃないやい」
（ガシャン！）
「何？・・悪い竜二あとでかけ直す」
『ああ分かった』
俺は竜二の電話を切って音が聞こえた方へ行く。
音が鳴った所はちづ姉の部屋だ。
俺はドアをノックする。
・・・・・・・・・
返事がこない。
俺は部屋の扉を開ける。
ちづ姉は居ない。
「ちづ姉？」
俺は辺りを見回したがやはりちづ姉は居ない。
「直くん？何でお姉ちゃんの部屋に居るの？」
後ろから声がして俺が振り返るとそこにはちづ姉がいた。
「あっ、いや変な音がしたから」
「気になって見に来てくれたの？」
「まあ、はい」
「直くん。ありがとう～・・ヒシッ」
ちづ姉が擬音語を口にしてしがみついて来た。

「離れて下さい。それで一体何があったんですか？」
「皿が割・れ・たぁ～」
「なんでですか？」
「手からツルッとツルッとね」
「滑り落ちたんですね？」
ちづ姉が頷く。
「これですか？」
俺が割れている皿であろう物体を指差す。
ちづ姉は頷いて返した。
「それで掃除機なんですね？」
俺がちづ姉が持っている掃除機を指差す。
ちづ姉はまた頷き返す。
「手伝いますよ」
「ありがとう。直くん」

「これで全部ですか？」
「うん。ありがとう。直くん。・・・あっ、紅茶入れるね？待って
て」
ちづ姉はそれだけ伝えて部屋を出る。
俺は居間に向かう。

「・・それでどうして部屋に皿を？」
何かを乗せていた訳ではない。
俺はちづ姉が入れてくれた紅茶を口に入れながら尋ねる。
「うん。ちょっと部屋に昨日の夜に持っていってた皿を片付け様と
したらバリンッと割っちゃった」
「昨日の夜？」
「うん。予習とか復習で小腹が空いちゃって少し食べました。ごめ
んなさい」
「なんで謝るんですか？」

「太ったお姉ちゃんは嫌いでしょ？」
「嫌いじゃないですよ」
俺はちづ姉に微笑みかけた。

あっ、竜二に電話するの忘れてた！
・・・まっいっか

十四日目　図書館

俺は今図書館に来ていた。
何故か？・・フッ、決まっている。暇だからだ。
俺は適当に選んだ本を取ろうと手を出した時に、
誰かと手がぶつかってしまった！
的なドキドキな展開は虚しくも無く。ちょっと期待した自分が恥ずかしい。
（／／△／／）

俺は本を持って座ろうとすると、
誰かの上に座ってしまった！
的な展開も無く。
「俺飢えてんのかな？」
しまった。つい呟いてしまった。
「えっ！？」
違うぞ。今のは俺じゃない。
俺が聞こえた方つまり上を向くと、
そこには美少女が・・・・いなかった。見た目、二十代後半のおばさんでした。
「俺泣いて良いですか？」
「良いよ」
おばさんが俺を抱きしめてくれた。
お、おばさーーーーーん！！
俺はおばさんの腕の中でしくしくと・・・泣くかっ！
俺はおばさんと離れた。
あれ？俺このおばさんの事知っている様な・・
「あの、何処かでお会いしましたか？」
「えっ！？ナンパ？」

「いや、違っ・・・」
俺が否定しようとしたのをおばさんに遮れる。
「冗談よ。あなた桜林学園の生徒でしょ？私は桜林学園の先生をしていて１－Ｂの担任なの。分かる？」
「はい」
一年生歓迎集会の時に先生達が集まっている所に居た気がする。どうでもよかったからあまり覚えていない。
「でもどうして俺が生徒だと分かったんですか？」
「それはもちろん」
「もちろん？」
「女の勘よ」
あ～うん。この人には関わらない方が良いな
俺は心の中で決めた。

おばさんと別れて（案外簡単に別れた）本を読み終わった頃。
俺は帰ろうと立ち上がる。
「あの、すい、ま、せん」
俺は前の方から途切れ途切れに話し掛けられた。
・・もう期待しないからな・・
俺が前を向いた・・・美・美少女じゃねえぇぇぇぇぇ！
っていうのは嘘で、いや嘘じゃないかもしれない。
俺の目の前には前髪で顔が見えない美少女？が立っている。
髪は黒で肩まで無い短髪。顔は前髪で見えない程長い。別に髪で顔が埋まっている訳ではなく目が見えない所まで長いだけだ。
「・・あの～」
ハッ！説明するのに集中してしまった。
「すいません。なんですか？」
「あの、その本、を」
「これ？」

俺はさっきまで読んでいた本を彼女に見せる。
彼女は俯いたまま頷く。
「はい。その本、を貸して、頂け、ます、か？」
「良いですよ。俺はもう読みましたし」
俺はその本を差し出した。

本を渡した後。
俺は図書館をあとにした。

あの子の命名途切れ少女。

理由。
途切れ途切れに話すから。

十五日目　呼び出し（前書き）

更新遅れてすいません。

十五日目　呼び出し

「おまえってさぁ、モテないだろ」
竜二が奈穂さんに言う。
「どうして？私は結構モテるわ」
「ありえん」
「どうしてそう思うの？」
「おまえのその性格だぞ？」
「初めからこんな性格出さないわ」
「じゃあ自己紹介の時は一体何なんだ？」
「このクラスではこの性格の方が面白そうだからよ」
「直哉に興味があるのに作らないのか？」
「まだ引っ張るのね。どうせ話し掛ける予定だったし、問題無いわ」
「それでなんで直哉に興味があるんだ？」
「あなたに話す義理は無いわ」
「そうかい」
竜二が諦めた様に席を立つ。
「竜二何処に行くの？」
俺は竜二に尋ねる。
「トイレだよ」
竜二はそれだけ告げて教室を出て行った。
俺は奈穂さんに目線を向ける。
「奈穂さん。なんで俺の前でそんな話をするんですか？」
「私が出した訳ではないわ」
「確かにそうですね。」
（後で竜二を殴っとこ）
俺は心に決めた。
「直哉。呼んでる」
昇が知らせてくれた。

「誰？」
「先生だと思う」
「そっか。じゃあごめん奈穂さん」
「気にしなくて良いわ」
奈穂さんが右手で『行ってらっしゃい』と送ってくれた。

俺は教室の前の扉で呼んだ人を見つける。
昨日の先生でした。
「どうしたんですか？」
「特に理由はあるよ」
「・・それで何ですか？」
「スルーね・・・私そんなに強くないよ？」
「わかりましたから。なんですか？」
「放課後職員室に来る様に。だそうよ」
「なんでですか？」
「知らないよ。とりあえず来い。だそうよ」
「わかりました」

放課後、職員室前。
俺は扉を二回、手の甲でノックする。
（コンコン）
「失礼します」
俺は断りを入れてから扉を開け中に入る。
俺に気づいた昨日会った先生が席を立って職員室を出て俺を手招きする。
俺は先生の後をついて行く。
行き着いた先は生徒指導室だった。
「俺何かしましたか？」
「知らないよ・・・気をつけて行っといでよ」

先生が生徒指導室の扉を開け中に促す。
「先生は来ないんですか？」
「残念だけど、私の仕事は此処までよ」
「そうですか・・じゃあ行ってきます」
「生きて帰って来てよ」
「不吉な事を言わないで下さい」
俺は生徒指導室に入ると勢いよく扉が閉められた。
「ちょっ先生！？なんで閉めるんですか！開けて下さい！」
俺が扉をドンドンと叩いても返事が無い。
扉を開けようと扉を引いても開かない。
どうやらカギを架けているらしい。
中からはカギが無いと開けられない造りになっていた。
俺は窓から出ようと扉がある方の逆の方向に歩く。
（ガシッ）
誰かが俺の足をいきなり掴んだ。
「うわっ！」
その手は机の下から出ている。
少しずつ体が出て来る。
「助けて下さい」
「うわぁぁぁ！！」
俺は驚いて壁にぶつかった。
「どうかしましたか？そんなに驚くなんて」
栗色の髪。
肩よりも少し長い髪にパーマをかけていて、見た目は俺達と同い年に見える。
その人は紛れも無い。入学式に見た・・・
校長先生だった。
「どうして机の下に隠れてたんですか？」

校長先生は服に付着している地面の汚れを叩き落とす。
「・・別に隠れていた訳ではなくて、躓いただけです」
「躓いたって・・」
俺は辺りを見回す。
「躓く所ありませんけど」
「自分の足に躓いてしまいました」
「自分の足に・・ですか？・・・校長先生ってド・・」
「違います」
校長先生が俺の言葉を遮って否定する。
「そうですか。それで校長先生が俺を呼んだんですか？」
校長先生が頷く。
「だったら別に放送で呼んでも良いと思うんですが・・」
「それは駄目なんです。これは出来るだけ内密にと言われましたので」
「内密、ですか？どうしてですか？誰が言ったんですか？」
「どうしてですか？という質問には答えられません。すいません。誰が言っていたんですか？という質問には会えば分かります。今は答えられません。すいません」
「そうですか・・で用はなんですか？」
「ある人に会って頂きたいのです。今度の休日に場所はまた改めてお教えします」
「・・・わかりました」
「それでは私は仕事が有りますのでこれで失礼します」
校長先生は一回頭を下げてから生徒指導室の扉に向かう。
（ゴンッ）
「あうっ！」
校長先生が頭を扉にぶつけた！。
「校長先生大丈夫ですか？」
校長先生は頭を抑えながら俺を見る。
「だ、大丈夫です。慣れていますから」

「慣れているんですか？それもどうかと思います」
（校長先生はやっぱりドジでした）
校長先生は扉を開けて、廊下を歩く。
俺が心配で見ていると・・・
（ガッ）
（バタッ）
また足で躓いた。

十六日目　害虫（前書き）

ただの雑談だけです。

十六日目　害虫

「な～お～や～」
竜二が俺に迫って・・来なかった。
「うざい」
奈穂さんの足の裏が竜二の顔面に食い込んでいる。
「いってぇな！何しやがる！」
「害虫駆除よ」
「俺害虫！？人ですらねぇ！！」
「・・何か最近肩が凝るわ」
奈穂さんが肩を回しながら言う。
奈穂さんが腰を回して・・・竜二に一発！
「グハッ！」
続いてアッパー！
「グッ！」
続いて鳩蹴り！
「ガフッ！」
続いて右ストレート！
「ゲフッ！」
また右ストレート！・・だが竜二は右手を掴んで防ぐ。
それに奈穂さんがニヤッと笑みを浮かべる。
「甘いわ・・・左も有るのよ！！」
（スパーンッ！！）
「ブフッ！！」
黄金の左手！！
「って恐山　ア○ナじゃん！！」
違う世界観まで奈穂さんは手を出しました。
奈穂さんに代わって謝罪します。
「どうもすいませんでした」

俺は頭を深く深く下げた。
「一体誰に謝ってるの？直哉」
昇が俺に尋ねる。
うるさい！
俺は読者様に謝ってんだよ！！
てめぇも謝れ！！！
俺が必死に昇に謝れオーラを放つ・・・・が昇は気付かない。
「害虫駆除は済んだか？奈穂」
「まだよ」
「おまえまで俺を害虫扱い！？っていうかおまえも痛い！ローキックすんな！マジで痛い！」
「・・・仕方ないわね。じゃあこれで終わりにするわ」
「やっと終わっ・・・グフッ！」
奈穂さんのドロップキック！
「痛っぅ～・・・何しやがる！」
「チッ、まだ終わらないわね。害虫並にしぶとい男ね・あっ、ごめんなさい。もう害虫だったわね」
「てめぇ！シバくぞ！俺害虫じゃねぇから！しかも終わるって俺が終わるんかい！！」
「今気付いたの・・・病院、行く？」
「俺大丈夫だから！頭変じゃねぇから！！その妙な優しさが傷付くから！！！」
竜二がぎゃあぎゃあ騒いでる。
うざいなぁ・・・なんで俺竜二の親友やってんだろ？
俺は窓の外に目をやる。
・・・・あれ？なんでだろう？目が霞んできた。
やばい鼻水まで・・・俺風邪かなぁ？

俺は家に帰って熱を測った。

風邪でした。（＾o＾）

十六日目　害虫（後書き）

明日から金曜まで修学旅行です。
二泊三日です。

修学旅行と言えばなんですか？と僕は読者様に丁重に尋ねます。

真似です。わかりましたか？
変な真似してすいませんでした。

なんでも良いので感想を下さい。お願いします。

もっと俺を罵って下さい。
焦らしプレイですか？
良いですよ。付き合います。

Mか！！！
と自分ツッコミする僕でした。

そういえばこの後書き久しぶりですね。
皆さんはこの小説を読んでどうでしたか？
楽しんでくれていますか？
何処を楽しめと！！？
というツッコミは却下の方向でお願いしま～・・・
・・すを言えよ！！
芸人の真似です。
誰かわかりましたか？
わかりましたらどしどしご応募下さい。

これテレビで聞いた事ありません？

他の小説にも手を伸ばして頂けますと僕の嬉し恥ずかしセンサーが反応してくれますよ。

う～ん、これ何処かで聞いた事があるような・・・忘れました。

さて、この調子でどんどん更新致しますので次の話にも手を伸ばして頂けると信じています！

信じられると期待に応えたくなくなるのが僕です。

そんな情報いらんわ！！っていうか期待に応えて！！

やだっぷ～ん。

何それ！？どっから持ってきたの！？

それは乙女のひ・み・つ。

あなた男ですよね！？

さて、どうでしょう。真実はいつも一つ！！

名探偵コ○ンじゃん！！駄目ですよ！違う世界観に手を出したら！

っていうかあなたの事なのに男かどうかわからないんですか！？

自分のアソコに手を当てて考えなさい。

下ネタじゃねぇか！！

我○家！！

正・・・解！！って違ーーーーーーう！！あなたバカですか！？

そんなに自分を追い込んじゃ駄目だよ？

そ、そうだよね。うん、分かった。僕自分を追い込まない！・・・

あなたのせいですよね！？ちょっ肩に手を乗せて優しく微笑んでんじゃねぇよ！！

こーらっ。人のせいにしてはいけません！もう、メッ！！だよ？

うん、分かった！ってバカ！何でノリツッコミさせよんねん！！

そろそろ文字数が尽きかけていますよぉ～

ハッ、あなたのせいで読者様に何も伝わってないじゃないですか！

ほらほら読者に何か言う事は？
うん、それではまた言いますが次回から三日間の修学旅行編です。
次回も読んで下さい。お願いします。
は～い、良く出来ましたぁ～。よしよししてあげる。
わ～い、・・・えへへへ、くすぐったいよぉ～・・・・・・・・・ハッ！
君も私と同種ね
イヤァァァァァ！

十七日目　修学旅行一日目

風邪は朝には退いた。
元々熱は低かったのが助かりました。
何故なら今日から修学旅行の始まりますからです。

「ひゃっほー！！修学旅行の始まり・・・・・だーーーーーーー！」
ハイテンションなのは竜二。
決して俺ではない。
そ、そりゃあ多少はテンション高いけど、こ、此処まで高くないんだからね！
嬉しくなんかないんだからね！
「テンション上々だな。竜二」
竜二の後ろ、俺の前から来たのは昇。
「当ったり前だろ？！俺は今日と言う日を昨日の夜３時から待ち侘びてたんだぜ？！」
「歴史浅っ！！」
俺が竜二に叫ぶ。
「でもさあー、俺気付いちゃったんだぜ！この修学旅行の存在理由を！！」
「それなら俺も知ってるな。実地研究・見学の為だろ？」
昇が国語辞典を見ました！！
だからなんで国語辞典をいつも準備してるの！？
前は奈穂さんでしたけど・・・
竜二が『ちっちっちっ』と言いながら人差し指を突き出す。
うわっ、うぜえ！
うざ過ぎるわ！
指、折っても言いかな？かな？
・・・ちづ姉が移りました。

「それは表向きの話しだ。本当の理由は！・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・色恋沙汰なのだ！！！！！」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

(やべえ！お、俺の封印されし右腕が！ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！もう抑えられねぇ！！)

(バコーンッ)

「ブフッ！」

俺・昇が竜二を殴った。

(昇、お前もだったのか！！)

(当たり前だな)

昇とのアイコンタクト。

「「イエーイ」」

昇とのハイタッチ。

俺の気分は最高だ！

嬉しくて目頭が熱くなってきた。

「・・・っぅぅ。てめぇら何しやがる！」

竜二が起きた。

チッ、仕方ない此処は俺が・・・

「悪い竜二。俺の・・・・俺の封印されし右腕が！」

「そんなシリアスな展開無いだろ！」

ハッ、また俺の封印されし右腕が疼きかけて来た。

ぐあぁぁぁぁぁぁ！

竜二喰らえ！！

「ジェットストリームアタック！」

「グハッ！」

見事なアッパーが竜二にクリティカルヒット。

さすがガ○ダムに出て来るだけはある。強い。

「すまない。竜二・・・俺の封印されし右腕が勝手に！」

「違うだろ！思いっ切り殺気が篭められてたから！封印されし右腕

のせいじゃねぇから！！」
「おぉ神よ。罪深い竜二を滅っせよ！」
「聞けよっ！っていうか罪深いの俺！？おまえらだろ！！」
「その願い叶えましょう」
俺の後ろから声がする。
本当に神が降臨して来たのか・・・竜二アーメン
「違うから！思いっ切り神じゃねぇだろ！」
後ろに振り向くとそこには・・・奈穂さんがいた。
「制裁を降す。あなたは罪を犯しました。心苦しいですが神の鉄槌を受けなさい」
「顔ニヤついてんじゃねぇか！何が心苦しいだこの野郎！」
奈穂さんの後ろ回し蹴りが竜二の頭にヒット。
竜二は地面に倒れ伏した。
・・1！・・・2！・・・3！
カンカンカン！
勝者奈穂さん！

「・・・でありますから気を付けて下さい。続いて・・・」
俺は今班長が集まって注意事項などを聞かされていた。
「・・・・なあ、お前西谷直哉だろ？」
俺は俺の横から話し掛けられた。
俺が横を見るとそこには見に覚えがない金髪のツインテールの美少女がいた。
「・・・ええ、そうですけど・・・失礼ですけどお会いした事ありましたか？」
「いや、無いぜ。でも私はお前を知っている。堀川杞沙っていう子を知っているだろ？」
堀川杞沙？堀川杞沙・・・堀川・・杞沙・・・堀川・・・・・
「もしかして杞沙さん？」

「・・・ああ、ホントに名前なんだな」
「・・・・もしかして志賀夏希さん？」
「ああ、そうだぜ。杞沙共々よろしくな直哉」
いきなり名前なんだ・・・
「・・・よろしく志賀さん」
「志賀なんて堅てぇよ。夏希で良いぜ」
「じゃあ夏希さん。突然ですが質問良いですか？」
「ん？何」
ええっとあの本の日はっと・・
「確か入学式から一週間経った日なんだけど・・・夏希さんに名前で呼ばしたら喜ぶって杞沙さんが言ってたんですが」
「・・・・ああ、あれか。あれ実は、私が考えた事じゃねぇんだ。私の・・・・知り合いが、な。名前で呼んだり呼ばした方が良いって聞いたんだ」
「そうなんだ」
「ああ、それで他に聞きたい事は有るか？」
「・・・今の所は無いですね」
「そっか、じゃあ・・」
「そこっ！聞いてますか？私語をしない！」
この班長会議を指揮っているA組の班長がこちらを指差す。
「すいませ～ん」
俺は手をヒラヒラさせ謝った。
「たくっ、これだから最近の若い人は！」
「あなたも若い人ですよね！？」
「・・・そうだったわね」
「気付いてなかったんですか！？」
気付いてなかったとは
こ、この人恐ろしや。
その人はもう話しを進めている。
「・・・では、以上で班長会議を終わります」

その人の号令で班長はぞろぞろと自分の部屋に戻る。

俺も部屋に戻って行く。
あれ？そういえば夏希さん『じゃあ』で何か切り出そうとしてたよね？
まあ、俺よりも先に部屋を出たしもう良いって事だよね
俺は自分に当てられた部屋に入ると
「おう、直哉。そろそろ時間だから用意するぞ」
竜二が鞄を持ち上げながら言う。
今から地方見物をする。
ついでに高校生で奈良です。
べ、別に奈良を馬鹿にしている訳じゃないんだからね！
奈良が好きだからって訳じゃないんだからね！
ちょっとツンデってしまいました。
「ああ。分かってる」
俺はそれだけ言ってから自分の荷物の所に行く。

一日目は地方見物。
あっち行ったりこっち行ったりしました。
特に会話は無いので省きます。
べ、別に奈良の名物を知らない訳じゃないんだからね！
っていうかさっきから使い過ぎな感じがしないでもないです。
俺達（俺・竜二・昇・岡崎・奈穂さん・杞沙さんの六人）はぶらぶらしていた。
「東大寺はでっかいどう」
竜二が突然声を出す。
「此処は北海道じゃないどう」

俺も何かに乗る。
「じゃあ次北海道に行くどう」
昇まで巻き込む。
「冬に行くと思いますどう」
（＞岡崎キタ∀ーーー＜）
「・・・・どう」
杞沙さんも何か物足りないけどキターーーーーーー！！
最後の一人。
奈穂さん一番乗るであろう人物。
さあ、来い！
「北海道ね。まあ、行くかもね」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・えっ！？どうは！？
「・・・・どう」
付けた！？
奈穂さんの代わりに杞沙さんがどうを付けてくれた！！
ありがとう杞沙さん。
でも、その優しさが辛い！辛過ぎる！
「・・奈穂さん。どうして乗らなかったんですか？まさか昔使ってたＫＹか！？」
「そうよ。私はＫＹ、空気を読みすぎるわ」
「そっちか！クッ、奈穂さん強敵すぎる」
「だいたいあなた達。誰の発信で流れているか分かってるのかしら？」
「えっ？それは・・・・」
皆竜二を見る。
「奈穂さーん助けて下さーい」
奈穂さんに縋る俺。
「グハッ」
吐血した昇。

「うわ～ん。僕汚れちゃいました～」
泣きわめく岡崎。
「・・・・・・・」
その場所から動かない杞沙さん。
「よしよしあなた達いらっしゃい。もう怖くないわ」
そして皆（竜二以外）を優しく包み込む奈穂さん。
俺奈穂さんの事勘違いしてました！
「俺の扱い酷くね！！？」
竜二が何か言っているが聞き取れない。
俺は今奈穂さんに感動しているんだから邪魔するな！竜二の分際で！！！！

「・・・・計画通り」
奈穂さんが何か呟いたが聞き取れなかった。

「オラァ！」
「甘いわぁ！」
「見切ったぁ！」
皆でベタな枕投げ。
楽しい楽しい枕投げ。
ついでに俺は就寝中だ。
「・・・うるさいわ！！」
「おまえは寝んじゃねぇ！」
竜二の攻撃。
（バフッ）
俺枕直撃。
俺強制退場。
「・・・さよなら」

俺は優しく・・竜二を葬る。
竜二選手声もでない。
俺のアイアンクローは最強です。
ちづ姉には敵わないけど・・・それ最強じゃないじゃん！
と自分ツッコミする俺でした。
「ぐ、苦しい。な、直哉俺、限か・・・・・・・・」
息が無い。
ただの屍の様だ。
俺は手を離した。
床に落ちる竜二。
「ゲホッゴホッ」
俺は竜二の肩に手を乗せる。
「竜二大丈夫か？」
心配する俺。
なんて優しいんだ。
自分で自分に感動する。
「ああ、ありが・・あれ？俺って何で倒れてたんだっけ？」
竜二記憶喪失。
「・・・枕が顔に当たって倒れたんだよ」
俺は優しい顔で嘘を教える。
「そっか。なるほど。でも、俺軟弱すぎんじゃね？」
「当たり所が悪かったんだよ」
「そっか。ありがとう」
「えっ！？M？」
「違うわ！！」
「だよね。ゴメン、俺間違ってたね」
「そうそう」
「竜二はドMだもんね？」
「そうそうって違ーーーーーう！！そこじゃねぇ！俺はNだ！」
「ナルシストか！？」

「違うわぁ！！」
「違うの！？」
「そこ疑問！？・・・ブフッ」
竜二枕直撃。
「やりやがったな！直哉行くぞ」
「おう！」
竜二が行くのに俺はついて行かなかった。
「痛っ！・・直哉！後ろから来・・・・」
やべえ顔がニヤける。
俺は三対一で竜二を枕で叩く。
「やべえ、楽しすぎる」

修学旅行一日目・・・・終了！！

十八日目　修学旅行二日目

「・・・ろ・・・起きろ」
俺は誰かに揺さ振られている。
「直哉。起きろ」
「・・・んん？」
俺を起こしたのは夏希さんだった。
「・・夏希さん？どうして此処に？」
俺は辺りを見回すが修学旅行で俺に当てられた部屋で間違いない。
という事は夏希さんが俺の部屋に来たんだ。
「悪いんだけど、ちょっと来てくれないか？」
夏希さんはそれだけ言って部屋の扉に向かう。
俺は頭をボリボリと掻いてから夏希さんの後を追う。

夏希さんの後を追っていくと外に出た。
時刻は４時２０分。
俺達の宿泊先から結構離れた所で夏希さんが足を止めて俺を見る。
「夏希さ・・・」
「起こして悪かったな」
夏希さんが先に詫びを入れる。
「少し気になる事があって、他に人がいると後が面倒くさいんだ。
だからこんな朝早くに起こしたんだ」
「・・・それで気になる事って？」
「・・・・・・・・・・・・」
夏希さんが苦しそうに俯く。
「夏希さん？どうしたんですか？」
「・・・いや、何でもない」
夏希さんは俯いたまま顔を上げない。
「・・・・・ごめん。やっぱり良いや」

「夏希さ・・・」
「悪かったな。勝手に起こしたのに、意味なかったな」
夏希さんはそう言って何処かに行こうとしている。
「夏希さん、何処に行くんですか？」
夏希さんは俺に顔を向けずに声を出す。
「少し散歩してくる。じゃあまた後で」
そう言って俺に手を振る。
「・・・・何だったんだろう」
俺は疑問のまま宿泊先に歩を進める。
俺は二度寝しました。

「・・・・まだ、良いよな？別に決まった訳じゃないし」
夏希は空を見上げて呟いた。

「直哉。起っきろう！」
竜二に布団を剥がされた。
もちろん、竜二には必殺のアイアンクローを決めました。
（＾∀＾）
時刻は６時。
６時３０分に朝食だ。
俺はまた布団に潜り込む。
（ガチャッ）
扉が開いた音がした。
それからすぐ、俺の布団が剥がされた。
俺が布団を取った人物を探すと布団を持っているのは奈穂さん。
「・・奈穂さん？何ですか？」

「起きなさい。そして私に飲み物を買ってきた方がいいわ。後が恐いわよ」
「パシリかよ！」
いきなり起こされてパシリに使われました。
俺は今自動販売機のボタンを押した。
（ガコンッ）
奈穂さんに逆らえない俺でした。
奈穂さんの分（ファ〇タのグレープ）と俺の分（紅茶）を買って後は竜二の分（コーラ）を買った。
竜二に『ついでに俺のも頼む』って言われたので買ってあげた。
帰りが楽しみだ。

「・・・あれ？・・・杞沙さん？」
俺は部屋に戻る所で俺が飲み物を買った自動販売機とは違うもう一つの自動販売機の前で立ち往生していた杞沙さんを発見。
俺は話し掛ける事にした。
「杞沙さん。どうしたんですか？」
杞沙さんが俺に気付いて振り向く。
「・・・・迷った」
「迷った？何に？」
俺は疑問を口にする。
「・・・・何を買うのか」
「ああ、あるね。たまに」
杞沙さんが俺の持っている缶の飲み物を見つめる。
「ん？どうしたの？」
「・・・・何を買ったの？」
「えーと・・フ〇ンタにコーラに紅茶かな」
「・・・・一人で？」
「違うよ。奈穂さん・竜二・俺の分だよ」

「・・・・直哉は？」
「俺？俺は紅茶だけど」
そう言うと杞沙さんが自動販売機に向き直る。
言っときますがこの自動販売機には紅茶を売っていません。
これで俺がわざわざ遠い自動販売機に行った理由が分かったかな？
（ピッ）
（ガコンッ）
杞沙さんは迷いなくコーヒーを押した。
「杞沙さんも俺の部屋に来る？奈穂さんと竜二と昇しかいないけど」
俺に杞沙さんは頷いた。

俺と杞沙さんは俺に当てられた部屋に入る。
「奈穂さーん。竜二ー買ってきましたよー」
「おう。サンキュー」
竜二がコーラを受け取る。
「俺をパシリに使うなよ」
俺は竜二に一様言っとく。
奈穂さんに言わないのはどうせ聞かないからだ。
奈穂さんはファン◯を受け取る。
「朝のコーラは格別っていうぐらいだから楽しみだぜ」
竜二が缶コーラを開けるとコーラが吹き出した。
「・・・・・・・・・・・・」
黙り込む竜二。
「おい。竜二、リアクションは？」
「・・・・・・・か」
「えっ？なんて言ったの？聞こえない」
「・・・リアクション取れるか！！俺のコーラを被る前の言葉覚えてる！？俺めっちゃ楽しみにしてたんだ！それなのに何だこれ！？馬鹿にしてんのか！！」
竜二にコクっと頷く俺。

俺キマってる？
今まで黙っていた奈穂さんが声を出す。
「あなたそれじゃあ芸人になれないわ」
「なりたくねぇから！俺芸人になると思ってんの！？」
「思ってたわ」
「思ってんのかよ！思うなよ！」
「心ぱ～～いないさぁ～～～～！！！」
「意味分かんねぇから！！っていうかその真似読者に伝わらないから！！」
読者「伝わってますよぉ～」
「伝わってんのかよ！！スゲーなー！おい！」
読者「竜二うざーい」
「うるさいわっ！俺ウザくないからっ！！お・・・れ・・うざ・・・く・・・・・・・・・」
「泣いた！？竜二泣いた！！」
「・・・泣いては駄目よ。男が泣いて良いのは家族が死んだ時と彼女が死んだ時と自分が死んだ時よ」
「全部死繋がりなんですけど！！？後自分死んだら泣けませんよね！？」
「泣けるわ」
「どうやってですか？」
「気合いで何とかするしかないわ」
「出来ませんから！！奈穂さんは気合いを過大評価し過ぎです！」
「どうして出来ないと言えるのかしら？病は気からって言うでしょう？それ程気というのは強いわ。
直哉は過小評価し過ぎてるわ」
「・・・そうかもしれないですね。俺の負けです」
口論になっても俺が負けるだろうからここで引く。
「ならこれを開けなさい」
奈穂さんが〇ァンタを俺に突き出す。

「・・・まさか開けられないとか？」
「そう思う？私もコイツと同じ事されてるかもしれないからよ」
奈穂さんが泣き崩れる竜二を指差しながら言う。
「してませんよ。奈穂さんにそんな事をしたら後が怖いですから」
「・・じゃあもっと怖ーい罰ゲームが良いかしら？」
奈穂さんが獲物を狩る目で俺を見る。

もちろん開けました。

修学旅行二日目は自由行動。
俺達は俺と竜二と今まで一言も話していない昇と後一人名前は確か神谷（かみや）　剣（けん）の部屋に居る。
「そういえば昇って何で一言も話さなかったの？読者様に忘れられるよ」
俺は昇に尋ねる。
「俺な。朝駄目なんだよな」
「そうなんだ」
「で？どうすんだ？」
「何が？」
俺が竜二に聞く。
「さっきの答えだよ」
「さっき？昇の朝駄目な話？」
「ちげーよ」
読者様は何の話かわかりますか？
分かるかっ！！
等の反応は却下の方向でお願いします。
俺は周りを見て皆をアイコンタクトで反応を見る。
昇。

（わからない）
岡崎。
（わからない）
奈穂さん。
（わからない）
杞沙さん。
（わからないかどうかわからない）
杞沙さんが俺に目を合わせてくれません。
そんなに俺が嫌なのか！？
かなり凹む。
そんな俺の気も知らないで竜二が何かを言っている。
「だから俺がモテる方法だよ！」
モテる方法？
何でコイツこんなに威張ってるの？
少なくても人にものを尋ねる態度じゃないよね？
・・・・やべえまた俺の封印されし右腕が疼きだした。
〔それは死ぬしかないね〕
全員一致で竜二に死を与えます。
やったー！

「何で俺ってやられキャラ？」
竜二が床に寝転びながら聞いてきた。
皆の代わりに奈穂さんが。
「それはあなたが悪いわ。モテる方法なんて聞いてきた時点でフラグが立ったわ」
「そんな事で？」
「・・・・・・・・・」
「おいっ無視か！」
「・・・・じゃあ今日はもう解散しましょう」
俺の言葉で皆（竜二以外）がぞろぞろと自分に当てられた部屋に向

かって俺の部屋を出る。

修学旅行二日目・・・・終・・・・了！！！

十八日目　修学旅行二日目（後書き）

お久しぶりです。
ＢＪです。
この小説を見て下さりありがとうございます。
フォーーーーー！！！
一人で何故か盛り上がっている僕でした。
恥ずかしい（／／△／／）

おい！お前何一人で盛り上がってんの？
お、お前はＪ！・・・予想外です
俺が居たの気付いてたよな！？
えぇっ
何驚いてんの！？可笑しいよな！
フッフッフッ・・・甘いわぁ！！
ぎゃああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
！・・・・・気が済んだか？
済みましたっ！
このＢのくせにやりやがったなあ！！
グフッ！・・・なんだよ女子のくせに！
違うからっ！！Ｊだけど女子じゃないから！じゃあお前は何なんだよ！
男子でしょ
・・・・・・・・・・・・
ちくしょうーーー！！！

十九日目　修学旅行三日目最終　　日（前書き）

俺の学園生活を読んでのご感想をお待ちしております。

十九日目　修学旅行三日目最終　日

俺達は今お土産を買いに来ています。
「な～おや」
「き～もい」
「グハッ」
竜二をノリで撃破。
「奈穂さん。奈良と言えば何ですか？」
「カステラ」
「ですよね～って違ーーう！！」
「おまえ馬鹿だな。奈良って言ったら八ツ橋だろ」
「「・・・・・・・・」」
あまりにも馬鹿だからツッコめない。
せめて真顔で言わないで！
冗談だと思わせて！
「馬鹿だな竜二。奈良と言ったら奈良の大仏だな」
持って帰れるかっ！
昇、お前は大丈夫だと思ってたのに！
「それか鹿だな」
飼えるかっ！
お前家に鹿飼ってるの！？
鹿って飼えないよね？
「なら大仏買いましょう」
「奈穂さんまで何言ってるんですか？大仏なんて買えませんよ」
「買えるわ」
奈穂さんが言うから出来ないと分かっててても期待してしまう俺がいました。
奈穂さんが何かを俺に見せる。
「キーホルダーかよ！期待して損しました！」

「・・・・あれ？杞沙さんがいない」
俺は辺りを見るも杞沙さんを発見出来ず。
「あ、あの。堀川さんなら向こうにいます」
岡崎が指差す方向を見ると俺がいる店とは正反対の店に夏希さんと一緒にいる杞沙さんを発見。
「本当だ。どうも」
俺は岡崎に礼を言ってから杞沙さんに歩を進める。
「杞沙さんどうですか？決まりましたか？」
杞沙さんがコクりと頷く。
俺は夏希さんに目線を変える。
「夏希さんはどうですか？」
「ん？・・・ああ、決まった」
俺は辺りを見回す。
「夏希さんの班の人達は？」
「別行動にしてあるんだ。うちの班は私以外彼氏とデートだよ」
「じゃあ俺達と行きましょう」
夏希さんは杞沙さんを一回見て。
「・・・ああ、行かせてもらおうかな」

「・・・・・ん？あれは！」
「おい、竜二。何処行くんだよ！」
竜二が突然走り出した。
竜二が向かった先は・・・・同じ学園の生徒でした。
あっ、奈穂さんのドロップキックが竜二の後頭部に命中。
竜二が何か言ってるが遠くて聞こえない。
俺達は竜二の近くに行く。
「竜二。修学旅行の最終日にナンパはどうかと思うよ？しかも学園

の生徒。」
「仕方ねぇだろ！最終日にしか出会いが無かったんだ！それに俺に遠距離恋愛は出来ん！」
「いや、そんなに威張られても・・・」
別に威張れる事じゃないと思うよ？
「・・・なあ、竜二。お前がナンパした相手何処かに行ったな」
「なにいいいいい！？」
昇の言葉に竜二が振り向くがさっきナンパした相手は忽然と消えていた。
「・・・おまえらのせいだ！特におまえだ！！」
竜二が奈穂さんを指差す。
「私のせいにしないで鏡を見ると良いわ」
「俺は顔良いだろ！」
「普通の鏡じゃないわ。真実の鏡よ」
「何それ！？」
「・・・・じゃあ直哉行きましょ」
「無視か！おまえ無視するの多いな！！」
「そうよかったわね」
「・・・・・・・・・」
何か見ていて辛い。
竜二ドンマイ。

「この組み合わせ。ヤバいな」
何かを呟いている夏希さんでした。

修学旅行三日目・・・・終・・・・・・・了！！！！！！！！！

二十日目　訪問

今日は土曜日。
俺は今、校長先生に会えと言われ。その人物のマンション前にいる。
「会えば分かると言っていたから俺の知っている人なんだろうけど、このマンションに住んでいる知り合いはいないぞ」
俺は見るからに高そうな高級マンションを見上げる。
俺は軽く深呼吸してから中に入る。
７０２号室のインターホンを鳴らす。
・・・・・・・・・・・・・
『・・・・はい』
電話の向こうからは男の声。
「あ、あの！西谷直哉ですけど！その桜林学園で！校長先生が！」
『・・・クッ、アッハッハッハッハッハッ・・・・・』
向こうから笑い声が聞こえる。
『そんな堅くならなくて良い。
知らない人じゃあるまいし』
「・・・誰かわからないんです」
『・・・ああ、そういう事か。俺の名前を聞いてないからだな。でも、名前を聞いた所で意味はないがな。俺、名前変わってるし。まあ、入って来ると良い。誰かは会ってからのお楽しみという事で』
（プツッ）
通信が途絶えた。

７０２号室をノックした。
「・・・どうぞー」
俺は中に入る。
中もかなり綺麗である。
洋風になっていてわざわざスリッパも用意してくれた。

「こっちだ」
俺は声がした方に歩を進める。
俺はすぐに顔を見るとその人物は・・・・・忘れた。
顔は覚えてるというか会った事はあるような感じなんだけど・・・
名前を覚えてない。
「西谷久しぶりだな」
「・・・・・誰でしたっけ？」
「・・・・本当に？」
言葉の代わりに頷く。
この人は黒髪で男性の割にはだらーんとかなり長い髪をしている。
年は見た目四十代だ。
「西谷の両親と一緒によく集まった事あるだろう？西谷の遊び相手もしてあげただろう？覚えてないか？」
首を横に振る。
「・・・・・・お前の母親の兄だよ」
「・・・・・・・・・・・・・ああ！！」
「思い出したか！？」
「全然」
「・・・・・・・・」
「まあ、お母さんの兄なんでしょう？親戚って事で納得したから良いじゃないですか」
「・・・・まあ、そうだな。それで我慢しよう」
「それで用事ってなんですか？」
「ああ、ちょっと西谷に頼みがあってな・・・俺の事も知らないなら俺の娘の事も知らないな？その娘の学園初の友達になってほしいんだ」
「・・・学園初？転校ですか？この時期に？」
「そう、俺も一週間前に引っ越して来たばっかりでな友達が学園に一人でもいると友達が出来やすいって聞いたから西谷頼むな」
「まあ、別に良いですけど・・どんな人ですか？」

「明日お前の家に行くから分かる」
「なんでですか？写真でも良いじゃないですか」
「写真じゃあ限度があるだろう？それに挨拶はしておいた方が良いと思うが？」
「・・・・そうですね・・・まさかこの為だけに俺を呼んだんですか？」
「ああ」
「明日でも良くありません？」
「予定があったら嫌だからな」
「じゃあどうして内密にした方が良いんですか？」
俺は前校長先生に言われた事を尋ねる。
「その方が面白いからだ」
「・・・・じゃあどうして校長先生から俺に来るよう言ったんですか？校長先生も忙しいでしょ」
「一番芹沢と仲が良いんだ。だから芹沢に頼んだ」
芹沢というのは校長先生の名前だろう。
「わかりました。それじゃあ最後に一つ。あなたの名前はなんですか？」
「お兄ちゃんと呼ん・・・」
「嫌です」
「・・・ああ、そう。じゃあ黒嶋（こくじま）と呼んでくれたら良い」
「わかりました。それじゃあ失礼します」

二十一日目　挨拶

明日は修学旅行の代休で無くて明後日から俺の母親の兄（黒嶋さん）が入学式から三週間しか経っていない学園に娘を転校さして来る。
黒嶋さんは俺にその娘の友達になれと言って、今日俺に挨拶に来る。というのが昨日、黒嶋さんが俺を家に呼んだ理由。
（ピンポーン）
家のインターホンが聞こえ俺は玄関に向かう。
扉を開けるとそこにいたのは黒嶋さんと・・・見た事がある人物。
「「・・・・あっ！図書館にいた人！」」
「何だ？お前ら合った事あったのか？それはそれで面白い」

「・・・そんな事があったのか・・・・こっちに来て西佳に地方見物をさせて正解だったな・・・・・予想通り」
「絶対違いますよねっ！？」
「じゃあ俺はこの辺で・・・・後は若い二人でどうぞごゆっくり～」
黒嶋さんが部屋を出た。
「あ、あの、すい、ません」
「いえっ、何かもういいです。一日しか記憶にありませんが黒嶋さんらしいですし。あっ、俺は西谷直哉です」
「黒嶋西佳です」
黒嶋西佳（せいか）という名前らしい。
「黒嶋さんとは全然違いますね？」
「はい、お、父さんと、は全然違い、ます。お母さ、んの血が濃、く出たんで、す」
「どうしてそんな途切れ途切れで話すの？」
「すいま、せん。ま、だ、普通に話せ、ない、んです。だからもう少し我、慢して下、さい」

「分かりました」
「あ、あの、ご趣、味は」
お見合いかっ！！とツッコミたいが抑える。
「・・・・趣味ですか？趣味は特に無いです。すみません」
「い、えっ謝る事無いで、す」
「黒嶋さんはどんな趣味を持っているんですか？」
「本、を読、む事は好き、です」
「そうなんですか。俺も本はたまに読みます」
「そう、なんですか？あのどんな物語が多、いですか？」
「ジャンルですか？ジャンルはコメディーとかファンタジーが多いですね。黒嶋さんはどんなのを？」
「私も同じ、です」
「そうなんですか！？失礼ですけど少し予想外でした」
「では、どんな物語を予想し、ていた、んですか？」
「・・・・恋愛とか？」
「た、まに読みま、すが普段は西谷、さんと同じで、す」

その後も本についての意見や感動した本。面白い本の紹介まで色々盛り上がった。

「あの今日は本についてばかりですけど楽しかったです。ありがとうございました」
「俺も楽しかったです・・・・そういえばいつの間にか途切れ途切れで話していませんね」
「すいません。私緊張したら途切れ途切れに話してしまうんです」
「じゃあ西佳帰るか？」
黒嶋さん（母兄）に黒嶋さん（娘）が頷く。
二人が車で見えなくなるまで俺は見送っていた。
「・・・・ちづ姉ー。二人とも帰りましたよー」

「・・・・・ごめんね。ありがとう直くん」
ちづ姉が家のベランダから出て来る。
「ちづ姉に苦手な人がいるなんて知りませんでした」
「お姉ちゃんにだって苦手はあるんですよ」
「母兄の方ですか？」
「うん。ごめんね。ありがとう直くん」
「別に良いです。ちづ姉の苦手が分かるという凄い利益がありましたし」
「直くんが優しいのか酷いのかわかりません」
「どっちもですよ」

二十二日目　小説

今日は代休でお休みなのだー！

・・・・・・・・・・・・・・

すいません。
あまりの嬉しさで変になりました。

では、気を取り直して次行ってみよう！

・・・・・・・・・・・・・・

今日は読書日。
ちづ姉と俺は読書をしていた。
別に決まっている訳ではない。
ただ暇だからだ。
では、俺が読んでいる本の物語を話そう。

この話は、一人の少年が廃墟になっている学校に入った少年を綴っている。

少年は一歩一歩軽い足取りで歩く。
「幽霊なんかいないって証明してやる」
学校で幽霊は存在すると証言した人と存在しないと証言した人が出来て少年は存在しない方だった。
少年はそれを証明する為に一人で必ず出ると言われた廃墟になった

学校に赴く。

少年が三階への階段を上がるとさらに上の四階から

（カランッ）

という何かが落ちた音がした。

「・・・・もしかして・・・・アイツらか？」

少年が言うアイツらとは幽霊の存在を証言した人達の事を示す。

少年は四階に向かう。

少年の足音だけが響く。

（ギィーッ）

（キィーッ）

古い扉が軋みながら開いたり閉まったりした音がする。

「・・・・やっぱり、アイツらか・・・・・」

少年は音がなった扉に手を掛ける。

その場所は調理室。

少年は扉を開けて中に入る。

（バタッ）

「痛！」

少年が何かに躓いた。

躓いた物はさっき四階から聞こえた何かが落ちた音の正体であろう

筈だった。

「・・・・これでアイツらが来ているのは確定だな」

少年が幽霊は物体に触れないという間違った知識のせいで死に至る

事をまだ知らない。

この時に逃げていれば命は助かったのかもしれない。

これが幽霊からの最後の警告。

「・・・・・此処か？」

少年はアイツらだと思い込んで少年から見て机の裏側一つ一つ見て

いく。

「・・・・・・・・・・・・じゃあ此処か？」

（ガッ）

誰かが少年の足を掴む。

「そんなんじゃ怖くねぇよ」

少年がそう言って振り返る。

そこにいたのは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「直く〜〜ん。ご飯だよ〜」

ちづ姉に呼ばれて俺は本を閉じる。

謎は謎のままで良いよな？

二十二日目　小説（後書き）

幽霊は物体に触れるのかは知りません。

僕は幽霊は存在すると思っています。

幽霊がいるという証拠もありませんし金縛りにもあった事はありませんが幽霊が存在しないという証拠も無いので僕は存在すると思った方が良いと思います。

どうでも良い話でしたね。

ＰＶ５０００人突破です。

ユニーク約１０００人です。

後もう少し！

頑張れ！頑張るんだ！

ＢＪーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！

！！！！！！！！！

まあＢＪが頑張っても意味無いとは思いますが

１０００人を突破するには読者様のお力が必要不可欠です。

読者様よぅー！

オラに元気を分けてくれぇ

此処でオープニングが流れます。

これが読者様に伝われば良いんですが・・・・・・

世の中！そんなに甘くありましぇん。

僕は死にません！あなたの事がしゅきだから風

あれなんでしたっけ？

確か１０１回目のプ〇ポーズでした様な感じがします。

間違ったらすいません。

またこの小説の続きを読んで下さいお願いします。

ではまた何処かでお会いしましょう！

読者様からネタが欲しいです。

なんでも良いのでよろしくお願いします。

宇宙人についてとかはご勘弁を・・・

一般市民がネタで会話が出来そうなやつでお願いします。

でわでわ

さよ～なら～

（花畑で白いワンピースを着て大きく手を振っている姿をご想像下さい）

二十三日目　転校生

「では、今日は転校生を紹介します」
武中先生に川嶋が尋ねる。
「なんでこの時期にっすか？」
「知りません」
笑顔で即答でした。
「男ですか？女ですか？それとも間ですか？」
（間って何だよ！カマか！？カマなのか？）
あれは神谷　剣だ。
俺の周りボケしかいねぇ！！
「女性です」
「美少女来たー！！」
美少女なんて言ってないよ！
ついでにコイツの名前は忘れた。
「それではどうぞ入って来て下さい」
武中先生じゃない川嶋が武中先生の真似をして転校生を呼び出した！！

（ガラガラ）
彼女。黒嶋西佳さんが教室に入って来ました。
違うから！
武中先生読んでないから！！
「・・・まあ、良いでしょう」
良いんだ！
それで良いんだ！！
「あ、あ、の黒、嶋西、佳で、す・・・よ、ろしくお、願、いします」
・・・・・・・・・・・・・・・
皆黙り込む。

美少女かどうかわからないよな？
まあ、仕方ない感じがしないでもないがそれは失礼だろ。
〔・・・・・・・・・・・・これはこれで良い！！！〕
良いのかよ！！
お前ら守備範囲広いわ！！！
結局お前ら女性だったら良いのかよ！
この変態らが！
「では、あの席です」
武中先生が空いている席を指差す。
「先生。質問時間は？」
「欲しいですか？」
武中先生が笑顔で生徒を見る。
「ありますよ。一時間目の先生の授業で質問しましょう。ＨＲは伝えなければいけない事がありますので」

武中先生がＨＲに伝えなければいけない事とは今月末にある学級祭の事だった。
学級祭とは各クラスで一日好きな事をしようという物だ。
これはクラスの絆をテーマにした行事。
クラス皆で一つの事をする。
それは心を一つする事と何ら変わらない事。
一つは全てを一つにする。
その為にこの行事が作られた。

「・・・・・黒嶋？どうして直哉の腕を掴んでいるんだ？」
竜二が俺の袖を掴んで離さない黒嶋さんに言う。
黒嶋さんがギュッと掴んでいる手に力を入れる。

「あの黒嶋さん？俺勘違いしちゃいますからね。他の人も勘違いするからね。だからちゃんと話そ」

「恋人の事かああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「わっ！違！竜二落ち着け！話せば分かる！」

「問答無用じゃこらぁ！！皆行くぞぉ！！出陣じゃあ！！！！！！」

「待っ、待てーーーーー！！！！！」

二十三日目　転校生（後書き）

ネタを下さい！
（藁をも掴む勢い）

五月からそのネタを使いますが

ネタ（議題）を出してくれるとＢＪがそのネタで五百文字以上書くのでよろしくお願いします。
ｍ（＿＿）ｍ

感想等をお待ちしております。

ＢＪを罵って下さって構いません！

ＢＪはそれでしか成長出来ないのです。

ーーーー男女よりーーーー

二十四日目　ポーカー（前書き）

ただの雑談（遊び）です。

二十四日目　ポーカー

俺達（俺・竜二・昇・奈穂さん・杞沙さん・岡崎・黒嶋さん）は今昼休みにポーカーをしていた。
「・・・・フッフッフッ・・・・これで終わりだ！スリーカード！！」
竜二が笑いながら場に出したのは四のスリーカード。
「甘いわ。私はフルハウスよ」
「なにいいいいいいいいいいいい！！！」
対する奈穂さんはジャックが三枚。六が二枚のフルハウスだ。
俺はブタ（目無し）でドロップ（降りる）を選択していた。
昇も目はわからないがドロップ（降り）していた。
杞沙さんもドロップ（降り）。
岡崎は十が二枚と七が二枚のツーペア。
ツーペアとしては微妙な位置だ。
黒嶋さんは九のスリーカード。
「・・・・・竜二黒嶋さんにも負けてるよ」
「グハッ！」
吐血っ！？
俺の一言で竜二が吐血してしまいました。
「西佳やるわね」
「いえっ、たまたま良いのが来ただけです」
黒嶋さんを奈穂さんが褒めるが否定して俯く。
「運も実力の内って言うだろ？だから誇って良いと思うな。自慢し過ぎは駄目だと思うけどな」
昇も黒嶋さんを褒める。
「・・・・・じゃあ次やろうか」
俺はカードを集める。
一人五枚ずつカードを配る。

自分に与えられたカードを自分だけが見て、カードを数枚一回だけ山札の上から交換する事が出来る。
「・・・じゃあ二枚チェンジ」
「俺は四枚」
「・・・・・一枚」
「僕は二枚」
「私は三枚」
「私も三枚です」
「俺は二枚」
上から昇・竜二・杞沙さん・岡崎・奈穂さん・黒嶋さん・俺だ。
竜二に関してはブタ（目無し）だと言ってる様な物だ。
俺のカードはクイーンが二枚とジャックが二枚のツーペア。
ツーペアとしては最強だが今までの奈穂さんの活躍からしてツーペアでは勝てない。
此処はドロップ（降り）をする。
竜二と黒嶋さんもドロップ（降り）をしていた。
昇と奈穂さんと杞沙さんと岡崎は勝負に出る。
「あの僕はこれです」
岡崎は五のスリーカード。
「残念ね」
奈穂さんはジャック・十・九・八・七のストレート。
「この勝負俺が貰った」
昇はクローバー五枚のフラッシュ。
「・・・・勝ち」
杞沙さんはクイーンが二枚・二が三枚のフルハウス。
この勝負は杞沙さんの勝ちだ。
杞沙さんは奈穂さんのカードがフルハウス未満だった場合はいつも勝つ。

第十五ラウンド。
「もう昼休みも終わるからこれで最後」
俺は皆にそう告げてカードを配る。
「最後はやっぱり皆場に出しましょう」
奈穂さんの提案に皆頷く。

「い出よ！スリーカードー！！」
竜二が叫びながら出したカードは六のスリーカード。
「僕はツーペアです」
岡崎は四が二枚・二が二枚のツーペア。
現在の一位は竜二。
「俺はワンペアだ」
昇は三が二枚のワンペア。
現在の一位竜二。
「私はフルハウスよ」
奈穂さんはジャックが二枚・八が三枚のフルハウス。
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
現在の一位奈穂さん。
「私はこれです」
黒嶋さんは九が二枚・十が二枚のツーペア。
現在の一位奈穂さん。
「・・・これ」
杞沙さんは五のフォーカード。
現在の一位杞沙さん。
最後は俺、西谷直哉です。
此処はこの小説の主人公らしくロイヤルストレートフラッシュで勝つ。
「オラァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！！！！！！！！　ロイヤルストレートフラッシュじゃあ！！！！」

最終勝者は杞沙さんでした。

ブタ（目無し）でした。

皆。世の中そんなに甘くないんだよ。

二十五日目　ゲーム

今日は４月２９日。
祝日、昭和の日。

今俺は竜二の家に来ていた。
ついでに今ゲーム中です。
カセットはガンダムＳＥ〇Ｄ　ＤＥＳＴＩＮＹ　連合ＶＳＺ．Ａ．Ｆ．Ｔ．　？ＰＬＵＳだ。
「いっっっっっっっけーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
竜二が時を〇ける少女並に叫びながらストライクフリーダムでスーパードラグーンを発射した。
「甘いわぁー！！！」
俺は指揮官用ゲイツで空に飛んでスーパードラグーンを避ける。
「来たな！ザックザクにしてやんよ！」
「何それ！？」
竜二が何か意味がわからない言葉を放ってビームサーベルで斬ろうとして来る。
「・・・・・・・・・」
俺はビームサーベルを普通に横にステップ回避をして避ける。
そして・・・・・・・・
「ザックザクにしてやんよ！」
指揮官用ゲイツのビームクローで何度も刺す。
（ボーン）
『お母さん・・・僕の・・・ピアノ』
「ニコルーーーーーーーーーーー！！！！！」
竜二がパイロットの名前を叫んで泣いている。
「おまえは・・・ニコルを殺した！！うあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

竜二がイージスに乗ってラッシュ覚醒してビームライフルで撃って来る。

（ドーン）

『うあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！』

「トールーーーーーーー！！！！！」

俺も変な空気に乗る。

「アーーースラーーーーーーーーン！！！」

俺はエールストライクに乗ってイージスにブーストダッシュして向かう。

「キーーーーーラーーーーーーーーーー！！！！！」

竜二もブーストダッシュで向かって来る。

俺はスピード覚醒する。

竜二はラッシュ覚醒する。

「「うおおおおおぉぉ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」」

（ドーン）

俺ＷＩＮ

初めて主人公らしい終わりになりました。

二十六日目　学級祭

今日は学級祭。
皆が楽しい学級祭♪・・・・にはならなかった。

「鬼ごっこしましょう」
武中先生の一言で始まった。
『えー』
皆が不満の声を漏らす。
すると、武中先生が何かを考え始める。
（俺達の意思が伝わった！）
と思ったのもつかの間。
武中先生は満面の笑顔で。
「・・・・では、嫁姑ごっこでもしましょう」
『だから、何でいつもチョイス可笑しいの！？』
「良いですよ？嫁姑ごっこ」
『良くないよ！あれだろ、嫁と姑のいざこざをするんだろ！？嫌だわ！もし、踏み間違えたらギットギトになるだろ！』
「それが面白いんじゃないですか。それにリアルにそういう事ありますよ？練習しといて損は無いと思いますが」
『面白くないから！リアルにあるから嫌なんです！そんな練習嫌だわ！その練習自体間違ってるから！』
「でも、練習しといて損は無いでしょう？」
『・・・・・・・・・・・・・』
皆黙り込む。
確かに損は無いだろうけど間違ってる。
何か道を踏み外している気がする。
っていうか姑に失礼じゃね！？
これ見てる姑の額に血管が昇ってるのが想像出来る。

皆黙り込んでいると武中先生が。
「・・・じゃあ鬼ごっこ決定ですね」
『何でだぁぁぁ

にする。
「たった今、竜二が鬼になった。ごめんね。テヘッ☆」
「・・・・・・・・・・・・・ちきしょう！！」
竜二が走り出すのを後ろから暖かい目で見ていた。

竜二が奈穂さんしか狙わなくて最後まで鬼だったというのは言うまでもないだろう。

バカ竜二バンザイっ！！！！！

二十六日目　学級祭（後書き）

また、来ましたＢＪです。

皆さん、お久しぶり？です。

何か最近ページ数が少ないですね。

ごめんなさい。

感想を下さい。

僕、感想が欲しいのです。

感想が一個も無いから良いのか悪いのかわからないのです。

先輩に聞いたのですが、

此処の小説を読んでいる人の九割は登録してないらしいですね。

是非、登録して僕に愛の手を～

まあ、別に無理しなくても良いですけどね。

それでは、皆さん。

さよ～なら～

ちょい待ちっ！

なんですか？

早いだろ！

何が？

終わりがだよ！

・・・・・・フッ

笑われたっ！！

仕方ないじゃないですか

むくれんなよ！お前男だろが！

男だってむくれたい時があるんです。

それ今なの！？

それにあなただって女性なのに男みたいな喋り方じゃないですか。

ほっとけ！！

美味しいよね。

何が！？・・・ホットケーキの事かあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

っていうかさぁ。絶対読者様あなたを僕が言うまで女性だって気付かなかったと思うよ？だから僕に感謝して欲しいな。家に帰って電話を待っといた方が良いと思うよ。

何でだよ

すぐに好きだぁぁぁぁぁ！！！！って電話が来るからですよ。

来ねぇよ！私何処でフラグ立てたんだよ！

女性だからです。

飢えてんのか！？女だったら誰でも良いのか！！って読者に失礼だろぉぉぉ

さっきから叫んでばかりだね

お前のせいだろが！

アア～ん、もっとぉ～

Mかっ！！！

嗚呼。快・・・・感

止めてくれえええええええ

二十七日目　友達

今日は五月一日。
五月の初めという事で・・・・・・何もありませんでした。
雨です。

「♪～――――～♪」
ちづ姉が何かを歌っています。
「何を歌っているんですか？」
「ん？奥華〇さんの歌だよ。雨関係で結構泣けるんだよ。聴く？」
「ちづ姉が歌うの？」
「・・・・お姉ちゃんの声で聞きたい？」
「それは御勘弁を」
「最近手が何かを殴りたいって叫んでいるんだけど・・・どうしよっか？」
「すいませんでした」
「分かればよろしい」
お母さん・お父さん、俺は暴力に屈しました。
「それで聴く？ＣＤあるけど・・・」
「・・・・そうですね。暇ですし」

ＴＩＺＵＲＵ　ＳＩＤＥ

・・・・・・・・・・・・・・
どうしよ・・暇です。
直くんは歌聴いているし・・・・・・・・・・・・・・

友達の家に行こう。
約束してたしね。
直くんは今歌聴いているから手紙書いとかないと・・・・・
私は『友達の家に行って来ます。遅くなるかもしれないから何か買って来て食べていて下さい』と置き手紙に書いてお金は千円札を置いて家を出る。
「じゃあ、行って来まーす」

（ピンポーン）
『・・・はい』
「すいません。西谷ですけど彩花さんいらっしゃいますか？」
『少々お待ち下さい』
「はい」
・・・・・・・・・・・・・・・・
『・・・もしもし、千鶴？』
「はい」
『予定より早くない？』
「・・・実は直くんに追い出されたんです」
『そ、そうか』
「はい」
嘘ですけどね・・・
『まあ、入りなよ』
「では、お邪魔します」
私は彩花さんの家に入って彩花さんのお母様に挨拶してから二階に上がった。
「お邪魔します」
彩花さんの部屋の扉を開ける。
「邪魔するんやったら帰って」
「分かりました」

私は帰ろうと踵を返す。
「待ってぇ～ごめん私が悪かったぁ～」
「そうですか」
私は部屋の中に入る。
彩花さんのフルネームは前田（まえだ）　彩花（あやか）。
肩まで無い短髪で少し金色がかった髪色。
母親は日本人、父親は外国人のハーフ。
エメラルドの瞳をしていた。
前田だから母親の姓を名乗っているんです。
父親と別れたからと思います。
他に特徴といえば・・・・・胸ですね。
言いたくありませんけどね！
神様は不公平です！
彩花さんはベットに腰掛けて私は座布団の上に座る。
「・・・・・・なあ、千鶴」
「はい」
私は彩花さんに呼ばれたので返事をする。
「・・・どうして千鶴って彼氏作らないの？」
そんなの決まっている。
「直くんがいるからですよ」
「その人が千鶴の彼氏作るのを邪魔してるの？」
私は首を横に振る。
「違うよ」
「じゃあ何でその人がいたら彼氏を作らないの？そろそろ身を固めないと後が大変になるよ？」
「分かってます」
「じゃあどうして？」
私は手に力を入れる。
「・・・・・ごめんなさい。今は答えられないです」
「・・・・それは私と千鶴の仲では話せないという事？」

私は首を横に振る。
「・・・・・・・・最初は直くんに言わなくてはいけないからだよ」
「・・・・そっか・・・・・じゃあ、シリアス的な雰囲気はここまでで飲もう！」
彩花さんがコップを高く持ち上げる。
「そんなお酒を飲む勢いで言われても・・・・」
「じゃんじゃん酒持って来ーい！」
「私達未成年ですから駄目です！」
「そんなんだから残念な体なんだよ」
「なっ！？か、関係ありませんよ！」
「説得力無いなぁ～」
「何か眼が親父ですよ！彩花さん」
「そりゃあ！」
彩花さんが飛び込んで来ました。
「い、いやあああぁぁぁぁぁぁ！！！」

NAOYA　SIDE

「ただ～いま～」
ちづ姉の声がして俺は声がした方・・・玄関に向かう。
玄関に着くとちづ姉が床に寝転んでいた。
「・・・ちづ姉。何し・・・って酒臭っ！ちづ姉酒飲んだの！？」
ちづ姉がアホ顔で俺を見るだけで何も答えない。
「・・・・ほら、寝るんなら自分の部屋に行って寝て下さい」
ちづ姉からの返事はない。
「・・・・はぁ」

俺が部屋まで運びました。

明日が楽しみだ。

二十八日目　お酒

「うぅ・・・直く～ん・・・水～」
「はいはい」
二日酔いで一人苦しむかと思ったけど俺まで巻き込まれました・・・
予想外です。
「・・・・・あれ？」
来ない。
あのよくわからないツッコミが来ない。
・・・・・・・・・・・・・・・ハッ！
寂しいと思ってしまった。
クッ、重症だ。
俺は水を持ってちづ姉の部屋に入った。
「ちづ姉。水です」
「うぅ・・・ありが、とう」
ちづ姉が水を受け取る。
ベットから上半身を起こして喉に水を通す。
「・・・それで、どうして酒なんか飲んだんですか？未成年でしょ？」
「・・・・・・・・・・・・・・・

（ピンポーン）
俺はインターホンが鳴ったから玄関に向かう。
玄関の扉を開ける。
その先にいたのは・・・・・・・・竜・・・
（バタンッ）
「あれ？誰かいた様な・・・・・・気のせ・・・・」
（ピンポンピンポンピンポン）
誰だ！インターホンを何回も連打する奴は！
俺は扉を開けた。
「おい！何で閉めたんだ！」
「・・・・・竜二。どうした？迷子か？竜二の家は向こうだぞ」
「迷子じゃねぇよ！おまえが差している方俺の家と正反対の方だろ！」
「チッ・・それで、どうした？迷・・・」
「言わせねぇよ！！？」
「チッ・・それで、何か用？」
「ああ、遊ばね？」
「・・・悪い。俺、今から友達と遊ぶから」
「今3時だぞ？今から遊び始める奴はいない筈だ」
「・・・・・お前には言えない言葉だけどな」
じゃあお前は何なんだよっ！
って言いたいが遠回しに教えてあげる。
「悪い。今、ちづ姉が二日酔いだから無理だわ」
別に二日酔いだから遊んだら駄目って訳じゃないから関係無いけどな。
「そうなのか？」
「ああ」
でも、竜二なら・・・
「そうか・・・じゃあいいや。千鶴姉さんによろしく言っといてくれ」

「ああ、悪いな」
「いや、じゃあな」
「ああ」

「直くん。お姉ちゃん復活！！」
「よかったですね」
「うん。よ～し、直くん遊ぶぞー！！」
「・・・・オー」
一応乗っておく。

二十八日目　お酒（後書き）

この後書きをどうするかが決まりました！

（パチパチパチパチ）

どうもどうも。

それでは発表です。

（ババン！）

毎日ではありませんが、ゲストをお呼びして私、ＢＪとお話しをしていきます。

という事で今日ゲストをお呼びしております。

西谷直哉くんです！

直哉「どうも」

これは初めての企画という事で主人公の西谷くんに来て頂きました。

直哉「よろしくお願いします」

さて、早速ですが読者様からお便りが来ています。

直哉「えっ！？嘘っ！！」

嘘です。

直哉「ああ・・・・ですよね」

ちゃんとツッコミを入れて下さい！

示しが付かないでしょう！

直哉「何で俺が怒られるんですか？」

何と無くです。

直哉「何と無くでツッコミを要求しないでくれるかな！！？」

注文の多い客だなぁ。

直哉「あなたのせいですよね！？」

さて、それではこの企画に出て西谷くんの今のご感想は？

直哉「めっちゃ立ち位置悪いです！」

そんなに気に入りましたか・・・いやいや、嬉しい限りです。

直哉「どう解釈したらそうなるの！？」

それでは、この小説の主人公になれたご感想をどうぞ。

直哉「いや、感想と言われても一ヶ月分しか出てませんし・・・」

そうですか。

では、ご感想を。

直哉「俺の話聞いてた！？あなたは今何に納得したの！？」

・・・・・・・・・・・・・・

直哉「何か言ってよ！小説で黙るの困るから止めよ！」

小説書いてるの私なんですが・・・

直哉「・・・・・・・・・・」

西谷くんの台詞、そのまま返します。

直哉「すいません。それでこの企画やるんですか？」

やりますよ！何か不満でもお有りですか？

直哉「いや、ただ、話が結構ぎりぎりじゃないですか？」

・・・そうですね。

ではこういうのはどうでしょう？

読者様に感想で各ゲストに対するお便りをお待ちするというのは？

直哉「この後書きの時みたいに誰も書かないと思うよ？」

うっ、で、でも待つ価値はあると思います！

直哉「まあ、別にどっちでも良いけど」

それでは西谷直哉くん
ありがとうございました！

読者様に頼み事が有ります。

それはこの後書きのゲストに対する質問・意見等を感想欄に書いて欲しいという事です。

次のゲストは天野竜二くんです。

心からお便りお待ちしております。

二十九日目　バスケットボール

今日は五月三日。
祝日。憲法記念日です。

「直哉！パス！」
俺は竜二からバスケットボールを渡されてレイアップシュートを入れる。
俺・竜二対神谷・昇で2対2のバスケをしている。
「ハンデやハンデ、ほな行くでぇ」
神谷が俺達に突っ込んで来る。
それに当たるは俺。
俺は神谷の進むルートに割り込む。
「・・・・にっ」
神谷が笑った顔を見せて前を向いたままでのバックパス！
「なっ！？」
神谷の後ろにいたのは昇。
昇がボールを受け取ると足を曲げて上に高く飛び上がる。
スリーポイントシュートだ。
昇がボールを放とうとした時、昇の前から何かが出て来た。
竜二だ。
だが、昇は平然とボールを放ってスリーポイントを決める。
「甘いな。それぐらい予想してたな」
ここまでの点数は２５対３３で神谷・昇の優勢。
神谷はスピードで勝負して来ても技術はかじった程しかないから案外簡単だ。
３３点の八割を入れた昇の方が強敵だった。
昇は今バスケ部に入っているから当たり前だろう。
むしろ、たった8点差しかない方が凄かった。

それは俺・竜二は運動が普通に出来て神谷が昇の足を引っ張る所が唯一の勝てる所。
だから8点差しかない訳だ。
つまり、この中で神谷が一番弱いのだ。
「ほらほら来な！全部ワイが倒してやるさかい」
一番威張っているのも神谷だった。
普通に神谷からボールを取って竜二とランパスを入れながら進む。
俺・竜二対昇で2対1の勝負だ。
俺は昇から一メートル離れた位置でスリーポイントを狙う。
だが、昇はすぐに間合いを詰めて来て俺がシュートフォームを崩す。
崩れながらも俺から横に五メートル離れた位置にいる竜二にボールをパス。
竜二は俺からボールを受け取ると少し進んでからジャンプシュートでツーポイントを狙う。
しかし、また、昇が竜二の前で手を高く伸ばす。
竜二はその体勢のまま後ろにボールを投げる。
そこにいたのは俺でスリーポイントシュートで入った。

それから少しして最終結果。
32対37で神谷・昇の勝利。

「それで直くん負けたよね」
「はい・・・ってちづ姉！見てたんですか！？」
ちづ姉が親指を立てて（グッ）とする。
見てたらしいです。

いつの間に！？
「直くんの行動など、全てお見とうしです！じっちゃんの名に賭けて！」
「俺のじっちゃん賭ける程凄い人じゃないしそれパクリだからっ！！」
「駄目だよ直くん。人気を取る為には色んな物に乗らなくちゃ」
「そっちの方が駄目だから！っていうかちづ姉、小説の事知ってたんですか？」
「天野くんに教えて貰いました」
ちづ姉が『えっへん！』と腰に手を当てる。
「という事で色んな物に乗っかりましょう！」
「駄目ですよ！」
「直くんだって乗ってるでしょう？」
「乗ってません」
「ソフ〇バンクに乗ってます！」
「違います」
「まだ、白を切るつもりですか？証拠が出ているんです！白状しなさい！そんな子に育てた覚えはありません！」
「なんか取り調べみたいになってるんですけど！？」
「・・・直くん、いつからこんな嘘付きになってしまったの？お姉ちゃんは・・・・・お姉ちゃんは・・・・・・・・・・お姉ちゃんは！」
「・・・・じゃあ、ちづ姉はこんな俺は嫌いですか？・・・・俺を棄てるんですか？」
「・・・・直くんっ！」
ちづ姉が俺を抱きしめる。
「そんな事しない！直くんを棄てたりなんかしない！・・・・いつまでも面倒は見るからね。直くん」

最終結果。

俺の逆転勝ち。

三十日目　代わり日

今日は五月四日。
祝日。みどりの日。

皆さん、おはようございます。

そちらの時間帯は何時ですか？

「直く～ん。お茶頂～戴」
今日は、一日ちづ姉の奴隷です。
何故？か、それはいつもちづ姉にばかり働いて貰っているので一月に一回世話係になるのだ。
ちづ姉はしなくていいと言っていたが『たまには千鶴に息抜きさせてあげろよ』とお父さんからの言い付けというかお父さんの家系は代々その言い付けを守ってきたらしい。
と言えば何か神秘的な事の様に聞こえるかもしれないがただの約束事だ。
「どうぞ」
俺はちづ姉にお茶を渡す。
最初は『お嬢様。お茶でございます』みたいなノリでやっていたがすぐに止めた。
べ、別に笑われたから止めた訳じゃないからな！
「ありがとう。直くん」
ちづ姉がお茶を受け取る。
一口お茶を飲んでからちづ姉が口を開く。
「・・・直くん。今日の晩御飯は何かな？」
「カレーです」
「ホントに！？やったぁ！」

ちづ姉はカレーが好きなので今日の晩御飯に作ります。

俺は食材を買う為、マルア〇に来ていた。

・・・・玉葱・・・人参・・・ジャガ芋・・・カレールー・・・・・

とこれぐらいかな？

「あの、カレーですか？」

「ん？」

俺は話し掛けられて振り返る。

黒嶋さん（娘）がいました。

「はい。黒嶋さんも晩御飯の食材探しですか？」

「はい」

「後はレジに持って行くだけですか？」

「いえ、まだ残っているんです」

「手伝いますよ」

「いえっ、そんな事して下さらなくていいです」

「行為は受け取っておくもんですよ」

黒嶋さんは少し考える・・・

「・・・では、お願いしてもいいですか？」

「いいですよ」

俺は黒嶋さんが食材を買うのを手伝ってから帰路についた。

黒嶋さんが作るであろう料理（食材で判断）はロールキャベツ。

「ちづ姉～。御飯ですよ～」

「は～い。今行きます」

「いっただきまーーーーす」
ちづ姉が口一杯にカレーを放る。
「・・・・・どうですか？」
俺がちづ姉に味を尋ねる。
「・・・・・・・・かっ！はらいっ！」
「何を言っているのか分かりませんよ」
やばい顔がニヤける。
ちづ姉が水が入ったコップに手を掛けたので・・・
「いっき！いっき！いっき！」
俺が一気コールを掛ける。
ちづ姉が水を一気飲みをする。
「もう一杯！」
「そんな大〇愛風に言われても無理です！」
仕方ない此処で引き上げるか。
「直くん！辛いです！お姉ちゃんのだけに何か入れたでしょ！」
「どうしてちづ姉だけだと？モグモグ」
「平気な顔で食べているじゃないですか！」
「食べてませんよ。何言ってるんですか？モグモグ・・・ゴックン」
「説得力無いですね！！？」

ちづ姉のだけにタバスコ大量投入です。

三十日目　代わり日（後書き）

お久しぶりですＢＪです。

『運命』の方、短編でも良かった連載が完結しましたのでそちらの方にも足を運んでくれたらなと思います。

はい。それでは、今日のゲストは！

・・・・・と言いたい所ですが

今日は報告だけでした。

すいません。

個人的に後書きの方が面白いかなと思います。

ゲストの方は・・・誰でも有りにします。

だから、天野竜二くんへの質問・意見じゃなくても良いんです。

例えば、西谷千鶴さんの質問・意見が有ったら今度のゲストは西谷千鶴さんです。

それでは！各キャラへの質問・意見等をお待ちしております。

また、お会いしましょう！

三十一日目　千鶴

今日は五月五日。
祝日。こどもの日。

「・・・・ねえ、直くん。昔の私を覚えていますか？」
ちづ姉の顔は真剣そのものだった。
いつもなら自分の事は『お姉ちゃん』なのに『私』ってだけでも真剣なのが分かる。
「・・・覚えていますよ」

昔のちづ姉・・・
ちづ姉は初めからこんな人ではなかった。
昔は話し掛けても睨んで来たり・・・悪い時は無理して見向きもしなかった。
俺はちづ姉の声を聞いた事がなかった。
でも、任された仕事（家事）はちゃんとしていた。
仕事をしていた時のちづ姉はまるで言われた事だけを黙々とするロボットの様だった。
愛想が悪かったのは俺にだけではなかった。
お母さん・お父さんにもだ。
でも、お母さん・お父さんは『仕方ない』と言って辛そうな顔でちづ姉を見ていたのを俺は覚えている。
初めてちづ姉の声を聞いたのは・・・・・・

「・・・じゃあ、お母さん・お父さん・直くん・私で冬休みにスキ

ーに行った時の事は覚えていますか？」
俺は頷く。
「あの日、直くんが遭難した事があったよね・・・あの時、私は直くんが決められた道を外していたのを知っていた・・・見ていたのに私は直くんを・・・・・見捨てた。ごめんなさい！謝っても許してくれないのは分かっています！・・・・・私は人殺しです！私はたった一人の弟を・・・直くんを殺した犯罪者です！」
ちづ姉が土下座をして謝っている。
「・・・ちづ姉・・・別に良いです。元々、道を間違えた俺が悪いんですから・・・・後、俺を勝手に殺さないで下さい」
俺はちづ姉に笑いながらそう言った。
「でも、殺した様なものなんです！私があの時ちゃんと『そっちは駄目』だと言っていたら直くんは・・・遭難しなかった！・・・・もし、あの日直くんが見つからなかったと考えると・・・恐くて・・・私は・・・」
「・・・ちづ姉・・・じゃあ許しますよ」
「えっ？」
ちづ姉が顔を上げる。
その顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた。
「許すと言ったんです。許してもらったんですからもう自分を責めない事、いいですね？」
ちづ姉が顔を下げる。
「・・・な・・お・・・・くん」
「なんですか？ちづ姉」
「・・・・・・ありが・・・・・とう！」
ちづ姉が俺にしがみつく。

「・・・・また、ですね・・・・ちづ姉」

あの日。
俺が見つかった後。
ちづ姉が俺に最初に言ってくれた言葉・・・・・・・・・・

『ごめんなさい』

三十二日目　様付け

久しぶりの学校登校。

俺は今、戦争をしている。

説明は以下の通りです。

今日、西谷家は弁当を作っていないのだ。
何故、作ってないのかはご飯を炊き忘れただけだ。
だから今日は購買でパンを買おうとしているのだが、購買の前には行列が出来ていた。
まさに『行列が出来る購買パン』だ。
西谷直哉は今その行列の中にいた。

「ぐあああぁぁぁぁ！！！」
俺は行列から追い出されました。
もう三回目になります。
俺が絶望に腹を空かせていると・・・・・・目の前にパンが出て来た。
やばいな。
もう幻覚まで見えてしまうぐらい腹を空かせているらしい。
「よかったらどうぞ」
不意に声を掛けられ俺は上を見上げる。
細い体の男性。
髪は黒。
眼鏡を架けている。

身長は岡崎ぐらいで結構低め。
若干この人の方が高いだろうか？
「・・・くれるの？」
俺の言葉に彼は頷く。
・・・・・・天使だ！
天より参られた天使様だ！
俺は彼の持っていたパンを平らげた。
・・・ふぅ・・もう、腹一杯。
「ご馳走様。ありがとうございます」
「いえっ喜んで頂いてこちらも嬉しかったから」
「君の名前は？」
「えっ！？・・・あっうん、日向（ひなた）　巳琉（みる）」
何で驚いたのだろうか？
「一年生ですか？」
日向が頷く。
「そうだよ。あなたも？」
「そうです。俺はC組なんですけど何組ですか？」
「A組。よろしくね」
「こちらこそ。パンまで頂いてありがとうございます」
「・・巳琉～・・・」
日向の後ろから巳琉だから日向を呼んでいる女の人がこちらに走って来た。
「あっ、梨華様」
梨華（りか）と呼ばれた人がこ・・・様ぁ！！？
俺は今、変な顔になっているだろう。
ってそんな事はどうでも良い！！
様って事はあれか？
お嬢様とかそんな部類の人なのか！？
何でお金持ちがこんな所に・・・
「・・・ハァ・・ハァ・・・巳琉！此処に居たの！？早くA組の教

室に！」
ご機嫌ようとか言わないんだ！
ちょっとショック。
「何かあったの？」
「喧嘩が始まって！大変なの！どうにかして！」
「・・・分かった。あの、ごめん」
日向が俺を見て謝る。
「別にいいよ。早く行ってあげて」
「ホント、ごめん！」
日向は走りながらも謝る。
「あっ！あなたの名前！まだ聞いてません！」
「西谷直哉！」
「わかった！じゃあ、直哉様また会いましょう」
「おう！」
・・・・・直哉様？
・・・・・

三十二日目　様付け（後書き）

お久しぶりです。

ＢＪです。

すいません。

少し訂正があります。

それは、各キャラへの質問・意見等は感想欄に書くのでは無く。

コミュニケーション用のメッセージで送って下さい。

ユーザ登録している人は出来ますよね？

わからない場合、出来無い場合は感想欄にでも構いません。

それでは、この小説を読んで頂いてありがとうございます。

では、メッセージの方もよろしくお願いします。

三十三日目　お願い（前書き）

西谷直哉は普通に学園を過ごしているので

日向巳琉視点です。

二日続きます。

三十三日目　お願い

ＭｉＲｕ　ＳＩＤＥ

・・・・・・可笑しい。
何かが可笑しい。
でも、それが何なのかはわからない。
・・・仕方ない。
あの人の力をお借りするか・・・

まあ、そんなシリアスな展開は無いけど・・・

「巳琉。少し良い？」
僕は後ろを向く。
梨華様だ。
梨華様は金髪でパーマを架けている。
身長は普通。
よく、お嬢様と間違われる。
見た目はツンツンしてそうな感じ。
「何でしょう？」
「人目が無い所で話したいのだけど」
「では、空き教室にでも行きますか？」
僕に梨華様が頷いた。

「・・・話って何でしょう？」
梨華様が僕を真っ直ぐ見つめる。
「・・・・・巳琉にお願いがあるの。本当の事だからちゃんと聞いて」
梨華様はそう前置きしてから・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・私と付き合ってほしいの」
告白？
「・・・・それって・・・・・・こ・・・・」
「違う」
・・・・ですよね。
そんな展開突然ですし。
それに梨華様は・・・
「・・・説明してくれますか？」
「・・・その・・デ、デ・・・デー・・」
梨華様の顔がほんのりと赤くなっていくのは気のせいでは無いだろう。
「・・・・デートですか？」
そう言うと梨華様の顔が真っ赤になった。
梨華様って・・・・知っていましたが意外と純情系。
付き合ってほしいというのは告白じゃない。
そして、デート関係。
それを聞いた梨華様の反応。
真剣な眼。
この四つから察するに・・・・推測が二つ出て来た。
「・・・デートに着る服？」
梨華様の反応は薄い。
という事はもう片方の可能性が高くなった。
もう一つは・・・
「・・・デート練習？」

そう言った瞬間。
梨華様がさらに真っ赤になった。
何処まで赤くなれば気が済むのだろう。
とにかく、どんな理由で梨華様が僕に話して来たのかは分かった。
それが梨華様にとってプラスになるのなら・・・
「・・・良いですよ」
僕が断る理由は無い。
「ありがとう」
この笑顔が見れるなら・・・

三十三日目　お願い（後書き）

お久しぶりです。

ＢＪです。

今日はゲストを呼んでいます。

天野竜二くんです！

竜二「うす！」

あのＣＭのやつですか？

竜二「ちげーよ！」

この小説を後に読むとこのＣＭの事わからなくなりますね。

竜二「だったら言うなよ」

う、うるさい！

存在消しますよ！

竜二「それだけは止めてくれ！」

どうしよっかなぁ～

竜二「頼む！俺はこの小説でしか出られないんだ」

・・・仕方ない。
土下座までされたら許すしか無いじゃないか。
竜二「あ、ありがとう！」
いえいえ、当たり前の事です。
・・・・・・・・・・・・それではさようなら。
竜二「えっ！？ちょっ待・・・」
はい、ドーン！！！
（プッッ）
・・・・・・・・・・・・・・・・はい、復活！！
竜二「てめぇ！やり・・・」
はい、ドーン！！！
（プッッ）
はい、復活！！
竜二「ごめんなさい」
分かればよろしい。
では、天野くんにお便りが来て・・・・ません。
竜二「来てねぇのかよ！！」

はい、ドーン！！！

（プッッ）

はい、復活！！

竜二「ごめんなさい」

分かればよろしい。
それでは皆さんお便り待ってます。
質問・意見等もそうですが虐めるのもありですよ。
何を言ってくれても構いません。
コミュニケーション取る用のメッセージでお願いします。
感想欄でも構いませんが・・・
それではまた明日お会いしましょう！！！！

竜二「さよ・・・」

はい、ドーン！！！！！

（プッッ）

待ってまーーーーす。

三十四日目　デート練習（前書き）

日向巳琉視点です。

三十四日目　デート練習

ＭｉＲｕ　ＳＩＤＥ

僕は今、駅前で待ち合わせをしています。
誰かが走って来る。
・・・梨華様だ。
「・・ハァ・・ハァ・・ごめん・・待った？」
現在の時刻。
１２：１１。
約束の時間。
１３：００。
遅れてないのにこの台詞。
これは僕を試しているのだろうか？
なんか溜息が出そう。
「・・・いえ、僕も今来たばかりだから」
そう言うと梨華様は笑顔になった。
何故？
喜ぶ場面などあっただろうか？
そんな事聞いてもはぐらかすだけだろうから聞かない。
「では、行きましょう」
梨華様が頷く。

デートと言ったら・・・・・何処だろう。
デートスポット等は梨華様が苦手だから却下で他にどういう所があるのだろう。
梨華様に聞いた方が良いかも・・・

デートの下見等はしておいた方が良いだろうから。
「梨華様は相手の人と何処でデートするの？」
「ひゃあ！！」
突然、梨華様が跳びはねる。
「どうしました？」
「う、う、う、うん。と、特に決まってない」
「そうですか」
決まってないのか・・・厄介かも知れませんね。
決まってないのは致命的です。
最終的に何処か不穏な空気になりやすいって聞きますから。
満足仕切れないんですよね。
なら・・・
「相手の好きな場所とか知りませんか？」
こちらが決めればいい。
相手がただ何処に行くか決まっているのならそこに行くに越したことはないけど決まってないのは駄目だ。
梨華様には成功してほしい。
「・・・わからない。相手は自分よりも相手を立たせるから自分を見せない」
「そうですか・・・では、何処でも良いですね。結構あれな遊園地でも行きますか？」
梨華様が頷く。
決まり、デートの練習場所は遊園地。

遊園地も終わり僕は梨華様を家まで送っています。
恥ずかしながら、途中からは自分が楽しんでしまった。

「すいません梨華様。デート練習なのに僕が楽しんでしまいました」
「ホントに！？」
何をそんなに驚いているのだろうか？
「はい」
僕は正直に答える。
すると梨華様は急に顔が赤くなっていく。
どうせ、相手と楽しくデートしているのを想像したのだろう。
そうしていると梨華様の家の前まで来た。
もうデート練習は終わり。
梨華様は走って家のドアノブに手を掛けた。
梨華様が僕を見る。
「・・・ありがとう。巳琉。私も楽しかった・・・じゃあまた」
そう言って家の中に入る。
僕は家に帰った。

一人玄関に背を付ける。
「・・・・・私・・・・どうしたんだろう・・・・変な気持ち・・・
す・・・・・なはずなのに・・・」

三十五日目　飲み会（前書き）

久しぶりの西谷直哉視点です。

三十五日目　飲み会

日曜日。
何故か店で飲み会をしていた。

「おらぁ、直哉飲めぇ」
竜二が絡んで来る。
一発、頭を叩いて竜二ＫＯ。
「気持ち悪いです・・・すいません。ちょっと席を外します」
岡崎がトイレに行こうと席を立ち上がるのを認めないのは奈穂さん。
「・・・・行かせないわ」
奈穂さん・・・あなたは何処まで酷い人なのだろうか・・・
「離してあげろ、な？」
昇が離す様に言うと奈穂さんは少し昇を睨んでから手を離した。
岡崎はフラフラとお座敷から出て行く。
「・・・・・・・・・・・・」
静かに黙々と酒を飲んでいるのは杞沙さん。
黒嶋さんは『用事があるから』と来ていない。

☆☆☆未成年がお酒を飲んだら駄目だぞ☆☆☆

「ただいま～」
俺が飲んだのはノンアルコールだから酔ってはいない。
杞沙さんは岡崎を送って行った。（岡崎は軽いから大丈夫）車で迎

えが来た。
奈穂さんは昇と帰路についた。
俺は竜二を家まで送った。
「お帰り」
俺はちづ姉に会わないで自室に戻る。
ベットに横になって、体の力を抜く。
今日は疲れた。
特に竜二が・・・重いし、ウザいし、酒臭いし最悪の三拍子だ。
俺が体を休めていると扉が開いた。
「直くん！酷いです！お姉ちゃんに会いに来て下さい！」
俺にシスコンになれと？
ハッキリ言おう。
そんな事になったらこの家が危ない。
それに俺は普通でありたい。
もう、俺も高校生だ。
いつまでも隣に居る訳がない。
・・・・・・・・・・・・・・・
それでも、一緒に居たい俺はシスコンなのだろうか？
「・・・ごめん」
「許しましょう」

三十六日目　丁半

「直哉！丁半しようぜ」
『丁半』
二つのサイコロを使って偶数が出れば『丁』奇数が出れば『半』
『丁』と『半』どちらが出るかを予想するギャンブル。
「いいよ」
こうして俺は丁半をする事になった。

「・・・・・半」
俺は悩んだ末『半』にした。
「丁ね」
奈穂さんは迷う事無く『丁』を予想。
「じゃあ俺も丁で」
昇は奈穂さんに乗る様な感じで言う。
「私は半でお願いします」
黒嶋さんは『半』を選択。
「・・・・・丁」
杞沙さんはいつも通り無表情で言う。
「じ、じゃあ僕も丁でお願いします」
岡崎は多分『丁』の方が多いからだろう。
さあ、答えはどうだ！
『丁』か！『半』か！

「・・・・・丁！」

竜二が答えを言って俺は外れて奈穂さんは当てる。
昇は奈穂さんと同じで当たって、岡崎は当たって胸を撫で下ろしている。
黒嶋さんは外れても普通だった。
俺もそうだが当てる気は元々無い。
杞沙さんは相変わらず無表情。
さすが奈穂さんだ。
その後も奈穂さんはどんどん当てる。
凄いなんてもんじゃない。
神の愛娘かもしれない。
神の愛娘というのはそのままで神様に愛された人の事を言う。
奈穂さんは百発百中をして見せた。

桜スポが配布された。
五月の行事は・・・
一つは、演劇でこれは説明いらないな。一年生はしない。
二、三年生で演劇をする。
一つは、文化祭で皆知っている事だと思うから説明はしない。
べ、別に説明出来ないって訳じゃないんだからな！
一つは、中間考査でいわゆるテストだ。
・・・これが五月の行事。

俺は家に帰った。
「直くん！手伝って！」
「何をですか？」
「これです！」

ちづ姉が見せたのは五月の行事にある演劇の台本。
「・・・それで何を手伝うんですか？」
「相手役です！」

相手役させられました。
深夜3時までさせられました。
ヤバい眠い。
お、休み～

三十七日目　雑談（前書き）

すいません。

かなり短いです。

三十七日目　雑談

演劇まで後三日。

「後三日やないか～い」
竜二と会話するのは俺。
「髭男○！！」
「ＦＡ？」
「ファイナルアンサー！！」
「ドルルル～ン・・・

（実は奈穂さんが書くのを止め・・・）
「直哉」
「はい！すいませんでした！」
無理です。
読者様に察して貰うしかない様です。

今日も演劇を手伝いました。

ハハハ・・・

三十七日目　雑談（後書き）

また来ました。

ＢＪです。

先にお詫び申し上げます。

今日は話が短くてどうもすいませんでした。

ｍ（＿＿）ｍ

ついでに言うと話が作れません。

読者様っ！

私に！

私にお力をお与え下さい！

今日はゲストをお呼びしております。

志賀夏希さんです！！

夏希「どうも」

はい。今日はよろしくお願いします。

夏希「あれ？」

どうかしましたか？

夏希「いや、ただ聞いていたのと違うなぁって」

・・・なんて聞いたんですか？

夏希「・・・魔王？」

・・・・・・・・・・・・・・・はい。西谷くんは主人公だから居るとして天野くんは消滅です。

夏希「それは止めてあげろよ」

・・・・仕方ないですね。志賀さんがそこまで言うなら・・・でも何か気に入りません。志賀さんが天野くんの肩を持つなんて・・・私、実家に帰らせて頂くわ。

夏希「おい、待てよ」

フフフッこっちだよ～。捕まえてごら～ん。

夏希「ハハハッ待てぇ～」

（波打際で追いかけっこをしています）

夏希「って何やらせよんじゃあ！！」

おおっ！ノリツッコミですか。さすが志賀さん凄いですね。惚れそうです。

夏希「・・・・・そうか、どうも」

・・・あの、志賀さん？そこは照れる所だと思いますが。

夏希「・・・なんでだろう。あいつから言われたら暑くなるのに・・・」

・・・誰ですか？それ。

夏希「あっ、いや、何でもない」

・・・・・・・・・志賀さんって彼に惚れてしまったんですね。

夏希「別にそんなんじゃねぇよ！・・・・ただ・・・」

ただ？

夏希「・・・・・・・・・」

・・・志賀さん。顔が赤いですよ。

夏希「えっ！嘘！？」

・・・・・・その相手本編では絶対に出しません。

夏希「あ、ああ！そうしてくれ！」

・・・彼の立ち位置を知ってしまった僕であった・・・

夏希「あっ！そろそろ時間だな」

そうですね。それでは志賀夏希さん・・・ありがとうございました！

夏希「おう。じゃあな」

・・・・・それでは、各キャラへの質問・意見等を待っています。

同じキャラでも構いません。

西谷直哉くん・志賀夏希さんでも良いという事です。

それではまたお会いしましょう。

俺、告白もしてないのに失恋かぁ～。

まっ、仕方ないか！

この怒りはどこにぶつけよう・・・

三十八日目　ラブレター

「直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！直哉！」
「竜二、うるさいっ！！連呼するな！」
「これを見ろ！」
「近くて見えないから！」
俺は竜二を引き離して竜二が持っていた物を手に取る。

茶封筒？

俺は茶封筒の裏を見る。
そこには、『矢口　真尋より』と書いていた。
矢口（やぐち）　真尋（まひろ）・・・誰？
「どうだ直哉！ラブレターだぞ！」
竜二がハイになってる。
ウザい。
ラブレター？
嫌、違うだろ。
これは・・・予告状だろ。
『明日、１８時。天野竜二を殺す』
的な、
「あなたにラブレターなんて渡す訳無いわ」
奈穂さんが茶封筒を見る。
「・・・矢口・・真尋・・・・・あの？」

「知ってるの？」
「ええ、私が知ってる真尋ならね」
奈穂さんって顔が広いんだなぁ。
「とにかく中を見てみない？」
（ビリビリッ）
奈穂さんが破っちゃいました。
さすが奈穂さん。
そんな事する人、奈穂さんぐらいだよ。
竜二はあまりのショックで呆然としていた。
「何々、突然の手紙で大変驚いた事ですよね。すみません。
直接お話した方が良いとは思いますが、目の前だと私はとても話せませんので手紙に書く事をお許し下さい。
私、矢口真尋はあなた、天野竜二くんに恋をしました。
出会いは修学旅行最終日で天野くんにナンパされた日です。覚えていますか？
私は天野くんに一目惚れしました。
天野くん、好きです。付き合って下さい。

矢口真尋から天野竜二くんへ

」
・・・

「・・・本人が書いたとは限らないわ。明日の１８時に期待するといいわ」
「何で明日の１８時？」
「さっきは言ってなかったけど・・・」
そう言って俺達に手紙を見せる。
竜二が手に取って見る。
「・・・・・・Ｐ．Ｓ・・・・って何の略だっけ？プロモーションサツエイ？」
「違うよ！ＰｏｓｔＳｃｒｉｐｔ（追伸）だよ！！後ボケがイマイチ！そんな事はどうでも良いから追伸で何て書いてたの！？」
「えーと、Ｐ．Ｓ・・・明日の１８時に会いに行きます・・・・よっしゃあああああぁぁぁ

ハハッハッ・・・

演劇まで後二日。

三十九日目　竜二

「来たぜ！１８時！」
「じゃあ俺達は隣の教室に居るから」
「おう！」
俺達（俺・昇・奈穂さん）は隣の教室（１－Ｂ）に行った。

暫(しばら)く待つと彼女が来た。
「あの人が矢口真尋さん？」
「そうよ」
矢口真尋。
髪は黒で長いストレートヘアー。
眼鏡を掛けている。
身長は普通。

ここから台詞だけにします。

「突然すみません」
「いえ、謝る事ないですよ」
（紳士的！？）
（格好良くしてもどうせばれるくせに意味ないわ）
（格好付けたい年頃だからな）
（昇、大人っぽい）
（電車、大人料金だから直哉も大人だな）
（・・・ボケ？ツッコミ所満載なボケだね）

（・・・・・・・・・・・）
「あの、手紙・・読んで頂けましたか？」
（読んでなかったらこの状況可笑しいよね？）
（そこはツッコミ入れる所じゃないわ）
（そうだよね）
「お返事聞かせて頂けますか？」
「・・・良いぜ。付き合っても」
（来たぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！）
「ありがとうございます！」
「じゃあ、アドレス教えてくれ」
「はい！」
（おめでとう矢口さん！そして、竜二・・・・おめでとう）
（・・・感動しないのは俺だけ？）
（昇だけではないわ。私もよ）
（まあ、結末読めましたしね）
（そうだよな）
（・・・乾杯する？）
（『初彼女ゲット』ってテーマでかしら？）
（初彼女ではないですけど・・・）
（・・・彼女居たのな）
（まあー、本人達が恋人同士だって言ってただけですけど）
（どうゆう意味？）
（皆は認めてないって事）
（どうしてかしら？）
（・・・これ言って良いのか？・・・・竜二と竜二の妹が恋人同士だったんです）
（今は違うのか？）
（・・・妹はもう居ません）
（それって・・・死ん・・・）

（そう。元恋人としては嫌じゃないのかしら？）
（妹から別れを告げたらしいです）
（・・・・・・・・・・・）
（教えた事、秘密にして下さいよね）
（ええ、わかったわ）
（わかった）
（じゃあ、そろそろ竜二を迎えに行きますか？）
（ああ）
「ここに居るんだけどな」
「・・・・・・・・・・・・・」
「直哉」
「ごめん」
「別に良いけどな」

今日も演劇練習に付き合いました。

演劇は明日。

四十日目　演劇（前書き）

笑い無し・面白さ無しです。

後ほど話関係がありますので見て下さい。

期待は絶対しない事です！

すみません。

m（＿＿）m

四十日目　演劇

「じゃあ、直くん。行って来るね」
「頑張ってね」
「うん！」
ちづ姉が走って体育館に入るのを俺は見送る。

「大変長らくお待たせしました。それでは、三年生A組・B組・C組の演劇オリジナル『雪月花』です」

「直哉。千鶴姉さんは何組だ？」
「ちづ姉のクラスはB組だった気がする」

ブーーーーーーーッ
知らせの合図と共に壇上の幕が上がる。

「続きまして・・・二年生A組・B組・C組の演劇『白雪姫』が始まります。どうぞ、お楽しみ下さい」

「続きまして・・・二年生Ｄ組・Ｅ組・Ｆ組の演劇『桃太郎』です」

「続きまして・・・三年生Ｄ組・Ｅ組・Ｆ組の演劇オリジナル『桜並木』です」

「以上で二・三年生による。演劇は終了とさせて頂きます」

四十日目　演劇（後書き）

オリジナル作品・・・

『雪月花』

『桜並木』

もし見たい方がいらっしゃいましたら感想の所ｏｒメッセージで下さい。

１０票以上ありましたら別の作品として書きます。

よろしくお願いします。

普通、どんなのかわからないのに見たい何て思わないですよね・・・

（｀∀´）

これからもよろしくお願いします。

＼（＾ー＾）／

四十一日目　歓迎日

『かんぱ～～～～～い』
俺の部屋で皆がグラスを交わす。
「竜二。おめでとう」
「おめでとうございます」
「おめでとう。竜二」
「天野くん。おめでとうございます」
「・・・・おめでとう」
「ありがとう、皆！」
俺・黒嶋さん・昇・岡崎・杞沙さん・竜二が順番に祝ったり感謝したりしている。
竜二が奈穂さんを横目で睨む。
「おい。おまえも何か言ったらどうだ？」
「・・・彼女も呼んであげないのかしら？」
どうしても奈穂さんはおめでとうを言いたくないらしい・・・
竜二の代わりに俺が答える。
「当分こういう風に集まったり出来ないだろうから、今日はいつもの僕達だけで祝おうという事でこうなったんですよ」
「・・・そう」
奈穂さんはそう言ってからもう口を開かなかった・・・
「よし！皆！」
竜二が勢いよく立ち上がる。
「・・・・・・・飲むぞぉーーーー！！！」

『おぉーーーーーー！！！！』
今日は竜二の歓迎日なので皆が乗る。

ＲＹＵＺＩ　ＳＩＤＥ

「今何時だ？」
携帯電話を開いて時間を確認する。
１１時４５分。
今日は泊まりで皆が寝ている中、一人だけ居なかった。
「・・・あいつ・・・何処に行ったんだろう？」
『あいつ』だけは名前で呼んだ事無かったっけ？
呼びたくない訳じゃないが最初があんなのだったから名前で呼ぶのが恥ずかしかっただけ・・・
今まで名前じゃなかったからもう名前で呼ぶ事は無いだろう。
「・・・・なんか最後の別れみたいじゃねぇか」
俺は頭を冷やそうと外に向かう。
直哉の家の玄関の扉を開ける・・・と、

あいつが居た。

あいつの事を考えていたから正直、話しにくい。
玄関前の階段に座りながら・・・
い〇ごオレを飲んでいた。
「プッ」
しまった！
笑ってしまった。
俺の吹き出しにあいつが振り向く。
「・・・・・よっ」
「いつから居たの？」
「ついさっき」

「・・・そう」
あいつはそう言ってまた、前を向く。
「おまえがいち○オレなんか飲むんかよ」
意地悪っぽい言い方になったが別にそういうつもりで言った訳じゃないが、昔からそういう癖があった。
「私も飲みたい時があるわ」
「そうかよ」
「そこに居ないでこっちに来たら？」
あいつが自分の隣を手で叩く。
優しい・・・なんでだ？
何か企んでいるんじゃ・・・
罠かもしれないと思っているのに、負ける気がして急いで座る。
「「・・・・・・・・・・・・」」
何故か二人共黙ってしまった。
何か言わなければ！
何かを言わなければ！
負けてる気がする！
「えーと、あれだ！あれ・・・そういうのも結構良いかもしれないぞ」
「何が？」
「いちご○レを飲むのも！なんかこうギャップ感が良い！可愛いというか何と言うかその・・・」
俺が慌てているとあいつが少し笑顔になる。
「彼女がいるのにそういう事言うのね。あなたは馬鹿だわ」
「なにぃ！？」
あいつは俺を無視して携帯電話を開く。
「・・・まだ、大丈夫だわ」
「何が？って言うか無視するんじゃねぇ！」
「・・・まだ、言ってなかったから・・・・・おめでとう」
「えっ？なんて？」

あいつは俺の質問に答えないで直哉の家のドアノブに手を掛ける。
「じゃあ、お休み」
そう言って家の中に入って行った・・・
「人の質問に答えろーー！！」

四十一日目　歓迎日（後書き）

天野竜二くんと秋葉奈穂さんのイメージを壊したらすみません。

m（＿＿）m

四十二日目　尾行

「・・・奈穂さん。俺達は何故ここにいるんですか？」
「尾行する為に決まってるわ」
「そんな断定みたいに言われても・・・」
「奈穂。お前が人に興味を持つなんてな。驚いたな」
「俺も昇と同意見です。奈穂さんは人に興味を持たない人だと思っていたんですが・・・」
「二人の言い分も分かるわ。現に私は人に興味はないわ」
「「ですよね～～～」」

読者様に現状を説明します。

いきなり奈穂さんに呼び出されました。

待ち合わせ場所には奈穂さんと俺と昇。

奈穂さんから俺達にグラサンを配布。

奈穂さんに付いて行くと竜二と竜二の彼女、矢口真尋さんがデートをしていた。

奈穂さんの一言で現状を知る。

「尾行するわよ」

つまり、竜二と矢口真尋さんのデートを尾行するらしい。

その為に俺達を呼んだと・・・

以上で説明終了します。

「・・・奈穂さん。何故にグラサン掛けてるんですか？」
「必要不可欠だからよ」
「逆に目立つと思うんですけど・・・ほら、皆さん。僕達を横目で見てますよ」
昇が俺に同意する。
「そうだな。電柱でこそこそしてたら怪しまれるのが普通だな」
「グラサンは顔を隠すつもりで掛けている訳ではないわ」
「じゃあ何でですか？」
「雰囲気でないでしょう？」
「「・・・・・・・・・・・・・・」」

竜二を追って・・・

今、遊園地に来ていた。
「初めてのデートで遊園地は駄目だって聞いた事があるんですけど・・・」
「どうして何だ？」
「忘れました」
「・・・・・・・・」
「それで、どうするのかしら？」
「「何を？」」
「二人はジェットコースターに乗ったわ。私達も乗る必要はないわ」
「じゃあ、何処かに座って寛ぎましょう」

俺達は近くのレストランで寛ぐ。
「気になってるんですけど・・・何故にこの時間帯に遊園地に来たんでしょう？」
今の時刻。
６：１８。
「さあー、他にやる事がなかったとかじゃないか？」
「どうでもいいわ」
「そ、そうですか・・・」

あれから色々回って最後の観覧車。
俺達も乗る事にした。

ＲＹＵＺＩ　ＳＩＤＥ

俺と真尋ちゃんは向き合う様に座る。
「どうだった？」
「お蔭様で楽しめました。ありがとうございます」
「最初は驚いたぞ。遊園地に行った事が無いなんてさ」
「お恥ずかしい限りです。デートの途中に遊園地に行きたいなんて言ってすいません」
真尋ちゃんが頭を少し下げる。
「別にいいぜ。特に行く所は決まってなかったし、逆に助かった」
真尋ちゃんが恥ずかしそうに微笑む。
「「・・・・・・・・・・・・」」
沈黙が流れる。

俺は真尋ちゃんの隣に座る。
すると、真尋ちゃんが肩を小さくする。
俺は真尋ちゃんの後ろの鏡に手を当てて・・・・・
「・・・い、嫌です！」
真尋ちゃんが俺を引き離す。
「真尋ちゃん？」
俺は驚きながらも理由を聞こうとした。
「ごめんなさい。まだ、一日目なので気持ちやら何やらでいっぱいで・・・」
真尋ちゃんが頭を下げて謝りながら理由を説明する。
俺はそれを呆然と見ていた。
「だから・・・もっと、仲良しになってからでお願いします」
真尋ちゃんが今度は深く頭を下げる。
俺は・・・何を急いでいるんだ？
純粋な真尋ちゃんが一回目のデートでキス出来るはずがない。
ちゃんと手順と時間を掛けて行かないと・・・
「ごめん。もう大丈夫だから」
「ごめんなさい」
「大丈夫だって・・・ハグも駄目か？」
真尋ちゃんは俯きながら首を横に振る。
俺は今度は失敗しない様にそっと彼女を抱き寄せた。

四十三日目　ほんの少しの勇気（前書き）

西谷直哉くんは何もない一日を住ごしたので、黒嶋西佳さん視点でお送り致します。

四十三日目　ほんの少しの勇気

ＳＥＩＫＡ　ＳＩＤＥ

うぅ、どうしよう・・・
困ってそうですし、でも、いきなり行って引かれたりしないでしょうか？
話し掛ける勇気もありませんし・・・うぅ・・・
深呼吸して気持ちを落ち着かせる。
大丈夫、大丈夫。
私は決心してあの方に歩を進める。
足が鉛みたいに重たく感じる。
要らないと言われたらどうしよう・・・
近付くに連れて段々ネガティブ思考になって行く。
胸を強く叩いて気を静める。
あの方の目の前まで行って深く息を吸い込む。
・・・・・・・・・・・・・・・
大丈夫。
「あの・・先、生。お、持ちし、ます」
（武中）先生の反応はどうでしょうか？
怖くて顔を上げられない。
私が肩を強張らせているといつもの優しい声で・・・
「ありがとうございます。黒嶋さん。でも、重いですよ？」
私は首を何度も縦に振る。
「では、お願いします」
（武中）先生は手に持っているクラスの皆に配る紙を私に三分の一の量を手放してくれました。
「・・は、い・・」
私はその紙を腕で抱き上げる様に持ち上げる。

「黒嶋さんはきちんと勉強をしていますか？」
「あっ、は、い」
「そうですか。わからない所がありましたら先生に聞いて下さい。数学だけですけど、他は致命的ですので」
「そん、な事、無いで、す」
緊張して上手く話せないのに（武中）先生は嫌な顔一つしない。本当に優しい先生です。
「あ、の・・・一、つ聞いて良、いで、すか？」
「はい、良いですよ？何でしょうか？」
「そ、の先、生は・・・・す・・・・・・・」
「す。何でしょうか？」
「・・・す・・・・す・・・・・・・や、やっぱり良いです！すいま、せん。先に行ってます！」
私は全力で廊下を走る。
聞けない。
もし、居たとしたら・・・
絶対にいます。
あんなに優しい先生を・・・

『好きな人は居るのでしょうか？』

何て聞けない。

私は弱虫だから・・・

四十三日目　ほんの少しの勇気（後書き）

当分、ネタが無いのでお休みにします。

『俺のハーレム集合っ！！』

は更新致しますけど・・・

（´∀｀）

『俺の学園生活』

はネタを無理矢理作ってもギャグが書けないのでちゃんとしたネタを作れるまでお休みとなります。

すみません。

m（＿＿）m

明日、更新するかも・・・

いつ更新するかわかりませんのでよろしくお願いします。

＼（＾ー＾）／

四十四日目　事件（前書き）

遅れて申し訳ありません。
m（＿＿）m

四十四日目　事件

俺は背伸びをして体をほぐしていると……
「直哉ー！　あの事聞いたか？！」
俺は竜二が居る方向の耳、つまり右耳を手でふさぎながら「何がだよ」と言った。
「昨日の夜ここで殺人事件が起きた事だよ！」

「……それで、その話の信憑性は？」
竜二が「それは……」と言っている側で奈穂さんが「大分高いわ」と腕組みをしながら言った。
竜二は俺の横に立って奈穂さんは俺の机に寄り掛かっていた。
「……そうですか……」
「おい。言っとくが俺は殺ってねぇからな」
「わかってるよ。こんな状況で冗談言う程バカじゃない」
「ならいいけどな」
「それで誰なんですか？」
一時的に皆が押し黙った。
俺が「どうかしたんですか？」と聞く前に後から来た昇が「黒嶋西佳だな」と言った。
俺達は呆然としていた。竜二も知らなかったらしい。そういえば今日は黒嶋さんを見ていない。黒嶋さんは転校初日から学園に来るのは早かったのに。
だが、昇の次の一言で安堵した。
「……と言っても死んではいないけどな。今は安静の状態らしいな」
昇がいつから俺達の会話を聞いていたのか、竜二に「だから殺人事件じゃなくて未遂だな」と後付けした。

「誰が犯人なんだ？」
これに答えたのは奈穂さんだった。
「今のところはわからないわ」
「ただ……」と勿体振った言い方を奈穂さんはした。
「男らしいわ」

今のところ分かるのは犯人は男。この学園の生徒の確率が高いという事。この学園は塀（へい）が高いし塀を乗り越えられても大丈夫な様に塀の内側には溝があった。溝の奥には少し高い壁があって俺達がその溝にはまらない様に作られた。言わばここから先は行けないバリアの様な物だった。昔この塀を昇って学園内に入った者が居るらしく、それでこの対策を考案されたらしい。凶器は家庭科室の包丁らしい。家庭科室に置いてある机の上に無造作に捨てられていて家庭科室にあるはずの包丁が一本なくなっていたらしい。凶器に使われたであろう包丁を入れると数がぴったしだった。黒嶋さんを発見したのは学園の生徒だった。その生徒の証言だと脇腹から血が大量に出ていたらしい。今警察が来て一人一人取調べを行っていた。さすがに一日で全員と会話するのは無理があるのとこんな状況では勉強が教師も生徒も身が入らないので今日中に取調べをする人だけを置いて今日は自宅待機になった。

帰宅途中にちづ姉と会った。
全学年強制帰宅になったので別におかしくもなかった。
ちづ姉の顔は重苦しい感じを背負っていた。
俺は何も言わずに……いや、何も言えずに帰宅したのであった。

俺とちづ姉の二人は居間に行って椅子に座っていた。
沈黙を破ったのは俺だった。
「……聞きましたか？」
ちづ姉はその言葉にハッとして俺に驚いた顔を向ける。
だが、すぐに暗い顔をして俯いた。微かに顔を縦に動かして頷いて見せたのは気のせいではないだろう。
俺はまた事件の事を考えていた。
そこで俺はふと、疑問を持って思い切ってちづ姉に聞いてみた。
「どうして犯人が男だと思ったのでしょうか？」
ちづ姉はしっかりと答えてくれた。
「……最初に黒嶋さんを発見した生徒が言ったんです。……発見する前に男とぶつかったと……」
「……そういえば発見場所はどこだったんですか？」
「……その生徒の教室……１－Ａだそうです」
この後にちづ姉があの事件について知っている事を聞いたが俺が聞いたのと何も変わっていなかった。

四十五日目　事情調査

今日は俺達、B組が事情調査を受ける事になった。
俺は俺の番が来たので教室の自分の席を立ってから教室を出た。

「……失礼します」
俺は応接室の扉を二回ノックして断りを入れた。
まさか、応接室に入る日が来るとはな……
俺はそう思いながら、また「失礼します」と言って中に入りながら言った。
応接室に入ってまず目にしたのは私服姿であろう見知らぬ人物一人だった。
その人は「どうぞ、座ってください」と自分の前のソファーに進めた。俺がそこに座ると「わかってると思いますが……」と言って俺に警察手帳を見せた「警察の赤西です。君の名前を教えてくれるかな？」
。
赤西という人物はつり目をしていて顔はニコニコと笑顔を振り撒いていた。
多分、俺達を怖がらせない様に笑顔でいるのだろうが不気味で逆効果だった。
俺は「西谷です」と手短に答えた。
入って来た時には気付かなかったが応接室の扉の所に俺達B組の担任（武中）が居た。
武中先生は不安そうに何度も腕を組み直したりしていた。
「どうかしましたか？」
不意に赤西の声が聞こえ、俺は赤西の方に目線を変えて「いえ、なんでもありません」と答えた。

「西谷君の学校は楽しいかい？」
「程々に」
「そうか……。じゃあ西谷君は部活とかしているのかい？」
俺達をリラックスさせる為にこんな雑談をしているのだろうが大して意味がない。俺は「してません」と答えてから「本題に入りませんか？」と先を急がせた。「こんな無意味な事は面倒くさいだけだ」と言葉には出さないが心の中で呟いた。怒らせて目をつけられても困るしな。
赤西は俺を一秒程見つめてから「わかりました」とだけ言って机に置かれた湯呑みを口に持っていき、中身を喉（のど）に通した。
「……では早速。昨日の朝、何時頃に起きましたか？」
「６時頃です」
「……では、黒嶋　西佳さんという人をご存知ですか？」
「知ってるも何もクラスメートなんですから知ってます」
「それもそうですね。……では、黒嶋西佳さんが恨みを買ったとか中が悪い人か何か知りませんか？」
「知りませんし、転校して来たばかりですからそういうのはないでしょう」
「……では次に。黒嶋西佳さんが何時頃にいつも学校に来ているかとかはご存知ですか？」
「知りません。少なくとも７時５０分には居ます」
「ほおー、何故です」
「その時間帯に俺が学校に来てます」
「なるほど。……では、今日はこれだけでいいです。大変参考になりました。ありがとうございます」
警察は手帳を胸ポケットから出して何か書き加えた後、手帳を胸ポケットしまった。
俺は立ち上がってから一礼して応接室を出ようとした時に赤西が「ああ、一つ聞き忘れてました」と言い出した。
俺は赤西に振り返り「なんですか？」と尋ねると、赤西は相変わ

らずの不気味な笑顔で「最近何か変わった事とかありませんでしたか？　黒嶋西佳さんでもですが西谷君の事と両方です」。
「特にないです」とだけ答えて「他に何か？」と尋ねた。
「いえ、それだけです。ありがとうございます」
俺は応接室を後にした。

クラスメートに何を聞かれたのか聞くと皆同じ様なことだった。
そして、どこから聞いて来たのかこんな情報が届いた。
「……おかしな事に犯行後の教室には机一つ動いてなかったらしいぜ」
「つまり、争ってないのか抵抗もなしにやられたのか黒嶋さんを刺した後で机を綺麗に並べたのかこのどれかだと俺は思う」と俺は言った。
「そういえば……」と俺は口を開いた。
「……どうして犯人は黒嶋さんを殺さなかったんだろう？」
「は？」
竜二にもわかる様に俺は質問という形の説明を始めた。
「まず最初に、なんで犯人は黒嶋さんを殺そうとしたんだろう？」
「そんなの決まってるだろう。何か恨みがあったんじゃねぇのか？」
「黒嶋さんは転校して来たばかりだよ？　それはないと考えてもいいと思う。次になんでB組じゃなくA組の教室で犯行に及んだんだろう？　わざわざA組の教室でするのは黒嶋さんを連れて来なくてはいけない」
「知るかよ。たまたま黒嶋が居たとかじゃねぇの？」
「俺はこう思うんだ。犯人はなんらかの理由でA組に居て黒嶋さんに見られたくないものを見られたとか……。それなら犯行がA組で行われたとしても合点がいく」
「見られたくないものってなんだよ」
「俺が知ってるはずないだろう。そしてここからが問題なんだ。ど

うして犯人は見られたくないものを見た黒嶋さんを生かしたのか」
竜二はしばらく考えるそぶりを見せながら「わからん」と自信たっぷりに言った。
「殺すのが怖くなったとかが考えられるわ」
奈穂さんが竜二の代わりに答えて昇に渡る。
「脅しのつもりが刺してしまったとかな」
俺は二人に頷いて見せた。
「あと、誰かが近づいて来たのを知って途中で逃げたとかかな。多分、この三つのどれかだと思う。じゃあこれでさっきの中の一つは潰れるね」
「「は？」」
竜二と昇の声が合わさった。
奈穂さんは最初こそ頭を捻っていたがすぐに「なるほどね」と俺が言いたいことがわかったらしい。
「さっきの情報は何か覚えてる？」
俺の質問に竜二と昇は上を見ながら思い出そうとしている様だ。
「「ああ、覚えてるよ」」
「机が綺麗に並んでいたという奴よ」
と奈穂さんが言うと「わかってるって言っただろ」と竜二が睨みつける。
「その時に俺の推測はなんて言った？」
しばらく止まる二人だったが昇が「ああ、なるほどな」と言った。ここまで言ってもわからない竜二に俺は説明を続けた。
「こんな事を言ったはずだよ？　机が綺麗に並んでいたのは争っていなかったのか抵抗もなしにいきなりやられたのか黒嶋さんを刺した後で机を並べ直したのかって」
「ああ、だから？」
どうやらまだわからないらしい。
「そしてその後俺が出した質問に俺達が出した推測が外れてないとしたら？」

「……？」
ここまで来てもわからないらしい。
「俺達が出した推測は全て机を並べ直す事は出来ないんだ」
「……いや、待て出来るぞ！　確かに直哉が言った推測は無理だがこいつと昇の推測では出来ない事もないぞ」
竜二は奈穂さん、昇と順に指差しながら言った。俺はそれに答える。
「まず奈穂さんの推測は　”殺すのが怖くなった”　だろ？　こんな心境じゃあ冷静に机を並べ直すはずがない。すぐにそこから逃げたくなるだろ。次に昇だけど、昇の推測は　”脅しのつもりが刺してしまった”　だ。これも奈穂さんと同じで机を並べ直す心境じゃない」
俺が説明しても竜二は「う～ん……」と唸っていた。
突然昇が「あっ」と何かを思い出した様な声を出した。俺達は昇に目線を向ける。
「そういえば、A組の奴は第二音楽室で授業らしいぞ」
とご丁寧に報告してくれた。
「……なぁ、昇。……お前B型だろ」
「？　まあー、そうだが。何で今それを聞く？」
「……いや、何となく」
あ、これを見たB型の方、すいません。怒らないでください。

事件からたった一日でも、授業はやらないとこの先が厳しいと授業は再開になった。
この後、事件推定時刻がわかった。
午前６：１０～午前６：５０らしい。
刑事が話しているのを生徒が聞いてこの情報を広めたらしい。
この事件推定時刻を割り出せたのは多分、血の量だと思った。

黒嶋さんはまだ意識も戻っていないらしいが命に別状はないとの報告を俺達は担任から聞いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4512i/

俺の学園生活

2011年9月22日15時17分発行